

THE COMPLETE FIRST SEASON

THE Peke FILES

Little Mustapha

LMB Entertainment

"the Peke Files "

the Complete 1st Season

Book #3

Little Mustapha

## 主な登場人物

オックス・モオルダア・ムスタファ

F.B.I. (エフビーエル) 特別捜査官。自称優秀な捜査官。天才的推理と「少女的第六感」で数々の難事件を解決……するののか？

苦手なものとはたくさんあり過ぎてここには書ききれない。

始め彼の名前は「オックス・モルダア・ムスタファ」ですが、諸事情により、#005 「殺人豆」から名前が変わります。詳しくは本編を参照。

ダナア・スケアリー・ザ・プリンセス

モルダアのパートナー。死体を切り刻むのが大好きな検死官（無免許）でもある。

自分はセクシーでゴージャスであると言い張っている恐怖の女。

アンタモ・スキヤナー

F.B.I. 副長官。モルダアたちから指示を出す人。モオルダアをおどかすことに情熱を燃やしている。チョコレートと塩辛いものが大好き？

毛が薄いので髪は短くしている。ハゲを隠さないといういさぎよい一面もあるということ、なの？

怒百目鬼 鐵円（ドドメキ テツマル）

謎の人物。時々登場する予定。

始めは警部の肩書きで登場する予定だったが、それだと話がややこしくなるので取りやめに。今のところ全てが謎に包まれている。

ウイスキー・ドリンキングマン

常にウイスキーをラップ飲み。闇の組織の一員。裏で糸を引く男。色々たくらむ男。

## その他

エピソード毎に紹介。

## #006 サマータイム (第一話)・C'est la Vie

1

警察署 静岡県下田市

真つ暗な部屋の中から窓の外を眺めている。今年の太陽はやけに張り切つていつもより何倍もその光の輪を広げているように思える。窓の外には太陽の熱に照らされた真つ白な世界が広がっている。セラビ刑事のような年寄りには少し応える暑さであつたが、そうも言つていられない事件が起きたようだ。

電話で事件の知らせを受けた背裸<sup>セラビ</sup>刑事は、持つていた受話器を半分たたきつけるようにして電話機の上に置いた。彼が刑事になつてからずっと追いついてくる連続殺人事件がまた発生したのである。彼が刑事になつたのが何時のことかという、もう三十年近くも前である。三十年もの間連続殺人事件が起こつていたとしたら、これはちよつとしたギネスものであり、犯人は伝説的な殺人鬼ということになるだろう。そして、そんな事件をマスコミが放つておくはずがない。しかし、誰もそんな事件のことを知らないのは、この事件を連続殺人事件と考へているのはセラビ刑事ただ一人だからである。

セラビ刑事はあと何年かすれば定年という歳にしてはキビキビとした動きで上着を着ると、事件現場へと向かつた。彼は事件が起きるたびに、まだ手がかりすらつかめていない犯人の顔を思い浮かべる。そしてそのたびに想像の中の犯人は彼の無能さをあざ笑つているのだ。この犯人逮捕への執念が彼を何時までも若いままにしているのかも知れない。警察ではセラビ刑事の追つている事件の被害者の死因を事故死、或いは病死として処理している。これらの被害者の死因については不可解な点が多いものの、セラビ刑事の独断だけで連続殺人事件としてしまうのは問題があつたようだ。そのためマスコミも大々的に事件を報じることはなかつた。地元の嗜好きの連中はこの事件を何かの祟りだとか、妖怪の仕業だとか、本当に殺人事件なのだとか言つて話を盛り上げている。それから世の中には、こういった不可解な事件の犯人が宇宙からやつて来た知的生命体の仕業だと思つてしまいがちな人間もいる。

エフ・ビー・エル、ペケファイルの部屋

モオルダアは一人で椅子に座り何かの資料を嬉しそうに眺めている。何が嬉しいのかは良く解らないが一人でニヤニヤしているモオルダアはとても気味が悪い。そこへ疲れた顔をしたスケアリーが入ってきた。

「あーあ、ホントにイヤになつてしまいますわ。こうジメジメしていると、あたくし休暇を取つて南仏の別荘にでも行くかしら・・・」

ここでスケアリーはモオルダアのニヤニヤに気付いた。

「ちよいとなんですの？ 気持ちが悪い。あなたもしかして変なキノコでも食べたんじゃないでしょうね」

「変なキノコは食べてないけど、変な事件が起こつたんだよ。しかも、警察の方ではこれまでのボクらの活躍がかなり評判らしくてね。是非とも協力して欲しいって言つてきたんだ。やつぱりボクみたいな優秀な捜査官は引つ張りだこなんだなあ」

それで嬉しかったのね・・・。それにしても、今までそんなに活躍していたのかどうか、私には良く解りませんが。スケアリーはどうでもいいといった感じで椅子に深く腰掛けた。

「それで、何が起きたと言うんですの？ もう虫はイヤですわよ。気持ちが悪いから」

「キミはキャトル・ミューティレーションつてしつてる？」

モオルダアのこの一言でスケアリーの表情が曇つた。この人はまたくだらないことを言っていますわ。そんな感じ。

「それつて昔流行つたやつでございましょう？ 牧場で牛が死んでいて調べてみるとその牛から血液と内臓がなくなつていたつていう。それが宇宙人の仕事なんて言つていましたわねえ。そんな話はあたくし信じていませんし、それに流行が終わるとそういう事件が起こらなくなつてしまうのも可笑しな話ですわ。ミステリーサークルだつてそうですわ。あれ、最近ほとんど出現しないじゃありません？」

「彼らだつて何時までも同じことばかりはしないさ。彼らは計画的にことを進めてるんだよ。血液と内臓を取り出すのは次の段階への準備ということだね。高原牧場の事件では牛が丸ごと誘拐されたじゃないか。あれがきつと次の段階ということだと思ふけどね」

「あれが誘拐だという証拠はありませんわ。どうでもいいですけど、今回の事件というのはまた牛なんですの？」

「いやいや、今回はさらに次の段階ってことになるかな。内臓が抜き取られた人間の遺体が発見されたんだ」  
モオルダアは得意げに持っていた資料をスケアリーに渡した。

「しかも、これは今回が初めてじゃないんだ。ペケファイルの資料によれば、似たような事件がたくさんあるんだ。しかもどれも今回の事件発生現場の近くで起こっている。ニンゲン・ミューティレーションだよ。また血液と内臓を抜き取られてミイラ化した遺体が発見されたとなれば、まさしく我々の出番じゃないのか？」  
スケアリーは資料を見て異常な事件が以前から起こっていたことは認めしたが、モオルダアの言うことはまるで信じていなかった。

「モオルダア、あなたはそんなことをおっしゃっていますが、あなたの言っていることは矛盾だらけですよ。宇宙人さん達が牛の内臓と血液の調査を済ませてそれから牛を誘拐して、それと同じようにニンゲンの内臓と血液を調べてから今度はニンゲンを誘拐するというのね」

「そうだよ。ある動物が体内に持っている細菌やウイルスが彼らの驚異になることもあり得るからねえ。それで下調べってわけだよ」

「でも、あなたは以前にこう言っていましたわよ。彼らは何人ものニンゲンを誘拐して人体実験をしているって。今更内臓と血液を調べても意味がないんじゃないじゃありませんこと？」

「ああ、そうだったねえ……」  
急にモオルダアの元気がなくなっていく。それを見たスケアリーは得意になっっている。

「モオルダア、捜査というのはもつと科学的に行わなければいけませんのよ。この資料に書いてあるように、このミイラ化した遺体は全部事故死か病死ですわ。内臓がないのは野犬か何かの動物に食べられたに違いありませんわ。こんな事件は調査するだけ無駄ですわ」

モオルダアは自分のニンゲン・ミューティレーション説を簡単に覆されてかなり弱っていたが、事件への関心が薄れていたわけではなかった。死体がミイラ化するというのは特殊な環境下でしか起こりえない。それに、どの遺体も森や雑木林と言った湿気が多い場所で発見されている。そんな場所ではミイラ化するよりも前に腐食が始まるはずである。仮に何かの偶然で自然にミイラ化が起こったとしても、彼の元にある資料は別の問題を提示している。

ミイラ死体となったAという人物は家族から警察に捜索願が出された二日後に遺体が発見されている。家族の話によるとAは夕方、友達のとこに遊びに行くと行って家を出たまま帰らなかったそうである。友人はその日Aとは会って

いないようだ。Aが遺体になってからミイラになるまで二日以上はかかっていないことになる。こんな短期間にミイラというものはできあがるのであろうか。宇宙人ネタで盛り上がりつつしまったモオルダアの少女的第六感は、盛り上がったついでにモオルダアに新たな好奇心の種をまいているようだ。それにこれまでの被害者が全て若い女性だったというところもモオルダアの興味を惹いた。

「ねえ、スケアリー。人間というのはこんなに簡単にミイラになるものかなあ」

スケアリーはモオルダアに痛いところをつかれた。実は最近疲れ気味のスケアリーはあんまり仕事はしたくなかったようである。しかし、仕事をさぼるために嘘をつくわけにもいかない。

「それは、あたくしも気になってはいたんですけど。確かにこの点だけは奇怪ですわね。でもこれは警察に任せた方が・・・」

スケアリーの浮かぬ表情を見てモオルダアの少女的第六感がさらに働いた。

「スケアリー。この事件がどこで起きたのか知ってるのかい？ 湯煙の街、下田だぜ！」

「あらまあ、そうでしたの。それなら調査してみる価値はありそうですね。あたくしお風呂セットを用意してきますわ」  
スケアリーは下田行きの準備のため部屋を出ていった。でもどうしてモオルダアはここまでしてスケアリーを説得する必要があったのだろうか。パートナーが事件性を否定しても怪しいと思ったら一人でも捜査に向かうのが優秀な捜査官じゃないのか？ でも私は知っています。モオルダアは車を持っていないのでスケアリーが一緒じゃないと身動きがとれないのです。

### 3

#### 遺体発見現場

セラビ刑事は遺体発見現場の様子を見て多少あっけにとられていた。ここは普段はほとんど人がやってこない森の中。その点は今までのミイラ死体事件と変わらなかつた。しかし、遺体の周囲の様子が今までとはまるで違う。今回の遺体発見は被害者の死から発見までの時間が一番短い。それが原因とも考えられたが、長年ミイラ化死体の事件を追ってきたセラビ刑事には納得のいかないことが多い。遺体からは内臓が抜き取られていたものの、ミイラにはなっていない

い。それに何よりもおかしなことに遺体の周囲には、遺体をここまで引きずってきた時に出来た跡や、足跡などが残されていた。今までの事件ではこんなことは一度もなかった。そのためにセラビ刑事を三十年も追う羽目になったのである。そのためにこれらの遺体は事故死、或いは病死として片付けられてきたのである。それにここで死んでいるのは若い女性ではなく、浮浪者風の中年男性だった。「犯人ももうろくしたのかな？」これらの事件を連続猟奇殺人と考えているセラビ刑事はこんなことを考えてみたが少しも面白くなかった。

死体を前にして呆然としているセラビ刑事のところへもう一人の若い刑事が近づいてきた。この刑事は古媚コビテ、キヨン手清という、野心に満ちた若者である。彼はセラビ刑事の元へ慌てた感じで近寄ってきた。

「ちよつと、セラビ刑事。困りますよ勝手に捜査を始めちゃ。エフ・ビー・エルの捜査官が来ることになっているんですから」

「何だ?!おまえはこの状況を見て何とも思わないのか? これは明らかに殺人じゃないか。しかも、犯人はこれだけ手掛かりを残しているんだ。その何とかっていうところの役立たずの捜査官なんか待っていたら犯人が逃げちまうよ」セラビ刑事がつばを飛ばしながらもの凄い勢いで言い返すので、コビテ刑事も少し尻込みしたが、それでも何とかセラビ刑事を説得しようとしてみた。

「頼みますよ、セラビさん。これは上からの命令なんですから。下手に逆らったりしたらあなたこの事件の担当をはずされてしまいますよ」

担当をはずされると聞いてセラビ刑事は少し弱気になった。セラビ刑事は何とかがしてこの犯人を自分の手で捕まえたいと思っている。何しろ三十年もこの事件を追ってきたのだから。

「ちくしょー。解つたよ。その無能な捜査官が来るまで待てばいいんだろ。でもなコビテ。上の命令なんかに従ってたらどんな事件も解決しないんだ。よく覚えておけよ」

コビテ刑事はこれを聞いて感心したような表情を見せたが、内心では何とも思っていないかった。

コビテ刑事は事件解決に情熱を注ぐタイプの人間ではない。彼はとりあえず出世がしたかった。目の前にいるセラビ刑事はプライドと名誉のためにろくな人生を送れなかった。コビテ刑事はそんなふうにはなりたくなかった。だから刑事としての正義などは二の次なのだ。上からの命令には必ず従う優等生にならなくてはいけないのである。

事件現場へ向かうスケアリーの車の中

エフ・ビー・エル・ビルの前を出発した車は、スケアリーとモオルダアを乗せて快調に進み下田の事件現場まで近づいてきた。しかし、ここで渋滞に巻き込まれてなかなか前に進めない。今、世間は夏休み。この辺りは行楽客を乗せた車で毎年大渋滞になるのである。ノロノロと五メートルほど進んでは止まる車を運転しているスケアリーはかなり苛立っているようである。隣の車の中では学生風の男女のグループが楽しそうにじゃれ合っている。これを見てスケアリーのイライラは増すばかり。

隣にいたモオルダアは事件のことを考えているのかどうかは知らないが、先ほどから一点を見つめていた。それからふと何かを思いだしたように少し体を前に乗り出すと、胸のポケットからボイスレコーダーを取り出した。

いったい何を始めるのでしょうか。ちなみにこのボイスレコーダーはモオルダアが最近購入した優秀な捜査官アイテム。スケアリーがボイスレコーダーを使っているのを知って、無性に欲しくなったので急ぎよ購入したもの。

モオルダアがボイスレコーダーの録音ボタンを押して喋り始める。

「ダイアン。今回の事件には少し手こずるかも知れないよ。でもボクの才能を持つてればすぐに解決するだろうけどね。まあ、ちよつとした日帰り旅行といった感じかな。しかし、この渋滞というのは体にこたえるね。ボクの天才的プロファイリングに影響を与えなければいいのだけど。それじゃあダイアン、スケアリーがボクを睨んでいるからこの続きはまた後で」

スケアリーはモオルダアのことを睨んでいるというか啞然として眺めているというか。イライラと驚きが同時に最高潮に達している。

「モオルダア。あなた何をしているの？」

「ん？ これのこと？」

モオルダアは一度しまったボイスレコーダーを再び取り出して見せた。

「ボクも優秀な捜査官としてこれ、使うことにしたよ」

「それはいいんですけど。何で今使うんですの？ それにきつきの喋り方は何ですか？ それからダイアンってどなたなんですか？」

スケアリーが一度に大量のハテナをモオルダアに浴びせかけた。それに対して逆にモオルダアが不思議そうにしている。

「これってこういうふうに使うものじゃないのか。これに録音する時はダイアンに語りかけることになってるんだろ？ キミは何を不思議がってるんだ？」

スケアリーは色々言い返したかったがこれ以上イライラするのはイヤなので軽くため息をつくとは後は黙っていた。

それにしてもモオルダアさん。そのボイスレコーダの使い方はどうなんでしょう。まあ合っているといえれば合っているんですけど。今時そのネタを知っている人がどれだけのいるか。それにそれは違うドラマのパロディですよ。でも、まあいいか。EBIの特別捜査官つてところはいつしよですから。ここまでやったら後でコーヒーを飲んで決めぜりふも言うてもらいましょう。(このネタが解らない人はデビット・リンチの「ツイン・ピークス」を観ましょう)

## 5

### 遺体発見現場

セラビ刑事はコビテ刑事がいなくなったすきを見て勝手に捜査を開始していた。命令違反であつてもいつ来るか解らないエフ・ビー・エルの捜査官二人を待っているのは確かにおかしい。それに遺体はすでにひどい悪臭を放ち始めていた。そのためか命令違反で捜査を開始したセラビ刑事に反対する警官もいなかった。セラビ刑事は何人かの警官に付近の捜索を命令した。凶器や取り出された内臓が見つかるかも知れないと思ったようだ。

モオルダアとスケアリーを乗せた車はセラビ刑事が無断で捜査を開始してからまもなく事件現場に到着した。とは言つても、事件現場は森のかなり奥にあるため車を止めてから道のない森の斜面をしばらく登らなければいけなかった。

現場を警備していた警官が息を切らして坂を登ってくるエフ・ビー・エルの二人を見つけて彼らに近づいていった。彼はセラビ刑事から二人が到着しても現場には入れな、と命令されていた。

「ここは事件現場です。関係者以外の立ち入りは出来ません」

「何言ってるんだ。我々は、我々はエフ・ビー・エル。フーッ。キミ達が、キミ達が呼んだから来たんだ」  
坂を登ってきたモオルダアはかなり息が苦しそうで、上手くしゃべれていない。

「そうですわ。…。あたくし達はわざわざ渋滞を…。通り抜けて…。やっところまでやって来たというのに。…。ホントに、失礼な方ですわ」

スケアリーも息が上がっている。二人とも運動不足のようだ。

「そうですけど、今はちよつとまづいんですよ。私の立場もありますから今は勘弁してくださいよ」

警官は二人を現場に入れなければいけないのは解っていたが、セラビ刑事は怒ると怖いので二人を前にして弱っている。そこへ、コビテ刑事が戻ってきた。警官はさらに悪いことになったと渋い顔をしている。きつと二人を中に入れないことをコビテ刑事にとがめられるに違いない。二人の刑事の間に板挟み状態でかわいそうな警官である。

「エフ・ビー・エルの方ですわね」

コビテ刑事は二人に気付いて声をかけた。それから警官に向かって言った。

「キミ、どうしてこの二人を入れないんだ」

「いやあ、あの、ちよつとした手違いといえますか。…」

警官は冷や汗をかきながら何とかその場を取り繕ってみようとしていたが、全くダメである。その様子を見たコビテ刑事はだいたい事情が読めたようだった。事件現場はこの場所からはさらに斜面を登って平地になった場所にあるのでこの様子は見えないが、熱血漢のセラビ刑事が無断で捜査を始めているというのは想像できる。

「まったく、よけいなことばっかりして」

コビテ刑事は小さくつぶやいてから、モオルダアとスケアリーを現場まで案内した。

セラビ刑事はコビテ刑事がエフ・ビー・エルの二人を連れていたのを見たが、少しも悪びれることなく検分を続けている。

「セラビ刑事、あれだけ言ったのにどうして勝手に始めるんですか」

コビテ刑事がイラついた口調で言う。

「いいじゃないか。ここで遺体を観察してたつてしようがないぜ。それよりその二人！」

セラビ刑事がモオルダアとスケアリーを睨みつけた。

「あんた達は優秀な捜査官なんだろ。早く事件を解決してくれよ」

是非とも来てくれと頼まれたのに現場に来たら少しも歓迎されていない。モオルダアとスケアリーは変な気分だったが、とりあえず現場の状況を調べてみることにした。

遺体にはすでにシートがかけられていた。モオルダアは無謀にもその遺体に近づいて行きシートに手をかけた。こんなことをして大丈夫なのでしょうか。モオルダアは死体が苦手。特に今回は血だらけでドロドロ。でもモオルダアはそのことを知りません。彼の頭の中でそのシートの下にはミイラ化した死体があることになっているのです。ドロドロはダメでもカラカラのミイラなら大丈夫。ミイラ死体なんて珍しいものへの好奇心が彼を第一にその死体の方へ向かわせたようである。

モオルダアはバツとシートをめくった。モオルダアの予定ではここで謎のミイラ死体とご対面となるはずだったのだが、彼の目には想像とは違うものが飛び込んできた。モオルダアは自分が何を見ているのか理解できず一瞬固まっていた。やがて彼が今見ているのは血で赤黒く染まった人の顔であることが解った。その臉は閉じられておらず、うつろな瞳がモオルダアを見つめているように見えた。モオルダアは慌ててシートを手から放すとキャッと悲鳴をあげて近くにいたスケアリーの腕にしがみついた。そして遺体を指さして言った。

「スケアリー！ 大変！ 血、血が・・・」

よく見るとモオルダアは無意識にスケアリーの服の袖に手をこすりつけて拭いているようだ。

「ちよいと、何をやってるの！」

スケアリーがモオルダアを突き放した。

「変死体に血はつきものですわ。まったく慣れないことをするからいけないんですのよ」

スケアリーが厳しい口調で言うと、モオルダアが手をこすりつけていた部分をバツと払った。それから今度は彼女が遺体のシートをめくった。

「まあ、これはひどい状態ですわねえ」

スケアリーも自分の予想以上に遺体の状態がひどいので多少驚いたようだ。しかし、ここで一番驚いていたのは二人の様子を見ていたセラビ刑事とコビタ刑事に違いない。あつけにとられた二人はしばらくこの「優秀な捜査官」達を呆然と眺めていた。

スケアリーは遺体にかぶせられたシートをさらにめくっていった。腹部には内臓を取り出すために空けられた大きな穴があった。内臓をくり抜かれたその穴の中にはまだ固まりきつていない血が溜まっていた。スケアリーはこれだけ悲惨な状態の遺体を前にしても冷静である。見方によつては、彼女はその様子を楽しんでいるようにさえ見える。

「モオルダア。これはどうやら肉食動物の仕業じゃなさそうすわ」

「そのようだね。それから以前のミイラ事件とも違うものだね」

モオルダアは何とか平常心を取り戻してはいたが、死体の方には背を向けている。もちろん死体が怖いから、なんて思われては優秀な捜査官のプライドに関わるので、死体に背を向けていても周囲の様子を調べているようなふりをする。ただし、死体を怖がっているという事はもうバレています。

「スケアリー。どうやらボクらがやってくるまでもなかつたようだね。きつと犯人はすぐに捕まるよ」

「あら、どうしてそんなことをおっしゃるんですの？ 少なくともこの遺体の状態はとつてもエキサイティングですわ。それに事件の捜査のために何日間かこの辺りに泊まっていけないと温泉にも入れませんわ」

スケアリーは温泉目当てなので、どうしてもこの事件を捜査したいらしい。

「仕方ないよ。文句があるなら犯人に言ってくれよ。でもおかしいなあ。だいたいこういう殺人をやらかす人間は繊細で綿密な計画を立てるはずなんだけどな」

モオルダアはこう言いながら辺りをうろつき始めた。もちろん死体が目に入らないように。

「きつと犯人は全く計画を立てなかつたか、計画が欠点だらけだったということだな。この地面についた跡は遺体を引きずつてきた跡だな。こんな跡は残すべきじゃないけど、きつと犯人は死体を持ち上げるのが生きている人間を持ち上げるよりも困難だということを知らなかつたんだらうねえ。まあ、この斜面を引きずつてきたんだから、けっこうな体力はあつたんだらうね。それから、この引きずつた跡に血は付いていないから、死因は絞殺か何かだね。それからここで犯人は内臓を取り出した。きつと切れないナイフかなんかを使つたんだらうね。遺体がグタグタになつてるのはそのためだよ。きつと、犯人は血液も抜き取ろうとしたはずだよ。でも途中で諦めたのか、或いは自分のしていることが恐ろしくなつたのか、途中でやめたみたいだ。猟奇殺人鬼としての才能には恵まれていない犯人つてことだね」

何を根拠にしているのか解らないが、モオルダアがもつともらしいことを言っている。彼の言うことを聞いて、スケアリーがもう一度遺体を見てみると、彼女はあることに気付いた。

「モオルダア。これを見て」

モオルダアは怖いから見ない。遺体の手首には刃物で切った跡がある。

「これで血が抜けると思ったのかしら。死んだ人間の手首を切ったって血が出てくるはずありませんのに。そんなことも知らずに殺人だなんて、身の程知らずな犯人ですわ。なんだかあなたの言うことがあっているような気がしてきましたわ」

「そうだろ。きつとこの辺りを探せば色々な物証が出てくるはずだよ」

そういつて、モオルダアは犯人がここで使った刃物や抜き取った内臓などを捨てにいきそうなところを探してゆつくりと首を右から左へと回していく。

「たとえば、あの下草が茂っているところの向こうとか」

モオルダアが人の背丈ほどの草が密生している辺りを指したと同時に、その草がざわざわと揺れ始めた。モオルダアはびつくりして差した指を引つ込めた。引つ込めてもざわざわは止まらない。何かあるのだろうか？ モオルダアとスケアリーは目を合わせてから、黙ってざわざわに近づいていく。彼らが近づくとつれて、ざわざわも大きくなっていった。二人は一度立ち止まってその様子を見ていた。

「ちよいとモオルダア・・・」

二人には茂みの奥から何か近づいてきているのが解った。スケアリーは腰の銃に手を当てて構えている。モオルダアは怖くて自慢のモデルガンを取り出すことさえ忘れていた。

茂みの奥からは草を踏みつける足音が聞こえてきた。その足音が大きくなると同時に茂みの揺れも大きくなる。そして足音が彼らの目の前まで近づくと、ガバツと茂みが左右に分かれてその間から人が飛び出てきた。

「ふーっ。暑い暑い」

それはセラビ刑事の命令で付近を捜索していた警官だった。モオルダアは驚いて危うく失神するところだった。

「刑事！　ありやしたぜ。血の付いた包丁が。ほら、指紋もバッチリ付いていまさあ！」

なぜか盗賊みたいな喋り方。とりあえずモオルダアの説が正しかったようだ。モオルダアはスケアリーの方を見て得意げである。

「キミ。内蔵はなかったか？」

「誰ですかい？　あんたは。ああ、エフ・ビー・エルのお方ですな。ありやしたよ。でもねえ、虫がたかっちゃって、

ひどい有様でしたよ。早く片付けねえと全部食われちまいやすよ  
いったいこの警官は何なんだ？

7

セラビ刑事が変な警官と話しているモオルダアとスケアリーの方へ近づいてきた。それに気付いたモオルダアが先にセラビ刑事に話しかけた。

「刑事さん。もうほとんど事件は解決みたいですよ。せつかくここまで来たのにボクらの出る幕はないみたいだ」

「そうかもしれないな」

セラビ刑事は穏やかに返した。さつきまでのように二人を邪魔者扱いした感じはなくなっている。

「キミはどうしてこの事件の犯人がこれまでのミイラ事件の犯人と違うと思うのかね？」

セラビ刑事はこれまでのモオルダアとスケアリーのやりとりをずっと見ていて、モオルダアがこの現場の状況に関して自分と同じような考えを持っていることを知ったのだ。セラビ刑事はモオルダアに多少の興味を持ったに違いない。ただし、モオルダアの推理に根拠などありません。モオルダアはあの血まみれのおぞましい遺体を見てしまつてから、この恐ろしい事件からは一刻も早く手を引きたいと思つていたのである。そこで自分たちが事件を担当する必要がなくなつて欲しい一心で「こうあつて欲しい」ということを口にしていただけなのである。しかし、それがほとんど現実となつてしまつてモオルダアも内心では驚いている。これも少女的第六感がなせる業なのだろうか。

「まあ、ボクは優秀な捜査官ですしねえ。この現場を見た時からおかしなことにはすぐに気付きましたよ」  
モオルダアが適当な嘘をセラビ刑事に返した。

「それじゃあ、あとは警察にお任せしてボクらはこのへんで失礼しますよ」

モオルダアは早く帰りたくて仕方がない。

「ちよつと待つちたまえ」

立ち去ろうとするモオルダアをセラビ刑事が呼び止める。

「もし、この事件の犯人がこれまでの事件の犯人と違う人物だとしたら、この先また別のミイラ事件が起こるとは思わないかね。いや、私の考えでは必ず起こるはずだ。しかもこの数日中にね。新しい被害者を出さないために、私と一緒

に犯人を探してくれないかな」

モオルダアはあまり乗り気ではない。ドロドロ死体のせいでかなり弱気になっている。それを見ていたスケアリーが横から口を挟んだ。

「あら、いい考えじゃございませんこと？ 出来れば一週間ほど滞在できればあたくしはかなり癒されると思いますがよ」

癒される？ ああ、温泉のことですね。彼女は温泉が目当てなのでした。セラビ刑事はスケアリーの言っている意味が良く解らなかったがとにかく協力してもらえそうなので一安心のようだ。

コビテ刑事は遠くから彼らの様子をじつと見つめていた。なんだか彼は怪しい感じ。

## 8

### 宿屋

モオルダアとスケアリーはセラビ刑事に紹介された「宿屋」という旅館にやって来た。正式名称は「温泉旅館・宿屋」という。旅館で宿屋とは妙な名前だが、どうやら宿屋というのはこの旅館の経営者の名字らしい。二人が旅館の入り口から入ると奥から若い娘が飛び跳ねるようにして出てきた。

「ようこそおいでくださいました。エフ・ビー・エル御一行様でございますね。私はこの旅館の若女将であると同時に、おてんばな女子高生でもある宿屋<sup>ヤドヤ</sup>亜<sup>ア</sup>依<sup>イ</sup>ともうします。よろしくね！ キラツ」

キラツつと言ったわけではないが、この娘はキラキラした若さを振りまいている。モオルダアはこんなのが嫌いではないので思わずニヤニヤしてしまう。しかし、スケアリーを見ると彼女は握りしめた拳をプルプルと震わせているので、慌ててゆるんでしまった顔面に力を入れた。

「すぐにお部屋の用意が出来ますから、しばらくお待ちくださいね」  
「そういうと若女将は奥へと消えていった。

「ねえモオルダア。この旅館はやめにしてほかにいたしませんか」

スケアリーはこの旅館が気に入らない。彼女は今出てきた若女将であると同時に、おてんばな女子高生でもある娘の若さ

に嫉妬しているのである。過ぎてしまった時間は誰にも取り戻すことは出来ない。

「せっかくセラビ刑事が紹介してくれたんだから、ほかの旅館に変えたりしたら失礼じゃないか。あの人は始めはなんかイヤな感じがしたけど、こんな旅館まで手配してくれて、結構いい人かも知れないよ」

モオルダアの言うことはもつともなので、スケアリーは諦めることにした。

しばらくすると、こんどは女将が奥から出てきた。すつ、すつ、と上品な歩き方で二人の方へ近づいてくる。

「私はこの旅館の女将であると同時に魅力的な大人の女でもある宿屋腫ヤドヤ・ヒトミでございます。先ほどは娘が失礼しました。あの子は刑事ドラマなんかが好きなので、お客様のようの方が泊まりにいらつしやると、勝手に出てきてしまうんですよ。普段は旅館の仕事なんか少しもしたことないのに。ホントに困った子です。オホホホ。さあ、お部屋の用意が出来ましたのでどうぞこちらへ」

オホホホだつて。何ともお上品でございます。

二人は女将の後について奥へと入っていった。このヤドヤ親子の名前を聞いて、モオルダアは部屋に向かう間ずつとある疑問を抱いていた。私も気になっていきます。そしてなんだかイヤな予感が。モオルダアが前を歩く女将に聞いた。

「あのすいませんが、ご主人の名前を教えてくださいませんか？」

「主人ですか？ いいですけど。主人の名前は宿屋眼陀真ヤドヤ・メダマと申します」

やっぱりそう来たか！

## 9

### 警察署・署長室

署長とコビテ刑事が向き合つて座っている。署長はかなり高齢のようで薄ら笑いを浮かべながらゆつくりとコビテ刑事に話しかけた。

「どうだねコビテ君。事件の方は」

「はい署長。全て順調にしています」

「うん、うん、それはよかった。それで、あのエフ・ビー・エルはどうだね」

「はい署長。予定どおり捜査に協力することになりました」

「うん、うん、それはよかった。うん、うん。それじゃあ、次の計画に移らなくてはいけないねえ、コビテ君」

「はい署長。もうすでに準備は出来ています。でも署長。あのエフ・ビー・エルですが意外と手強そうですよ」

「なに、心配いららないよ。彼らならきつとやってくれるさ。うん、うん。キミはよけいな心配はしないで私の言うとおりにやればいいのだよ。うん、うん。ところで今そのエフ・ビー・エルはどこにいるのかね」

「はい署長。予想どおり宿屋に」

「うん、うん、それはよかった。それじゃあ、予定どおり頼んだよ。うん、うん」

「はい署長。でもどうしてこんなことをするんですか？」

「うん、うん。よけいな詮索はせんでもよい。キミも早く権力の座に着きたいんだろ？ うん、うん。だったらな、今は言われたとおり動いておればいいのだ。うん、うん、うん」

「はい署長、それでは失礼いたします」

怪しいです。この二人の会話も、署長の喋り方も、いろいろ怪しい。

## 10

### 宿屋・モオルダアの泊まっている部屋

部屋に通されたモオルダアはポケットから例のボイスレコーダーを取り出して、録音ボタンを押した。スケアリーは別の部屋にいるから今度は思う存分話せる。

「ダイアン。この事件はボクが思っていたよりも難解なようだ。セラビという刑事が言うにはこれから、本物のミイラ殺人事件が起きると言うことだが、本当だろうか。もしそうなら、もう一度これまでの事件についてよく調べなくてはいけないが、それはこれからセラビ刑事と会う予定だからそこでいろいろ調べられるだろう。それにしてもあの刑事は始めあんなにボクらを追い出したがっていたのに、どうして急に協力を求めてきたのだろう。もしかして気分によって態度ががらりと変わる『お天気デカ』だったらちよつとイヤだなあ。そんなことよりも、不可解なのは今日の事件だ。いったいあのお粗末な殺人事件は誰の仕業だろう。まあ、それは今日発見された証拠品よって明らかにされると思うけ

ど。どういう動機であんなことをしたのだろうか。ただの出来心による模倣犯『軽い気分』のコピーキャット』なのだろうか。しかし、少しも模倣できていない。これはちよつと気になるところだ。それにしても、あの死体は怖かった。今でも目をつぶると、あの血だらけの顔が思い出されるよ。だからさつきからずつとまばたきはしていないんだ。ボクは優秀な捜査官だからまばたきぐらいしなくても大丈夫なんだ」

ここで、モオルダアはボイスレコーダーを机の上に置いてから窓を開けて外を眺めた。窓の外には崖の斜面が見えている。崖の上にある旅館だったら眺めもよかっただろうけど、崖の下にあつては窓から見えるのはごつごつした岩ばかり。特に何も見るものがないのでモオルダアは窓を閉めた。それからおもむろに机の上のボイスレコーダーを手に取るとまた録音を始めた。

「ダイアン。一つ言い忘れたよ。明日の朝食には目玉焼きが出てくるような気がしてならないんだ」  
何のことだか、まったく。

## 11

### 警察署

モオルダアがセラビ刑事を捜して警察署の廊下をうろうろしていると後ろから呼び止められた。

「おい、エフ・ビー・エル。こつちだ。こつち」

見るとモオルダアが一度前を通り過ぎた部屋からセラビ刑事が顔を出して手を振っている。

「エフ・ビー・エルって呼ぶのやめてくれませんか」

言いながらモオルダアが部屋へ入ってくる。部屋にはセラビ刑事がこれまでに集めたミイラ事件の資料が大量に積まれてあつた。

「どうも最近人の名前が覚えられなくてね。思い出すまではエフ・ビー・エルでいいだろ」

「モオルダアですよ。でも、ボクの名前は話の途中で変えられちゃったりするから、覚えても無駄かも知れませんがねえ」

モオルダアは前回の話（「殺人豆」）の途中で突然名前を変えられたことを根に持っているようだ。でもまあ許してくだ

さいよ。

「なんだか良く解らないが、モオルダア君か。何とか忘れないようにはがんばってみるがね」

「それよりも、これがミイラ死体の捜査ファイルですか？ 凄い量ですねえ。エフ・ビー・エルにあつた資料とは雲泥の差だ」

「そりやそうだ。これは私のライフワークみたいなもんだからな。三十年以上もこの事件を追ってるんだ」

セラビ刑事はモオルダアが生まれた頃か、或いはそれ以前からずっと謎のミイラ事件を捜査している。モオルダアは何とも言えない畏敬のようなものを彼に感じていた。

「それで、セラビ刑事の考えはどうなんですか。あなたはさつきこの先にミイラ事件が起きると言っていましたよねえ。それは前の事件が起きて今年が7年目だと言うことと関係があるんですか」

「なんだ、キミもそれには気付いていたのか」

「まあ、一応ペケファイルの資料で調べていますから。ペケファイルには変な事件がいつぱいなんですよ。でもそれ以外にこれから事件が起きるといふことの根拠はあるんですか。それに、この事件が殺人だという根拠は。殺人だとすれば、少なくとも犯人は一人ではありませんね。カルト教壇か黒魔術とかでしょうねえ、血と内臓を抜くなんてのは。でも、まあそれだけ資料があればきつと目星はついてるんでしょうけど」

セラビ警部がムツとした目つきになった。

「それがいいんだよ」

「ないって、それじゃあその資料の山は何の役にも立たないってこと？」

「なに言ってるんだ。それでもキミは優秀な捜査官なのか？ この資料の山が我々に教えてくれる事実。それは犯人を捕まえるのが容易ではないということだよ」

「はあ、そのようですねえ」

モオルダアはセラビ刑事の言っていることがよく理解できていなかった。

「事件は7年おきに起こるといふこと。被害者は全て若い女性だといふこと。遺体の発見は今日の遺体発見現場のある地域に集中しているといふこと。それはこれだけ大量の資料がなくても解る共通点ってことだな。それではこの大量の捜査ファイルが語っている事実とはだね、つまりこれらの事件で共通点がそれしかないということなんだよ」

モオルダアは啞然としている。それではまるでこの事件が殺人事件ではなくて、警察が発表したように事故死や病死

だったということを証明するための捜査を長年続けていたようなものだ。それでも、セラビ刑事は殺人事件として今でも捜査を続けているのだ。どうしてだかは良く解らないが、きつと何かそう確信するところがあるのかも知れない。もしかしてそれはモオルダアみたいな「少女的第六感」なのだろうか？

モオルダアが黙ってセラビ刑事を見つめているとセラビ刑事が先を続けた。

「それでも気になるところは沢山あるんだ。これらの事件の遺体は発見されるまでにかなり日にちが経ってる。大抵の被害者はまず行方不明になって家族や知人から捜査願いが出されてたんだが、いくら捜索しても見つからなかったんだ。それもそのはずで、遺体が見つかった場所は被害者とは何の関係もない場所だったんだ。私はこのことをずっと気にしていたんだが、七年前はそれが役に立ったんだ。例の行方不明から二日で発見された件だ。私は捜索願が出されると、半信半疑だがあの現場付近へ行ってみるとやっぱりあったんだよ。ミイラが。家族の話では友人の家に行くのにそんなところを通るはずがないし、被害者は今まで一度もあの辺りに行ったことはないと言うんだ」

モオルダアは神妙な面もちでセラビ刑事の話聞いていた。

「ふうん、確かに興味深いですねえ。現場には足跡も何もなかったんですか？ それから付近に車を止めた後とかは？」

「なかった。キミが気付きそうなことは全部調べてみたよ」

「そうかあ」

モオルダアが大きく息をついた。

「それじゃあ、どうすればいいんだろう。試しにその現場一带に警備をつけてみたら？」

セラビ刑事はモオルダアの案をきいて軽くほえんだ。

「そんなことしても、犯行が延期されるだけだよ。それに起こるかどうか解らない犯罪のために警官を手配するほど警察は暇じゃないんだぜ。なんならキミが警備を試してみるか？」

「いやあ、それはちょっと遠慮しておきますよ」

モオルダアもへっつと笑って見せた。そこへ警官が一人やって来た。警官はドアのところ立ってセラビ刑事を呼んだ。

「刑事、あのグタグタ遺体事件のことなんですけど」

「なんだ、そのことか。それならコビテに任せてあるって言ったろうが」

「いやあ、それがコビテ刑事がどうしてもセラビ刑事の力を借りたいとおっしゃるもので」

「まったく仕方がないなあ。一人じゃ何にも出来ないのか、あの男は」  
セラビ刑事は立ち上がってから、モオルダアの方に向き直った。

「エフ・ビー・エルさん、ちよつと失礼するよ。さっきの犯人が解つたのかも知れない」  
颯爽と部屋を出ていくセラビ刑事をモオルダアが後ろから呼び止めた。

「セラビさん。犯人は人間以外だということは考えたことはありませんか？ あの地域だけで起こる自然現象とか、或いは我々がまだ出会つたことのない生命体とか」

セラビ刑事は一瞬驚いたようにして振り返つた。それから大声で笑つた。

「キミ、面白いことを言うねえ。アツハツハ。さすがは噂どおりの『優秀な捜査官』だ。残念だがね、この辺にUFEOがやって来たことはないよ。アツハツハ。それじゃあまた後でな、エフ・ビー・エルさん」

モオルダアは本気で言つたのに、セラビ刑事は冗談だと思つている。それにしてもセラビ刑事は全くモオルダアの名前を覚えようとしない。

## 12

### 宿屋

モオルダアが自分の部屋へ向かつて廊下を歩いていると、向こうからお風呂セットをもつたスケアリーが歩いてくる。

「あれスケアリー。何やってるんだ？ 検死解剖に立ち会うんじゃないのか？」

「それが、ひどいんですのよ。あたくしが病院へ行つたらあたくし達が今調査しているミイラ事件とこのグタグタ遺体事件は別のものだから、あたくしは立ち会つてはいけない、なんておっしゃるのよ」

「おっしゃるつて、誰が？」

「コビテとか言う若い刑事ですよ。でもあたくしが立ち会うぐらいはいいじゃありませんかって言つたら、署長からの命令で関係者以外はダメだなんておっしゃるのよ。それであたくし腹が立つたものですから、署長のところに異議を申し立てに言つたら、署長さんで、なんだかともいやらしい目つきで、うん、うんつて言つてばかりで、あたくし気味が悪いからそのまま帰つてきてしまいましたわ」

「へえ、それはどうにも怪しい話だねえ。何か隠したいことでもあるのかなあ。でもあのグタグタ遺体事件はもうすぐ解決しそうだったぜ。今頃はセラビ刑事が犯人を捕まえてるかも知れないなあ」

「あら、そうですね。それで、ミイラの方はどうなったんですの？」

「そうそう、そのことでキミに聞きたいことがあつたんだけど。ある特定の地域だけで人間がミイラになるような気象状況が発生することはあり得るかな。たとえば今日の事件現場の辺りで」

「あり得ませんわ」

「そうか、そうだよねえ」

モオルダアは始めから自信がなかったが、簡単に返されてさらに自信がなくなってしまった。やっぱり宇宙人の仕業かなあ。でもモオルダアはそれは口に出さないようにした。また簡単に否定されてしまいそうだったから。

「あらゆる方面から時間をかけてゆつくり捜査すべきだと思いますわ。そうすればあたくしも沢山温泉に入れますし。それじゃあ、あたくしは失礼いたしますわ」

スケアリーはすたすたと大浴場の方へ歩いていってしまった。

モオルダアは自分の部屋に入るとしばらくぼーっと立つたまま何かを考えていた。不可解なことだらけで、何も考えがまとまらない。いつものように宇宙人の仕業にすればこんな不可解な事件でも彼の想像は際限なくふくらんでいき、今のように考え込むこともなかったのだが。いくら考えても解決の糸口はどこにも見あたらない。考えても答えが出ないなら、考えても意味がないや。と思ったのかは知りませんがモオルダアは考えるのをやめて畳の上に横になろうとしていた。

その時、誰かがモオルダアの部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「お茶をお持ちしました」

ドアの外で声がある。

「どうぞ」

とモオルダアが返事をする、ドアが開いて若女将であると同時にんばな女子高生でもあるヤドヤ・アイが入ってきた。彼女はニコニコしながら手に持っていた缶入りのお茶をトンと机の上に置いた。

モオルダアはこの自販機でも買える缶入りのお茶を見て何とも言えない感じがしたが、この旅館ではこれがふつうなんだらうと思って納得することにした。モオルダアは缶のフタを開けてお茶を飲んだ。若女将はモオルダアがお茶を飲

む様子をジロジロ見ている。いったいなんだというのだろうか。モオルダアはこんな風に見られているとゆっくりお茶を飲むことが出来ない。しかし、モオルダアには少し気になることがあった。こういう光景はどこかで見たことがある。女将がいて隣で料理を食べる客がいる。そうか、これは旅番組だ！ ということはモオルダアもここでお茶を一口飲んだら何かコメントを言わなくてはいけないのだろうか。しかし、自販機で売ってるお茶を飲んでどんなコメントをすればいいというのだ？

「あー、旨い！ んー、旨い！」

旨いを連発するのはダメなコメントだ。

## 13

「おいしいですか。私のお小遣いで買ったんですよ。手ぶらで遊びに来るのもよくないと思って。でもそんなに喜んでもらえて感激！」

「なんだ、キミは仕事でお茶を持ってきたんじゃないかって、ここに遊びに来たのか。キミはいつでも客おとところに遊びに来るのか？」

「それはどんなお客様かによつてです。こんな温泉旅館に来るのはくたびれた人ばかりですから」

「ああ、そうか。キミは刑事ドラマが好きなんだってねえ。でもボクはエフ・ビー・エルだから警察とは違うんだよ」  
「警察じゃなくてもいいんです。私はこんな旅館で歳をとっていくのまっぴらだと思ってるの。だから私は高校を出たら優秀な女スパイになるの。そしてどこかの優秀な捜査官と熱い恋に落ちるの。きゃ、恥ずかしい」

そう言っておてんばな女子高生はモオルダアの眼を見つめた。こんな風に無邪気な眼で見つめられると、なんだか嬉しくなってしまう。しかし、モオルダアは優秀な捜査官。こんなところで女子高生と妙な関係を持つたりはしてはいけないのだ。

「だったら、こんなところで油を売ってないでもっと勉強しなさいよ」

「もー、いじわるねえ。これでも私、いろんなこと知ってるんだから。警察の捜査のことなんかセラビ刑事に沢山教わったんですよ」

ここでセラビ刑事が出てくるとは意外でした。思えばこの旅館を紹介してくれたのもセラビ刑事。ここの家族と知り合

いでもおかしくはありません。

「キミ、セラビ刑事と知り合いなのか。それは驚きだなあ。セラビ刑事もこんな風にキミに部屋に入ってこられて迷惑な思いをしたんだろうねえ」

「またあ、少しも迷惑だなんて思っていないにせよ。セラビ刑事は私が生まれる前からこの旅館の常連なんです。だから私にとつては親戚みたいな感じなんです。あなたも今セラビ刑事と一緒に捜査をしてるんですよ。あのうちよつと変わってるから時々警察の方からも相手にされないこともあんだって」

「そりゃあ、そうだろうねえ。三十年もミイラ事件を捜査し続けてたら、周囲からは変な目で見られもするよ。でもボクはあそこまで捜査に情熱を燃やせる人は尊敬に値すると思うけどね」

「その情熱だけど、ちよつと面白い話があるんですよ。聞きたい？」

おてんばな女子高生は噂好きのおばさんみたいになってきた。どうせつまらない噂だとは思ったが、モオルダアもちよつと聞いてみたいので、うんとうなずいた。

「これは人に言っちゃダメって言われてるけど、特別に教えてあげる。セラビ刑事ねえ、あんまり捜査に夢中になってたから、自分の結婚式すっぽかしちゃったんだって。花嫁さんはかわいそうよねえ。ウェディングドレスを着て待っていても相手はミイラ事件の捜査中なんて。ホントにひどい話よね。それで、今ままでずっと独身なの。これ絶対に内緒だからね」

やつぱりそんなに面白くなかった。でも本当ならモオルダアに劣らぬ変わり者だ。モオルダアは自分もそんなことにならないように気をつけようなどと、どうでもいいことを考えていた。すると部屋のドアが開いた。二人が振り返ると女将が立っていた。

「こらっ、あなたこんなところで遊んでたらお客様に迷惑じゃないの」

女将が若女将を叱りつけた。

「お客様にお茶をお運びしたところです。遊んでたんじゃありません」

若女将はぷりぷりしながら部屋を出ていった。

「本当に申し訳ございません。あの子、何か失礼なことなどいたしませんでしたか？ 本当にしつげが行き届いておりませんで、申し訳ございません」

「いやいや、大丈夫ですよ。とくにすることもありませんでしたし。ところで何か用でしたか」

「あつ、そうでした。これが届いておりましたからお持ちしました。本当にすみませんでした」

女将はモオルダアに封筒を手渡した。宛名は「エフ・ビー・エル御一行様」となっている。差出人は書かれていない。「これは誰が持ってきたの？」

「先ほど旅館の入り口に置かれていました。もう少し早く気付いたらきつと届けてくれた方も誰だか解つたんでしょう。本当に申し訳ございません」

この女将はさつきから謝つてばかりだ。これだけ平謝りされるとなんだかモオルダアの調子も狂つてきそうだ。

「いやいや、大丈夫ですよ。中を見ればきつと差出人も解るでしょうから」

「そうでございますね。本当にすみませんでした」

女将は謝りながらドアを閉じかけたが、とちゅうで思い出したようにドアを元のところまで開けた。

「お客様はあの子に失礼なことをしてないでしょうね？」

そう言つてギロリとモオルダアを睨んだ。モオルダアはドキツとした。

「してませんよ、何にも。しようと思つてもいないんだから。ホントに。ボクは優秀な捜査官なんですから」

妙に取り乱しているところが何とも怪しい。モオルダアはいつでもスケベなことを考えているから、そんな質問をされるとなんとなく慌ててしまうのだ。

「そうですか、それでは失礼いたします」

「何にもしてないからね」

ドアが閉められた後も念を押すようにモオルダアがわめいていた。

しばらくして、モオルダアはやつと平常心を取り戻していた。彼は机の上のボイスレコーダのことを思い出した。そしてそれを手に取るとまた録音を始めた。

「ダイアン、大変なことになつてきたよ。事件の手掛かりは何もなし。いったい何から初めていいのか見当もつかないよ。ああ、そうだ。さつきの封筒は何だつたんだろう。中には紙が二枚。これはどうやらミュージカルか何かのチケットのようだ。『下田歌劇団』公演と書いてある。なんだかイヤな予感がするねえ、この劇団名は。しかし、これをボクらに送つたのは誰だろう。また謎が一つ増えてしまった。公演は明日になつている。これを見たら事件の手掛かりが得られるのだろうか？ そんなことになるはずはないが、良い気分転換にはなるだろう。それから、ダイアン。このブリッコ若女将と謝つてばかりだが妖しい魅力を振りまいている女将にはちよつと手を焼きそうだ。気をつけなさいと」

とある高校のグラウンド

セラビ刑事とコビテ刑事を先頭に何人かの警官達が校舎の中からグラウンドの方へ急ぎ足でやって来た。コビテ刑事はグラウンドで陸上部の練習を眺めていた体育教師風の男にこえをかけた。

「肥遠佐志太ヒトオ・サシタというのはこの学校の生徒ですね？」

聞かれた男は不安そうに応える。

「そうですが、あいつ、やつぱり何かやりましたか？　なんだか今日は様子が変なんですよ。あいつ」

「いやご心配なく。ある事件に関して少し話を聞きたいだけです。今どこにいるか解りますか？」

「いるにはいますが、まともに話が出来るかどうか。あそこにいるのがそうです」

そういつて教師風の男はグラウンドの隅を指さした。校舎の影になつて薄暗くなつている中に少年が一人うずくまっていた。

「彼はいつもあんな感じなんですか？」

少年の様子を不審に思つたセラビ刑事が聞いた。

「そんなことはありませんよ。彼は陸上部のキャプテンでいつもなら大声を出してここを走り回ってるんですけどね。今日は朝から顔色が悪くて。ずっとあそこでああしてゐるんです」

セラビ刑事とコビテ刑事がヒトオ少年のところへ近寄つていった。近づいてみるとヒトオ少年はうずくまっているだけではなく、かたかたと小刻みに震えているようだった。

「おいキミ大丈夫か？」

セラビ刑事が心配になつて少年の方に手を差し出した。少年は丸めていた肩をさらに丸めてその手をよけた。

「間違えた……間違えた……大丈夫……大丈夫……へへへっ」

少年は独り言を言っている。

「おい、ヒトオ・サシタ。キミに話があるからちよつと署まで一緒に来てもらおうぞ」

コビテが声をかけた。

「へへへっ、間違えた……間違えた……」

少年は反応しない。

「来たくなかったって、そうはいかないぞ。おいヒトオ。おまえは殺人事件の容疑者なんだ」  
そういうとコビテ刑事は強引にヒトオ少年の腕をつかんで立たせると、学校の外へと引張っていった。

グラウンドで練習をしていた陸上部員達は全員立ち止まってこの騒動を眺めていた。それに気付いたセラビ刑事が彼らに向かつて言った。

「何でもないよ。大丈夫だから、キミ達は練習に戻りなさい」

だれも大丈夫だとは思わなかったが、彼らは練習に戻った。しかし、このあと彼らによってこの騒動の噂が町中に広められることになった。

## 15

### 宿屋

モオルダアはテレビで地元のテレビ局の流す夜のニュースを見ている。ニュースでは高校生による浮浪者惨殺事件が報じられていた。あれだけのひどい事件なんだからそのうち全国ネットでも大々的に報じられることだろう。

「高校生かあ」

モオルダアが納得できたような出来ないような感じでつぶやいた時、部屋の電話が鳴った。

「もしもし、エフ・ビー・エルさんか。いやーよかったよ、いてくれて」

「どうしたんですか、テレビじゃ凄いことになっていきますよ。とりあえずお手柄じゃないですか」

「いやあ、それがちよつとまずいことになってねえ。実は捕まえたヒトオ少年んだけどねえ。あいつは署長の甥なんだよ。それで私としては何とか目立たないように事を進めたかったんだが、コビテのヤツがなあ。あいつはまだ若いから派手好きなのかなあ。生徒が大勢見てる前でおまえは殺人犯だなんて言っただけで無理矢理引張っていったもんだから、アツという間に騒ぎが広がってしまったよ」

「そうですか。でも犯人はやっぱりヒトオ少年で間違いないんですよ。だったら仕方ありませんよ」

「まあ、そうだけどなあ。それよりもっと困ってることがあるんだが、ちよつとこっちへ来てもらえないかね、あの

無免許医師のお嬢さんも一緒に」

「スケアリーのことでですか。良いですけど、何があったんですか？」

「電話じゃちよつと言えないよ。多分これは盗聴されてるぞ」

「何だつて？ 盗聴？ 誰がそんなことをするんですか」

「それもここでは言えないけどな。まあ、すぐに解るさ」

モオルダアは受話器を置くとすぐにスケアリーの部屋へ電話をかけて彼女を呼びだした。「盗聴つて、誰がそんなことをしてるんだろう？」モオルダアは考えながら部屋のドアを開けるとそこにはおてんば若女将アイが立っていた。

「モオルダアさん。どこへ行くの？ いいえ、私は聞かなくても優秀な女スパイだからちゃんと解っているわ。モオルダアさんは警察に行くんですよ。それはきつと凶悪犯ヒトオ・サシタに関することね」

モオルダアはどうして知っているのかちよつと不思議に思ったが、すぐに理解した。

「キミだな、盗聴してるっていうのは。そんなことをしていると捕まえるぞ」

「あら、盗聴なんてしてませんよ。フロントで電話の受話器を取ったら勝手に知らない会話が聞こえてきただけです」

「それだつて同じことだよ」

「ねえ、モオルダアさん。私も一緒に連れて行ってください」

「どうしてキミを連れて行かないかきやいけないんだ」

「だつて、私はヒトオ君と同じ学校に通っているのよ。だから私を連れて行けばきつと役に立つと思うんだけど。それに、ヒトオ君つてあんなことするひとじゃないんだから。きつと何かの間違いだと思うの。だつてあの人成績優秀でスポーツも出来て陸上部のキャプテンもやるぐらいで責任感の強いヒトなの。学校でもチャーム人気なのよ。特に女子生徒から。でも残念ながら私の好みではなかったのよねえ。ウフッ」

「キミの言いたいことは解つたけど、もう夜だしキミはここにいなさい。それにキミを連れて行つても何の役にも立たないよ」

おてんばな女子高生アイはモオルダアに一步近づき上着をつかんだ。

「連れて行つてくれないと放さないからね」

「ちよつと、キミ何するんだ。やめなさい」

モオルダアが弱り果てていると、廊下の向こうからスケアリーが歩いてくるのが見えた。

「ちよいと、あなた達！ 何をやっているの？」

「スケアリー、助けてくれよ。若女将と一緒に連れていけって、聞かないんだ」

スケアリーは恐ろしい形相でブリッコ若女将を睨んだ。

「子供が大人のすることに手出しするんじゃないや！ あなたは自分の部屋に行って勉強でもしていらつしゃい」  
スケアリーの怖い顔を見てさすがのおてんば若女将も少し小さくなってしまった。

「モオルダア、行きますわよ」

スケアリーはつかつかと先に歩いていった。

優秀な女スパイにあこがれる若女将にしておてんばな女子高生、ヤドヤ・アイは廊下の向こうに消えていく二人の姿を口をふくらませて見送った。

「もう、チョームカツク！」

## 16

### 警察署

ヒトオ少年は取調室の椅子座っている。部屋には誰もいないが、隣の部屋からこの部屋は監視できるようになっている。ヒトオ少年は先程まで「間違えた・・・間違えた・・・」とつぶやきながら時々何かに怯えてガタガタ震えたりしていた。今では気味の悪い薄笑いを浮かべている。うつろな瞳で何かを見つめるでもなく見つめて、手をこすり合わせた、両手で何かをこねるような仕草をしている。「へへへッ」という笑い声が時々隣の部屋まで聞こえてきた。

「これをどう思うかね？」

隣の部屋にいたセラビ刑事はエフ・ビー・エルの二人に意見を求めた。

「これが本当に責任感が強くてスポーツ万能で成績優秀な人気者何ですか？ これでは完全に・・・」  
スケアリーは最後まで言うのをためらったがモオルダアが後を続けた。

「壊れてしまっているねえ。彼に最近何かおかしなところはなかったんですか」

「それは私も学校の教師や生徒達に聞いてみたんだがな、特に何かおかしなところもなかったみたいだ。少なくとも昨日ま

では成績優秀なモテモテさんだったってことだ。それに、大学への推薦入学も決まっていたらしいぞ。そんなヤツがどうしてあんなことをするかねえ。しかし、あらゆる証拠が彼の犯罪であることを示しているのだからねえ」

「証拠ってどんなものがあつたんですか」

「まず昨日見つかった包丁だな。あれを調べてみたら昨日高校の近所の店で購入されていたことが解つたんだよ。それでその店の主人に聞いたら買ったのはヒトオという高校生だつて言うんだ。なにせ人気者だから学校の近くでは顔を知っている人間も多いんだろうな。それで、ヒトオ少年を調べてみたら包丁についていた指紋は彼のものと一致するし、現場の足跡は彼の履いている靴のものと同じだし。しかし、どうしてあんなことをしたんだろうなあ。ちよつとお嬢さん。あなたの無免許医師としての意見はどうだ？」

「あたくしでございますか？」

お嬢さんといわれたスケアリーは嬉しそうだ。

「そうですわねえ。人格が豹変してしまうことの原因としては、脳に何らかの障害があることが考えられますわ。腫瘍が出来ていたりすることはあの歳でも考えられますから。或いは薬物の使用が原因とも考えられますわねえ。そういう検査はもうお済みになったの？」

「脳はまだだが、薬物検査は陰性だったよ」

「あれは殺人によるショックが原因だな」

モオルダアが喋り始めた。少女的第六感が働いたのだろうか。

「ふつう猟奇殺人というのは元々狂った人がやるもんだよねえ。狂った人が殺人によって満足してその後はしばらく普通になれるんだ。それからまたおかしくなつてきて殺人を繰り返す。でもヒトオ少年の場合は殺人の後におかしくなつてしまったんだから、これは殺人によるショックで心神喪失状態になったとしか思えないねえ」

「PTSDみたいなものかしら？」

「なんだそれ？」

スケアリーは時々難しい言葉を使う。

「外傷後ストレス障害というやつですわ。でも普通は被害者になるものですよ」

「もしかすると、ヒトオ少年も被害者なのかも知れないよ」

セラビ刑事はモオルダアの言うことを興味深く聞いていた。

「キミはどうしてそんなことを言うのかね」

「彼は人を殺したくなんかなかったのに、そうせざるを得ない状況に陥ってしまったんだと思うよ」

「でも、どんな理由で？」

モオルダアは少女的第六感だけでしゃべっているの、理由を聞かれても上手く応えられない。

「まあ、彼がちゃんとしやべれる状態になるのを待つしかありませんかねえ」

「昼間っからずつとあんな感じだ。もしかするとずつと元には戻らないんじゃないのか。まったく、困ったもんだ」

セラビ刑事はこう言っただきくため息をもらした。

モオルダア達はとりあえず引き返すことにした。警察署を出る時モオルダアは何か思いたしたように振り返るとセラビ刑事に聞いた。

「そういえば、セラビさん。チケットをくれたのあなたですか？」

「ん？ 何のことだ？ 私は何にもあげた覚えはないぞ」

「モオルダア、チケットって何のことですか？」

モオルダアはポケットから昼間届けられた二枚の下田歌劇団公演チケットをスケアリーに見せた。

「これだよ。キミの分もあるぞ。ボクら宛に旅館に届いていたんだけど、差出人が解らないんだ」

そのチケットを見たセラビ刑事が声をあげて笑った。

「あつはつは。下田歌劇団か。そりゃいいなあ。滅多に見られない貴重な舞台だぞ。そんなもん誰にもらったんだ？

だれにもらったのでもいいが、ここに来たついでに見に行けば、きつといい記念になるぞ。あつはつは」

セラビ刑事は妙にうけている。いったい下田歌劇団って……

「歌劇団って、ミュージカルでもやるのかしら。でもその下田歌劇団っていう名前に、なんだか気味の悪い胸騒ぎを覚えますのよ」

「そうだろ。ボクもなんだよ。どうしようか。見に行く？」

「でもセラビ刑事があんなに勧めていますから、少しだけでも見てみる価値はありそうですわ」

モオルダアは言いしれぬ不安を感じながらチケットをポケットにしまった。

モオルダアは朝食を取るために宿屋の食堂へとやって来た。スケアリーはとつくに朝食を済ませて今は朝風呂に浸かっている。モオルダアがここへ入ってきた時からずつと若女将アイはニコニコしながら彼のことを見つめている。どうやらよつぽどモオルダアのことを気に入ったらしい。物好きな人もいるものだ。モオルダアはそんなに見つめられると、気になって自分が何を食べているのかすら解らない。彼の前には、この旅館の主人でありまた板長でもあるヤドヤ・メダマの特製目玉焼きがある。こんな面白いネタにも彼は気付いていない。若女将の視線がどうにも気になるのでモオルダアは辺りを見回してみると近くに新聞を見つけた。これを見ながら食べれば少しは気がまぎれるかも知れない。モオルダアが新聞に手を伸ばし広げると、真つ先に眼に飛び込んできたのがヒトオ・サシタに関する記事だった。

「あつ！」

モオルダアが思わず声をあげた。見ていた若女将もモオルダアにつられてビクツとした。彼女が気になってモオルダアの方へ近づいてくる。

「アイさん。大変だよ。セラビ刑事が・・・」

新聞には昨夜のヒトオ少年逮捕が誤認逮捕であつたということが書いてあつたのである。そんなはずはない。モオルダアはヒトオ少年の逮捕が間違いではないことは確信していた。それがどうして誤認逮捕なんてことになったのだろうか。新聞にはヒトオ少年が誤つて逮捕され、不当な取り調べを受けたストレスで心神喪失状態になつたとまで書かれている。警察はこの事件を担当したセラビ刑事を懲戒解雇にしたらしい。

「モオルダアさん、セラビ刑事がクビになつたの？ どうして？ これつてチョームカツク！」

「そうらしいねえ。どう考えてもチョーおかしなことだけど。あらゆる証拠がヒトオ少年の犯罪を・・・」

モオルダアは途中まで言いかけたが若女将にあまり詳しいことを話すとやっかいなことになりそうなので口を閉じた。

食堂で二人が話しているのを聞きつけて奥から女将のヒトミが出てきた。

「ちよつと、あなたは向こうへ行つていなさい」

彼女は若女将向かつてきつい口調で命令した。女将の様子がいづつもとどこか違うので若女将も口答えせずに食堂を出ていった。女将はモオルダアの手から新聞を取り上げて読み始めた。

「まあ、なんてことでしよう。モオルダアさん、これは本当のことなんですか。セラビ刑事はこんなへまをするような人じゃないはずです」

モオルダアはどうしてこの女将のことをセラビ刑事のことをここまで心配するのか少し疑問に思っていた。

「私もこれは何かの間違いだと思えますよ。ところでマダム、フロントの電話を借りてもいいですか」

「はあ、いいですけど。どうぞ使ってください」

女将はどうしてモオルダアが自分のことをマダムと呼んだのか少し疑問に思っていた。

モオルダアはフロントへ行くと一度辺りを見回してから電話をかけた。

「もしもし、セラビ刑事。いつたいどうしたんですか。あの新聞記事は本当なんですか」

「やあ、エフ・ビー・エルさんか。やられてしまったよ」

セラビ刑事の声に元気がない。まあ、当然といえば当然である。

「私もこんなことは初めてだったんだが。ヒトオ少年にはねえ、アリバイがあつたんだよ」

「アリバイがあつた!?!」

「キミ、この電話は旅館からか?」

「そうですよ。でもフロントの電話だから盗聴の心配はありませんよ。チョーオツケーっす!」

「なんだそれ。フロントの電話でも盗聴はされると思うけどな。まあいいか」

「そうなんですか? でもまあ、いいですよ。続けてください」

「事件の前日からヒトオの伯父の家に親戚一同が集まっていてねえ。そこにヒトオもいたんだそうだ。ヒトオは一度も

外出しなかつたみたいだし、逮捕した日も伯父の家から直接高校へ向かつたそうだ。親戚全員がそう証言してる」

「ちよつと待つてください。伯父というのは署長のことですね。もしかして署長がヒトオ少年をかばっているんじゃない

いでしようね」

「いやあいくら何でも、あれだけの殺人をやらかした犯人をかばう人はいないだろう。それに親戚といつても署長とは

直接血のつながりはないみたいだしねえ。ハー…。私もこんなことでクビになるなんて思つてもみながかつたがね」

「本当にやめちゃうんですか。ボクはどこか我々の見えないところに真実を隠している人たちがいるように思えるんで

すけど。それにミイラ事件の方はどうするんですか。ここでやめたら、あなたの苦勞が水の泡ですよ」

「まあ、これも人生つてヤツだよ。クビになつてしまったもんは仕方がない。私はもう警察の人間じゃないんだから、

何も出来ないよ。そうそう、ミイラ事件ならコビテのヤツが引き継ぐことになったぞ。まあ、あいつにはあんまり期待できないけどな。私はこれから署にいつて自分の荷物の片付けをしておくちやいかんから、この辺で失礼するよ」  
受話器を置いたモオルダアはしばらく黙って考えていたが、最後に一度首をかしげてからこうつぶやいた。  
「なんかチョーワケワカンナー、つてかんじだな」

18

グタグタ遺体事件にヒトオ少年の釈放にミイラ死体事件。これらは全て別個に起きたことなのか、或いはこれらの出来事背景には共通の人物が暗躍しているのか。モオルダアはもう一度全てを一から考え直す必要があるように思ってきた。かれは例のボイスレコーダーに彼の考えを録音しようと思ったが、あいにく部屋に置きっぱなしにしてある。彼はまだフロントの電話のところにいたのである。そこに若女将アイがやって来た。

「モオルダアさん。これから署長のところに行つて事情を聞いてくるんでしょ？」

「なんだキミ。また電話を盗聴してたな」

「盗聴じゃありませんよ。調理場で電話の受話器を取つたら……」

「勝手に知らない話が聞こえてきたんだろ。でも残念でした、署長のところには行かないよ」

「どうして？ いま一番怪しいのは署長でしょ。私は優秀な女スパイだからそんなことはすぐに解るんだから。でも署長のところへ行かないならどこへ行くの？ 私もついていく」

「それは、教えられないよ」

「もー、チョーいじわる。私は本当に優秀な女スパイになりたいんだから、少しぐらい勉強させてよ」

「よし解つた。キミを優秀な女スパイの卵として、任務を命じよう」

「ホントに!? キヤ、嬉しい」

「女風呂に行つて、スケアラーに事情を話してここに来るように伝えてくれ」

「なにそれ、どういうこと？ そんなの女スパイじゃないよ」

「さあ、早く。こんな任務も果たせないようじゃ優秀な女スパイにはなれないぞ」

若女将アイは渋々女風呂へ向かっていった。

しばらくすると、スケアリーが若女将に連れられてやって来た。

「モオルダア、いったいどうしたと言うんですの？　せつかくゆつくり温泉に入っていたというのに。どうしてヒトオは釈放されたんですの？」

「スケアリー、どうやらゆつくりしている暇はなくなりそうだよ。すぐに出かけなくちゃ」

「出かけるつてどこにですか？」

モオルダアは若女将の方をチラッとみてから言う。

「ここではちよつと言えないけど」

「そうですね。まあいいですわ。温泉ばかりじゃ飽きてしまいますし」

エフ・ビー・エルの二人は車に乗ってどこかへ消えてしまった。若女将アイが二人の後を見送っていた。「私が本当に優秀な女スパイだつてことが解ればきつとモオルダアさんは私に興味を持つに違いないわ。優秀な捜査官と優秀な女スパイ。こんな理想的なカップルつて素晴らしいわ」夢見る少女アイは憧れの生活を思い描いていたが、彼女はまたモオルダアが優秀な捜査官ではない、ということに気付いていないようだ。

to be continued...

#006 「サマータイム (第一話)・C'est la Vie」 Little Mustapha



## #007 サマータイム (第二話) ・ 下田歌劇団

1

森

薄暗い森の中を進んでいくとやがて十メートル四方ほどの開けた場所にでる。一面に茂っている草が夏の陽を浴びてギラギラと輝いている。風もあまりなく暗い森の中からの場所へ出てくると、ムツとする暑さと草の臭いに目眩を起こすような気分になる。七年前もこの場所は今と変わりはなかった。今と違うのは七年前、ここにはミイラ死体が横たわっていたと言うことだ。

モオルダアは汗だくになって森の中をこの場所までやって来た。少しおくれて彼の後ろからやって来るスケアリーはかなり機嫌が悪そうだ。顔には手で汗をぬぐった時についた泥の跡がある。

「ちよいと、モオルダア。あなたすぐに着くなんて言っておいて、いったいいつまで歩かせるつもりなんですか？ あらいやだ、もうこんなにお洋服が汚れてしまいましたわ。クリーニンング代はあなたに払ってもらいますわよ」

「もう着いたようだよ。ここが七年前の現場だ。思っていたよりも遠かったねえ」

「遠いなんてもんじゃありませんわ。あたくしもう足が棒になっていますのよ。それにこの暑さはなんですか。こんなことならまだ温泉に入っていればよかったですわ」

「でも、これで一つ解ったことがあるよ。若い女性は自ら進んで一人でこんなところにはやって来ないと言うことだよ。キミの様子を見れば良く解る。でもまあキミは若い女性と言うには少し……」

おつと危ない。またスケアリーの鉄拳を喰らうところだった。でもスケアリーは疲れていてあまりモオルダアの話聞いていない。

「キミは都会の人間だから山歩きには慣れてないけどね。でも警察の言うように、ここで見つかった被害者の死因が病気や事故だと思うのはおかしい話だよ。病気の人間がわざわざ一人でこんなところに歩いてくるはずはないし、事故だとしても、どうして若い女性がこんなところにいたんだ？ ということだよ。ここで見つかった女性はことは全く違う方向にある友人の家に遊びに行ったんだから。そうするとセラビ刑事のように殺人と考えるのも無理はないね」

「あなたはどう思うんです？ 殺人だとは思っていないんですか？」

「今のところはまだ解らないよ。それを調べにここまでやって来たんだから」

モオルダアはうろつきながら辺りの地面を調べている。今は遺体がないので好きなように色々なところを見て回れる。

「キミはここを見てどう思う？ 昨日の現場と何か違うところはあると思う？」

「そうですね。昨日と違うのは、ここにはほとんど木が生えていないということですかしら。昨日の現場も森の中の開けた場所でしたけれど、何本か木は生えていましたわねえ。これはきつとこの地質のせいですわ。ここはきつとむかしの火山活動で溶岩が流れたに違いありませんわ。この下はきつと硬い岩になっていて木は根付かないのかも知れませんか」

「こんな風に森の中にぽっかりと空いた穴のようなどころがあると、なんだかミステリアスだよねえ」

「あなたまさかここがE.O.の発着基地だとか言うんじゃないやありませんわよね」

「だったらいいんだけどね。セラビ刑事も言ってたけど、この辺りにE.O.はやって来てないみたいだよ」

モオルダアはまだ地面を調べていた。

「ちよつとここまで来てくれないか？」

モオルダアがスケアリーを呼び寄せた。

「何か見つかりましたの？」

「いや、そういうわけでもないんだけどね」

モオルダアは彼女が歩いてきた場所を見つめている。

「キミ、体重はどのくらいあるんだ？」

「まあ、よくもそんな失礼な質問が出来ますわねえ。あたくしの体重は全国のエレガントなレディーの平均体重よりも下回っていますのよ。それでいて美しいプロポーションを保つことにも見事に成功しているんですから」

「ボクはそんなことまでは聞いてないよ。でもまあ、キミががんばってフィットネスクラブに通っていることは知っているから、信じることにするよ。そうすると、女性がここへ歩いてきてもほとんど足跡は残らないってことだね」

スケアリーはそう言われて自分の歩いてきたところを振り返ってみると、そこには所々踏み倒された草があるものの足跡は残っていなかった。踏み倒された草もそのうち元どおりに真っ直ぐになりそうだ。

「どうでもいいですけど、あなたさつきからあたくしを実験道具にしていらっしやりませんか？ もしそうならあたくし承知いたしませんけど」

「い、いやあ、そんなことはないよ。こういう難解な事件は一人で考えるよりも、色々な意見があった方がね、色々とね、いい考えがね、へへっ」

モオルダアはすこし焦っている。

「そう、それならあたくしの考えを聞かせてあげますわ。被害者はここに自分の足でやって来たんじゃないわ。空から降ってきたんです。それで足跡がないんですよ。それから内蔵と血液がないのは上空の気圧の影響です」

スケアリーが声を荒げてめちやくちなことを言っている。これはどういうことか。たぶん、これ以上スケアリーを怒らせたならモオルダアは彼女の鉄拳を喰らうことになると思うことだ。それに気付いたモオルダアは何も言い返せなかった。

「そうかも知れないねえ、へへっ。それよりもこの辺りをもう一度搜索してみないか？」

「搜索なら七年前警察がしたはずですわ。それに七年も経っているのですよ。何も残っているはずはないはずでわ」

「それは解らないよ。時間が経たなければ気付かないものもあるからねえ。もしかすると何かが見つかるかも知れないよ」

モオルダアはまた辺りをうろついて何かおかしいところはないか探していた。いくら探しても見つかるわけではない。ここは七年前に警察が十分に調べてあるのだから。しばらくして、モオルダアの足が止まった。

「あつ、そうか。キミが変な説を言ってくれたおかげでいいこと思いついちゃった」

思いついた、とはなんだかひどい。モオルダアは思いつきで搜索をしている。

「ここに来るには何も下から森の斜面を登ってこなくてもいいんだ。上からここまで降りてくるんだったら、そっちの方が楽だよねえ」

モオルダアが自分がやって来たのと反対の方を見ると、この開けた場所の向こうにはまだ木々に覆われた斜面が小山のてっぺんまで続いているようだ。モオルダアはその斜面の方へ行き、上まで登っていきそうな場所を探した。彼は立ち止まってスケアリーを手招きして呼んだ。スケアリーは先程から早く帰りたいといった感じで黙ってモオルダアのやることを見ていたが、呼ばれると小さくため息をついてからゆっくり彼の方へ向かった。

「ほら、ここなら人が歩けそうだ」

ここから先の斜面は木が入り組んでいたり途中で人がどうやって通れないような急な場所があつたりするのだが、モオルダアが指さした先だけは人が登っていきそうな感じだった。ただし、そこには道が出来ているわけではないので、

登ろうと思つて十分に周囲を観察していないと気付かないルートである。

「警察はここも捜査したのかなあ」

「さあ、知りませんが。まさかあなた、登るなんて言わないでしょうね」

「もちろん、登るに決まつてるじゃないか」

そう言い終わる前にモオルダアは先にその斜面を登り始めていた。スケアリーも仕方なく後に続いた。

## 2

### 警察署・署長室

署長は皿の上の水ようかんを割り箸で半分に切つてそれを口の中に入れて。署長は満足げにその水ようかんをゆつくりと味わっている。彼の前にはコビテ刑事がかしこまつて座っている。署長は水ようかんを飲み込むと、またゆつくりとコビテに聞いた。

「どうだねコビテ君。捜査の方は予定どおりかね。うん、うん」

「はい署長。全て予定どおりです」

「うん、うん。それはよかつた。うん、うん。セラビ刑事がいなくなつてキミもさぞかしせいせいしていることだろうね。うん、うん」

「はい署長。これもすべて署長のおかげです」

「そうかね。それはよかつた。うん、うん。ところで署内に何か妙な行動を起こしている者はあるのかね。いたら直ちに報告するんだぞ。うん、うん」

「今のところそのような者は一人も」

「そうかね。うん、うん。それでいいのだよ。うん、うん。街が安全であるために我々は常に秩序を守つていかなければいけないよ。うん。キミも良く解るでしょ。うん、うん」

「はい、署長。ところで、署長。そろそろ教えてもらえないでしょうか。この計画の真意を」

「教えるにはキミはまだ若すぎるよ。うん、うん。キミは今までどおり、言われたことをすればそれでいいのだよ。治

安を守るためなんだからね。解るねコビテ君」

「はい署長。おっしゃるとおりです」

「うん、うん。それで、エフ・ビー・エルはどうした？」

「はい署長。予定どおり今日の午後公民館へ」

「そうか、そうか。それはよかった。うん、うん、うん。それじゃあ、キミも遅れないように公民館へ行くのだぞ。解つてるね。うん、うん。それじゃあ、もう行ってよいぞ。うん、うん」

「はい署長。失礼いたします」

この怪しい会話が終わると署長は残りの半分の水ようかんをほおぼって、また満足げな顔をした。うん、うん。

### 3

再び森

モオルダアとスケアリーは汗だくになりながら、斜面を登っている。しばらく行くと片側が急斜面になっているところへ出た。前を歩いていたモオルダアが振り返った。

「スケアリー、気をつけろよ。足を踏み外したら下まで真つ逆様だ」

振り返ったまま歩いているモオルダアは喋りながら自分で気付かないうちに一步、二歩と横へそれていった。そして三歩め。モオルダアは予想どおり足を踏み外して急な斜面を滑り落ちていった。スケアリーは驚いて斜面の下を覗いた。

「ちよいとモオルダア。大丈夫ですか？ 大丈夫なら返事をしなさい。返事をしないならあたくし帰りますわよ」

スケアリーは恐ろしいことを言っているが、彼女も人の子。それなりに心配はしている。下からモオルダアの声が聞こえてくると、少しホッとした表情になった。

「スケアリーすごいぞ。いい物見つけちゃった」

「いい物ってなんですか？ 変なキノコでもあったんですの？」

「そんな物よりもつとすごいよ」

モオルダアが何かを持って斜面をよじ登って来る。途中何度も足を滑らしてずるずると何メートルかずり落ちていきな

がら、やつとの事で元のところまで戻ってきた。もうモオルダアのシャツは泥だらけ。

「何があつたというんですの？」

「これだよ。さすがに警察もあんなところは搜索しなかつたんだろうねえ」

モオルダアはぼろ雑巾のような黒い固まりをスケアリーに見せた。よく見るとそれは泥にまみれた靴のようだ。

「やつぱり被害者はこの辺を通つたのかも知れないねえ。それも、かなり急いでいたのかも知れない。この辺で転んだかなんかして、靴が脱げたんじやないかな。遺体が靴を履いていたかどうか調べてみないといけないね。それでも、どうして被害者がここにいたか、ということについては何も解らないけど。でも少しは捜査が進展することにはなるね」

「どうでもいいですけど、もうそろそろ引き返しませんこと。早くしないと『下田歌劇団』の公演が見られなくなりますわよ」

「ああ、そうか。そんな予定があつたつけ。そんなものはどうでもいいんだけどなあ。ちよつと興味もあるしなあ」

モオルダアはこの先に何があるのか確かめたかつたがそれは後にすることにした。それにしてもモオルダアは運と直感だけで捜査をしているような気がします。恐るべし少女的第六感。

#### 4

##### 公民館

下田歌劇団の公演が行われる公民館。開場時間はもう過ぎていたが人影もまばらである。辺りにいるのはどこか特殊なオーラを放つ怪しい人ばかりである。エフ・ビー・エルの二人を乗せた車はどうか開演前に到着した。駐車場で車から降りた二人の所へ一人の男が近づいてくる。

「ああ、よかつた。間に合いましたね」

それはコビテ刑事だつた。

「あれ、キミはこんなところで何をしているんだ」

「私も捜査に協力したいと思ひましてね。あの封筒、ミステリアスであなた好みだつたでしょ」

「あれはキミが送つたものだつたのか。これって接待なのか？」

「そういうわけではないんです」

「そう言うとコビテ刑事は腕時計をチラッと見た。

「まだ開演までには時間がありますね。お二人に面白いものをお見せしようと思うんです。ちょっと来てください」  
コビテ刑事が二人の先に立って公民館の中に入っていた。

入り口を入ってすぐのロビーにはこれまでの下田歌劇団全公演のポスターが壁一面に張り出されている。ちよつとした下田歌劇団ミュージアムといった感じだ。ポスターには女性のようなメイクをしてキラキラした衣装を身につけたおじさん達の姿が描かれている。顔を真っ白にしてその上に真っ赤な口紅と頬紅、それから巨大なつけまつげまでしている。そんなおじさん達の姿はグロテスクを通り越して怪物である。やっぱり下田歌劇団ってそういう人たちだったようだ。悪い予感は見事的中だったのである。モオルダアとスケアリーは背中に何かムズムズするものを感じながらポスターを眺めている。

「コビテ刑事。キミが見せたかったのってこれなの？」

モオルダアは迷惑そうな顔をしてコビテ刑事に聞いた。

「まさか、これだけのためにあなた方を呼んだりはしませんよ。このポスターは入り口に近い方から純にだんだん古いものになっていくんです。一番奥が記念すべき第一回公演ということになるんですけど、相当古いものですよ。注意深く見ていけば面白いことに気がきますよ」

こう言ってコビテ刑事はモオルダアがポスターを見る様子を見ている。モオルダアは今回の公演から順に古い公演のポスターへと視線を移していく。途中まで来てモオルダアの眉毛がぴくつと動いた。モオルダアが何かに気付いたとみたコビテがニヤツとしている。モオルダアが一枚のポスターを指さした。

「コビテさん。この人、昔は綺麗だったんですね。なんだか男には見えないよ。どうせ見るんだつたらこの時が良かったなあ。今回のポスターは、あれじゃあまるでホラー映画だよ」

モオルダアはコビテ刑事が気付いて欲しいことには気付いていなかった。

「あははは。そうでしょう。その人は途中から入ったメンバーで、他の人よりちよつと若いんですよ。ボクも昔はファンでしたよ。あははは」

コビテ刑事は白々しく笑って見せた。

モオルダアはダメだったがスケアリーはどうだろう。コビテ刑事は今度はスケアリーの方を見ていた。スケアリーは

女装の男達よりもきらきらの衣装に興味があるようだ。各公演で微妙に変わっている衣装の違いを調べるために、ふるいポスターと新しいポスターの間を行ったり来たりしている。そうしている間に、スケアリーはあることに気付いた。「ねえ、ちよいと。もの凄い事実が判明いたしましたわよ」

スケアリーの声を聞くと綺麗な男のポスターに魅入っていたモオルダアが顔を上げて彼女を見た。

「このポスターを見ると、下田歌劇団は日本各地を巡業して回っているみたいですね。それで定期的にホームグラウンドの下田に戻ってきているのね。そうでございましょう？ コビテ刑事」

これを聴いてコビテ刑事がにんまりしている。

「スケアリー。それがどうかしたのか？」

モオルダアは数字にはあまり強くないのでポスターに記された公演の日付を見ても何も気付かなかったが、スケアリーは違った。

「モオルダア、下田歌劇団は七年ごとに下田へ戻ってきているんですの。これは、ただの偶然かしら？」

「これは、凄いことが解ってしまったね。すると、ミイラ事件があつた年に必ず下田歌劇団がここへやって来ていたということだね。コビテさん。あなたはこうしてこんなことを黙っていたんですか？」

コビテ刑事は興奮しているモオルダアとは対照的に落ち着いて答えた。

「どうです。私もなかなかやるでしょう。セラビ刑事にこのことを話したことがあるんですけどね。取り合ってくださいよ。でもさすがはエフ・ビー・エルですね。捜査の仕方を心得ている」

その時、開演時間が迫っていることを知らせるブザーが会場に鳴り響いた。

「あつ、もう始まりますよ。私は仕事があるのでこれで失礼します。あなた方は、ゆっくり楽しんでいてください。ステージが終わるまで彼らから話は聞けませんからねえ」

コビテ刑事は観客もまばらな会場へ入っていくエフ・ビー・エルの二人を見送った。二人が薄暗い会場の中へ消えていくと、コビテ刑事はホッと一息ついてから心の中でつぶやいた。

「やれやれ、一仕事終わった。これで私も昇進かな。それにしても署長はどうしてこんなことをするんだろう。まあ、彼らがどうなるかと私には関係ないことだ」

会場の中ではド派手な音楽が鳴り響き、恐怖のオカマミュージカルが始まったようだった。

## 「セミ女」

今この公民館で上演されているのは「セミ女」というミュージカル。7年間土の中で過ごし地上に出てからはほんの数日しか生きないセミと、七年に一度公演のために下田に戻ってくる下田歌劇団のイメージをだぶらせているのか、ここではいつもこの演目しか上演されないようである。また、「セミ」とは「半分」という意味の接頭辞でもある。セミ女とは半分女という意味になる。それもまたオカマ・ミュージカル歌劇団の演目として意識されたことなのだろうか。話には多くの人間が登場するが、団員は五人しかいないので各団員がいくつもの役をこなさなくてはいけない。ある有名な歌劇団では男役女役は完全分業制で、男役になるのはかなり難しいとも聞いているが、下田歌劇団ではそんなことはない。どの団員も男と女の両方を演じている。女を演じる時には鳥肌の立つような裏声で、男役の時には腹に響くような低い声で喋り、歌う。面白いことに、男役を演じる時も女装した上に男の衣装を付けることである。やはり基本は女、ということなのだろう。

セミ女の物語は歌と踊りを中心に進められていく。この歌と踊りは、華やかで明るく楽しげなものが多かった。それに各団員の歌と踊りの腕はかなりのものであった。おじさん、或いは中にはおじいさんといった方がいいようなオカマさん達によるものとは思えない身のこなしである。遠くから見るとぶんにゃには、これはこれで結構楽しめるものだ。

しかし、その歌と踊りに反して、物語の内容は陰惨でグロテスクなものだった。

昔あるところに、愛し合う男女がいた。女性はある時偶然に男の不倫現場を目撃する。女は男の不倫相手に激しく嫉妬し、やがてその女への復讐心を胸に秘めたまま山へ入って自らの命を絶った。浮かばれない女の霊はやがて恐怖のセミ女となってこの世に甦る。そして、七年に一度山の中から現れて村の若い娘の命を奪っていくのだった。

この出来すぎた話の内容に、モオルダアもスケアリーも興味を持ったのは言うまでもない。見事にミイラ事件を暗示している内容だ。

公演が終わると二人はすぐに会場の外にやってきた。

「なんだか、いろんな意味で驚くべき内容だったねえ」

「そうですわね。それよりも、あの音楽と物語のミスマッチが良くありませんわ。なんだか胸にイヤなものがかえっているような、後味の悪さがありますわね」

「それを意識してやっているとしたら、たいしたもんだけどね。それよりも、あの物語が何を意味しているのか。ちゃんと聞いてこないかね」  
二人は、楽屋の方へ向かっていった。

## 6

### 警察署

先程から警察署内では一人の警官が人目を気にしながらこそそこそと部屋から部屋へと歩き回り何かを探している。この警官は昨日の遺体発見現場で包丁と内臓を発見した男だ。警官はやつとのことと目的のものを見つけたらしい。それはシュレッダーにかけるために山積みされた資料の中にあつた。資料の中から一枚抜き出すと、それをさつと畳みポケットの中にした。この警官はこそ泥に転職してもそれなりに仕事をこなすだろう。彼は誰にも気付かれずに資料のあつた部屋から出ていくと、どこかへ電話をかけた。

「もしもし、ありやしたぜ。もう少しのところでシュレッダーでバラバラにされるとこでしたよ。刑事の言つたとおり、靴の片方は見つかつていやせんよ」

警官が小声で話している相手はセラビ刑事であつた。

「良くやつてくれた。助かつたよ。でも私はもう刑事ではないよ。刑事と呼ぶのはやめてくれ」

警察をクビになつて一度は事件の捜査を諦めていたセラビだったが、エフ・ビー・エルが七年前の現場で靴を発見したということとを彼に連絡すると、いてもたつてもいられなくなったようだ。密かに彼が一番信頼していた警官に連絡を取つて当時の資料を調べてもらふことにしたようだ。それにしてもシュレッダーにかけられそうだったとは、どういうことだろう。どんなものであれ捜査ファイルはそう簡単に処分できないはずだが、誰かが何かを隠そうとしているのだろうか。セラビは考え込ままじく動けなくなつてしまった。モオルダアと同じように少女的第六感が働いているのだろうか。いや、年齢で言えばセラビの方がモオルダアよりずっと上だから、セラビの少女的第六感と同じものをモオルダアが持っていると言つた方が正確だ。まあ、そんなことはどうでもいい。セラビはもう警察をクビになっている。ここはエフ・ビー・エルの二人に活躍してもらうしかないかも知れない、とセラビは考えた。

## 楽屋

楽屋の前には警備員が一人いた。モオルダアがエフ・ビー・エルの身分証を見せて中に入りたいというと、警備員が許可を取るからと言って楽屋の中に入っていった。

「ずいぶん待たせるんだねえ」

「そりゃあ、あの方達の心はレディーですから着替えをしていたりお化粧を落としていたりしているところを見られたくないんですわ」

「そこまで気にするかねえ」

モオルダアも彼らと同じ男であるが、モオルダアには彼らの気持ちには理解できない。当たり前と言えば、当たり前。

しばらくして警備員が出てきて彼らを通した。二人が楽屋の入り口に現れると、団員の視線は一斉にモオルダアに注がれた。モオルダアはたじろいだ。

「あらまあ、いい男じゃないの」

「あらホント。あなたあたし達の公演を見に来てくれたの。まあ、嬉しいわ。それに楽屋にまでやって来てくれるなんて」

団員たちは目を輝かせて、モオルダアを見ている。年を重ねてしわだらけになった顔に女性用の化粧品をねりたくっている。そんなオカマのおじさん達に見つめられるのは、さすがのモオルダアも恐ろしい気がした。

「あの、始めに言っておきますけど、ボクはあなたの方のファンでもないし、そういう趣味もありませんからね。我々はエフ・ビー・エル。ある事件に関する捜査であなたの方の話を聞きにやってきました」

「あら、そうなの残念ねえ。でも男前の捜査官になら何でも話してよくつてよ。なんなら夜までつきあつてあげてもいいわよ」

「あなた、ちよつと何言ってるのよ。この坊やが怖がつてるじゃないのよ。オホホホホ」

「あら、怖がらせてしまったかしら。ごめん遊ばせ。オホホホホ」

どうやら、聞き込みは手こずりそうな気がしてきます。完全にペースを奪われてしまったモオルダアに変わってスクアリーが先に質問した。

「あの、団員の方が一人少ないようですけど。今どこにいらっしやるのかしら？」

「ああ、あのコ。あのコなら女性がくるって聞いて逃げていきましたわ。あのコ、女アレルギーだから、女と同じ部屋にいただけでじんましんが出るそうよ。もし触られたりしようもんなら、大変よ。一度ひどい発作を起こして命が危なかったんだから。あたしも気取った女をみると鳥肌が立ちますけどねえ」

団員達は女性に対しては素っ気ない感じで話すようだ。スケアリーはもちろんこの状況を気に入らない。それに、団員達の喋り方はスケアリーとそっくりだから、私もうまくやらないと誰が喋っているのか解らなくなってしまいます。

「ちよいと待つてくださいいな。女アレルギーなんて聞いたことがございせんわ。もしかして我々に話を聞かれるとまじいことがあるので、逃げたということじゃございせんのか？」

「まあ、生意気な女ね。嘘だと思えばあなたが捕まえてあのコに触ってみればいいのよ。それでもしあのコが死んでしまったら、あなたを訴えますからね。覚悟しておきなさい」

女と半分女の恐ろしい戦いが始まってしまっそうだ。この状況に危機感を覚えたモオルダアが割って入った。

「まあまあ、いいじゃないか。あの人の話はボクが後で聞くから」

「さすが、いい男は物わかりもいいのね」

また団員達がモオルダアに熱い視線を送った。モオルダアは言葉を失ってしまったが、スケアリーはもう助けにくれそうにないので、何とか聞くべきことだけは聞こうとがんばった。

「我々が聞きたいのは、あの『セミ女』の物語についてです。あの話はいったい誰が考えたのですか」

「誰ってこともないけどねえ。自然にできあがっていったのよ」

「あなたそれじゃあ、何言ってるか解らないわよ」

もう一人の団員が横から口をだした。

「若い娘が山の中で襲われる話つてのはたくさんあるでしょ。あるつて言っても山賊なんかいたような、大昔のことよ。昔はそんな事件は妖怪の仕業つてことになってたのよ。そういう各地に残ってる妖怪伝説をあたしたちが下田歌劇団風にロマンティックなアレンジにしたのよ」

「セミのアイディアはあたしよ」

また別の団員が話しに加わった。

「私たち7年ごとにここで公演するでしょ。だからセミにしたらどうかっていつて、脚本を変えてみたら意外と受けが

良かったのよ」

「あら、始めは全然受けなかったのにあなたが強引に続けさせたんじゃない」

「何言ってるのよ。セミは始めっから台本に書いてあったのよ」

「団員達が好きなように話し始めたので、もうモオルダアは誰がどの話をしてたのか解らなくなってきた。」

「解りましたよ。セミ女の話はもういいです。それで、どうして公演が七年おきなんですか。日本中を回るとしても七年はちよつと長すぎませんかねえ」

「あなた、あたし達の生活がどんなに大変か解っていないようねえ。こんな小さな歌劇団じゃ、公演の上がりだけじゃとても生活なんて出来ないのよ。だから一ヶ月公演して次の一ヶ月はバーでアルバイトをしてお金を貯めるのよ。アルギーのあのコをスカウトしたのもそのバイト先でしたわねえ。あのコ、若くて可愛いかったからその時はちよつとだけ客の入りも増えて助かったわねえ。それも、しばらくすると元に戻ってしまったけれど」

「昔は良かったのにねえ」

「ホント、今じゃ考えられない盛況ぶりだったのよ」

「昔っていつのことですか？」

「戦後まもなくの頃よ。まだ初代の団員が活躍していた頃ねえ。懐かしいわ。初代の団員というのは実はあたし達の父親なのよ。あなた気付いてた？ あたくしたちみんな兄弟なのよ。ここにいないあのコ以外はね。びつくりでしょう？」

「びつくりはびつくりですが、まあ遺伝でこうなつたと考えたら、それほどでもない。」

「下田歌劇団は、あたくし達のお父様が兄弟で旗揚げしたのよ。人気が出ると新しいメンバーがどんどん増えていったわ」

黙って聞いていたスケアリーが一つ疑問に感じた。

「ちよつとまつてくださらない、あなた方のお父様もあなた方と同じように……その女性のようにはしていらしたんでしょう？ それなのに女性と結婚してあなた方が生まれたと言うことですか？」

スケアリーが話し出すと団員達は不機嫌な顔になる。

「この女は何も解つてないのねえ。昔は今ほどういう類の問題に関してオープンじゃなかったのよ。あたくし達のような人にとつて世間の目は冷たかったの。お父様はそれを気にして、好きでもない女と結婚してあたくし達を生んでくたさつたんですからねえ。そんなことも解らないで偉そうに捜査なんかしてるんじゃないわよ、まったく」

こんな風に言われてスケアリーは爆発寸前だ。女と半分女達の間で激しく火花が散っているのをモオルダアは見た。

「ねえ、スケアリー。キミは外で待っていた方がいいんじゃないかな」

モオルダアはスケアリーを無理矢理ドアの方へ引つ張っていった。その間も、彼女たち（？）のにらみ合いは続いていた。モオルダアがドアを閉めるとようやく楽屋内に平安が訪れたようだった。それと同時にまたモオルダアに熱い視線が注がれていた。モオルダアは背筋に冷たいものを感じて身震いした。早く話を聞いて引き上げよう。

「それで、それからどうしたんです？」

「ああ、そうでしたわねえ。当時は観光地と言ったらこういう温泉場が一番の人気だったでしょう。それでねえ、下田歌劇団も随分と儲かったのよ。あたくし達の代になる頃には団員の数も増えて、とうとう二つの組に分かれるまでになったのよ。一つが『骨組』一つが『粹組』と呼ばれていたわ。でもねえ、いい時と言うものは続かないもので、次第に下田歌劇団の人気も落ちていってね。すぐに経営難になってしまったのよ。それでねえ、私たちの『骨組』は一大決心をして、各地を巡業して回ることにしたのよ。それからすぐに『粹組』の方は解散してしまっただわ」

「どうして『粹組』は『骨組』と同じように巡業に出なかったのかなあ？」

「リーダーがねえ、意地をはって絶対に下田を離れないなんて言ってたからよ。あれはきつと始めつから『粹組』を潰すつもりだったのよ。『粹組』が解散して沢山の団員が路頭に迷う中、あのリーダーだけは上手いこと世渡りして、今じゃ警察署長をしてるって話よ」

これは驚き！ あのあやしい警察署長は半分女だったのです。

「本当ですか。なんだか凄いいことを聞いちゃった気がするなあ。そんなこと言って大丈夫なんですか」

「そんなことありませんわよ。リスクは承知の上ですよ。警察があることないこと理由をつけてあたくし達のような人間を捕まえるのはたやすいことですから、あの署長もあたくし達を脅して口止めしているのよ」

「それをあたくし達が危険を顧みず教えたってことが、どういうことか解ってるでしょう？ 坊や」

モオルダアはこの雰囲気になだならぬ恐怖を感じた。団員の一人が立ち上がってモオルダアに近寄っていく。それを合図にしたようにほかの団員達も立ち上がってゆつくりとモオルダアの方に近寄ってくる。彼らの目には明らかに先程までと違う妖しい輝きがあった。

「ねえ坊や、まだ時間はあるんでしよう。あたし達と一緒にいてくれたら、もつと凄いいことを教えてあげるわ」

「そうよ、坊や。とつても凄くて、とつても楽しいこと」

モオルダアがじわじわと壁際に追いつめられていく。

「知らない。知らない。ボク、何も聞いてないから、許して！」

「あら、そんなこと言ったってダメよ。もう聞いちゃったものは仕方ありませんわよ。黙って言うことを聞きなさい。坊や」

団員の一人のごつごつした手がモオルダアの頬を優しくなでた。その瞬間、モオルダアはキヤアと悲鳴をあげ団員達の間を通り抜けドアのところまで走っていった。

「ボク、何も聞いてませんからね。さよなら！」

楽屋の外に出るとモオルダアは凄い勢いでドアを閉めた。中からは団員達が大声で笑う声が聞こえてきた。大汗をかいて髪を振り乱しているモオルダアの姿をみた警備員は必至で笑いをこらえていた。

## 8

モオルダアは辺りを見回してスケアリーを探したがどこにも見あたらない。近くにいた警備員がそれに気付いたのかモオルダアに言った。

「あの女の人なら、帰ったみたいですよ。なんだか随分怒ってた」

警備員はモオルダアを見てまた笑いをこらえるのに必至のようだった。

「なんだ、そうなの。ありがとう」

モオルダアは早くこの場を立ち去りたかったので、急いで廊下を歩いて外へ向かった。途中、金属製のゴミ箱がグニャッと潰れているのを見つけた。きっとスケアリーがやり場のない怒りをぶつけたに違いない。恐ろしい感じだ。

外に出ると、スケアリーの車はもうそこにはなかった。本当に帰ってしまったようだ。

「なんだかもう、訳がわかんないや……」

モオルダアが肩を落としているとそこへ一台の車がやって来た。開いた窓からセラビ元刑事が顔をだしてモオルダアに手を振っている。

「やあ、エフ・ビー・エルさん。ここにいたか。良かった良かった。早く乗りなさい」

いきなり乗りなさいと言われても良く訳が解らなかったが、これまでのことも十分に訳が解らないので、訳が解らないついでに車に乗り込んだ。

車に乗り込んだモオルダアは先程、半分女の四人に迫られたショックでまだ青い顔をしていた。

「どうしたんだ、エフ・ビー・エルさん。顔色が悪いぞ」

「どうしたも何も、あれじゃほとんどセクハラですよ」

「なんだ、あのステージはそんなにショッキングだったのか？」

「ステージじゃありませんよ。ボクらは楽屋に行つて彼らに聞き込みをしたんです」

「キミ、楽屋に行つたのか？ アハハハ。それじゃあ、キミもわしと同じ目にあつたんだな」

「あれ、セラビさんも彼らのことを調べたことがあるんですか」

「調べたと言うより、調べようとしただけだな。あのミュージカルの物語を知ったら誰だつて怪しいと思うだろう。でもわしが楽屋に入るなり、奴らはわしにすり寄つてきやがつてね、気持ちが悪くてすぐに逃げ出してきたよ。よく考えたら、あの半分女達が犯人とは思えないからそれ以来は行つてないがね」

「へえ、でも署長のことも聞いたんですよ。それが合図で奴らはケダモの変わるんだ」

「署長？ なんのことだ？ 私が言った時はなんにも聞けなかつたぞ。あとで調べたら、私にすり寄つてきたのはただの冗談だつてことが解つたけどな。キミは何か話を聞いたのか？ そうだとしたら、キミはよほど気に入られているんだな。カレ、じゃなくて彼女らに」

## 9

### 宿屋

セラビとモオルダアが宿屋に到着して車を降りると、宿屋の中から女将が出てきた。

「あら、誰かと思つたらセラビさんとモオルダアさんじゃございせんか。セラビさん。この度は大変なことになつてしまつて。でも私はあなたのミスではないとちゃんと解つていますよ」

女将はモオルダアがまだ見たことのない心からの笑顔でセラビに話しかけている。

「やあ、女将さん。あれはあれで仕方のないことですよ。それよりも女将さん。食堂で一杯やりたいんだが、いいかな？」

「もちろん、いいですよ。うちはこんな観光シーズンだというのにあまりお客も入っておりませんし」

「エフ・ビー・エルさんキミもいいだろ。一杯ぐらい」

モオルダアはこれからいろいろ捜査について考えたいと思っていたが、セラビは何か面白いことを知っていそうなので、少しだけならつきあうことにした。

食堂の椅子に座った二人の前にビールが置かれた。二人はお互いのグラスをつきあわせてから、コップの中のビールを飲み干した。二人とも酒は好きなようだ。グラスを置くとセラビ刑事が話し始めた。

「キミが見つけた例の靴だがねえ、あれはやっぱり被害者が身につけていたものの可能性が高いよ」

「本当ですか、でもセラビさん今は警察には出入りできないんですよ。良く解りましたね。コビテ刑事にでも頼んだんですか？」

「まさか、あいつほど信用できないヤツはいないからな。私にはねえ、いろいろな情報を教えてくれる影の組織がついているんだよ」

セラビはこう言うのと照れ笑い浮かべた。自分で冗談を言ったことを恥ずかしがっているような感じだ。モオルダアはセラビのそんなところにどこか好感が持てるのだった。モオルダアもニコニコしている。

「それで、セラビさん。どう思いますか？ あの靴が被害者のものだったら、やっぱり被害者はあの小山の上から降りてきたと思いますか。でもそうだとすると、どうしてあの森の小山に登ったのか謎ですよねえ」

「そうだよなあ、キミが七年前に来てくれたら靴だつてすぐに発見されようし、山の上の捜査も出来たのになあ。今となつては山のとつぺんには何も手掛かりは残っていないしなあ」

「いや、ボクだつて偶然見つけただけですから」

いつもならモオルダアは「そりやあボクは優秀な捜査官ですからねえ」と言うはずなのだが、今回はやけに謙虚だ。どうやらこの二人は似たもの同士、気が合うのかも知れない。

「それでねえエフ・ビー・エルさん。私は靴が発見されたと聞いてね、気になって他の事件現場を調べてみたんだよ。キミも知っているかも知れないけど、事件現場の周囲の状況はどれもにているんだ。斜面を登っていったところに開けた場所があつて、その先にはまた斜面が続いている、という感じだね。キミがやったように現場から上に登っていく斜

面を中心に調べてみたんだがね……」

「何か出たんですか？」

モオルダアは少し興奮してきた。

「ほとんどダメだった」

なんだガツカリ。

「よく考えれば、キミが調べたところ以外の現場というのは事件から最低でも十四年は経っているんだからなあ。何も残っているはずはないんだが」

「それよりもこの暑い中をよく山歩きなんかしてましたねえ」

「最近の若いもんは口ばかり動かして少しも体を動かさねえからなあ。そんな奴らに比べたら私はまだまだ若いよ。坂道を登ったぐらいで息を切らしていたんじゃ優秀な捜査官とは言えないぞ」

「それって、ボクのことですか？」

「まあ、そういうことだ。ああ、そうだ。キミが余計なことを聞くから肝心なことを言い忘れるところだったよ。これもキミに言われて試したことなんだが。現場から人の足で登れるルートを登っていくとねえ、行き着く先は全て同じ場所なんだよ。山だからそんなのは当たり前だなんて言うなよ。事件現場の辺りはちようど小山の中腹にあたるところで、そこからどんなふうに登っていくかで、どこの頂上に着くか解らないと言うところなんだよ、それで、登った先には何があったと思う？」

「JFOの基地でしょう」

モオルダアがまじめな顔で言った後にニヤニヤ笑っている。

「惜しいねえ。そうだったらキミも大喜びだと思っただけどねえ。現実では喜び半分って感じかな。そこにあったのは古びた社やしろだったんだ。これだけでもキミの好奇心は満たされるかな？」

「好奇心半分、ガツカリ半分ってとこですかねえ」

「まあそうだろうねえ」

「それにしても、どうして警官達は現場からの登り斜面は調べなかったんでしようかねえ？」

「警察の中にもいろいろ派閥があつてねえ。私のやることに賛同するものもあれば、全く協力的でない奴らもいたんだよ。そういう奴らが捜索をすれば、私の捜査を邪魔することがあつてもおかしくはないよねえ。キミも気をつけた方が

いいぞ」

「優秀な捜査官には陰謀は付き物ですからね。へへっ」

なんだかこの二人はまじめに話してるんだか、ふざけているんだか解らなくなってきました。この後二人はとりとめのなない話をしていたのだが、セラビが急に真面目になつてモオルダアに聞いた。

「そういえばキミ。さつき車の中で署長がどうのつて言つてたよねえ。あれはいつたい何なんだ？」

「ああ、そうだった。署長はねえ。実は半分女なんですよ。つまりねえ、下田歌劇団の元団員なんです」

「なんだって!？」

セラビは驚ぎと伴におかしさをこらえきれないといった感じだった。その様子を見てモオルダア付け加えた。

「あつ、これ絶対に秘密ですよ。署長が知つたら、あの人逮捕まるつて言つてたから。まあ、ボクとしては捕まつてくれた方が安心なんですけど、きつとその後が怖いんだ」

モオルダアは楽屋で下田歌劇団の「半分女」達が彼に迫ってきた時の恐怖を思い出していた。

「へえ、あの署長がねえ。私の捜査の邪魔ばかりかしてると思つたら、もしかして私に気があつたのかも知れないなあ。アハハハ。きつとあの署長は私がカレ、いやカノジョの気持ちを理解しないから私をクビにしたんだな、アハハハ。でも大丈夫。私は宿屋の娘みたいに嗜好きじやないからねえ。誰にも話したりはしないよ」

「ところで、ここには盗み聞きの好きな女スパイはいないだろうねえ」

女将は嬉しそうにセラビの質問に答える。

「あの子はいま自分の部屋でなんだか知らないけど一生懸命勉強してますよ」

「そうか、それなら大丈夫だ。どうせキミもあの優秀な女スパイから私の話を聞いたんだろ」

優秀な女スパイと聞いてそれが若女将のアイだと言うことはモオルダアにもすぐに解つた。アイはモオルダアにこう言つたのだ。セラビは捜査に夢中になるあまりに結婚式をすつぽかしたと。

「全く、あいつには困つたもんだよ。どこに行つてもあの話をしやがるんだ。でも噂は噂だよ。全部を信じてもらつちゃ困る。私はわざと結婚式には行かなかつたんだよ。こんなことはキミには解らないかも知れないけどねえ、昔は結婚する当人同士が結婚を希望していないのに、周りの圧力で無理矢理結婚させられることがあつたんだよ。私にはねえ、他に愛している人がいたんだよ」

「あらいやだ、セラビさんたら、またそんな話をして」

近くにいた女将が顔を真っ赤にしている。

「ああ、女将。ビールをもう一杯頼むよ」

女将はビールを取りに奥へ消えていった。

「お互い、この旅館の女性陣には気をつけた方がいいってことだな」

セラビ刑事はモオルダアに言ったが、こういう話題にはあまり敏感ではないモオルダア。女将の様子を疑問に思っていたが、まだ何のことだか良く解っていない。とりあえずへへつ、と笑ってみせた。

「ところで、セラビさん。あなたはコビテ刑事に歌劇団のことを聞いて捜査をしたんですか」

「コビテ？ あいつは私には何にも協力してくれないよ」

「おかしいなあ、コビテ刑事はあなたに歌劇団が七年ごとにここにやって来て、それがちょうどミイラ事件と同じ時期だということをおあなたに教えたと言っていましたよ。それでもあなたは取り合ってくれなかつたとか」

モオルダアは納得がいけない顔をしている。

「あいつが刑事になる前からそんなことには気付いていたよ。あいつはきつと自分の有能なところをキミ達に見せたかつたんじゃないのか？」

「そういわれてもモオルダアはまだ納得がいけない。」

「あなたはその歌劇団についてはどう思ってるんですか？」

「ん？ 歌劇団？ まあ、怪しいと言えば、あの後から団員になったというヤツだな。知ってるだろう。あの女アレルギーとか言ってるやつだよ。あいつからは何度も話を聞いたがな、なんだかあいつは可愛そうなヤツだよ。あいつは元々、そっち方面の人間じゃないんだぜ。あのアレルギーのせいでもな生活が出来ないから、男ばかりのあの歌劇団に入団することになったんだ。本当は女が好きらしいんだけどねえ。好きなもんでも触られると死んでしまうほどの発作を起こすんじゃない、本心を偽って生きていくしかないよねえ。本当に可愛そうなヤツだよ」

「でもそういう感情が猟奇殺人につながる可能性は大いにありますよ。その女アレルギーの団員はちよつと怪しいなあ」モオルダアは今日のグロテスクなステージとその後の恐怖体験で、下田歌劇団をそうとう怪しい集団だと思っている。それに、女アレルギーというのは本当にあるのだろうか？ もしかすると事件との関係がないことを証明するための手段かも知れない。女にさわれない人間が若い女性の血と内臓を抜き取るなんてことは出来ないのだから。しかし、問題

はあの団員が他の団員に比べてかなり若いと言うこと。現在確認できているミイラ事件で一番ふるいものが起きた時、あの団員はまだ小さな子供であったはずだ。

「私の考えでは彼らは何の関係もないと思うがね」

セラビは下田歌劇団と事件の関連は否定している。

「まあ、キミがそう考えるなら、調べてみるのもいいと思うがね。私はねえ、この事件を解決できるのはキミ達しかいないような気がしてきたよ。警察はなぜかこの事件に関わりたがっていないように思えるんだ。こんなことはあまり考えたくないんだけどねえ。もしかすると警察が……」

これからセラビが興味深い話を始めようという時、スケアリーが食堂に入ってきた。

「あら、モオルダア。帰っていらしたの？ それにまだ夕方だというのにビールなんか飲んで。いったい何を考えているんですの。あたくしが必至になって捜査をしていたというのに。許しませんわよ」

「まあまあ、お嬢さん。私が無理を言っただけであつたらんだ。そんなに怒らないでくれ」

スケアリーはお嬢さんと言われるとすぐに機嫌が良くなる。

「それで、スケアリー。捜査って、いったい何を捜査していたんだ？」

「あたくしは、あの半分女の団員達がどうしても気に入らなから、本当に女アレルギーなんてものがあるのかどうか調べていたんですのよ。そうしたら世界中のどこにも女アレルギーなんてものはありませんでしたのよ。もしそんな病気があるとしたら、それは精神的なものですわ。アレルギーというのは人間の体内にあるものと異なるものが体内に進入することによって起こるんですから、人間が人間にアレルギーを起こすなんて、どう考えてもありませんわ」

「そうなのか、やつぱり彼らは少し怪しいところがあるね。ボクはちよつと行って調べてくるよ。セラビさん、この続きはまた今度」

食堂を飛び出していったモオルダアを見て、セラビは嬉しそうにしている。

「お嬢さん、あれは面白い男だねえ。でもねえ、私はあの男を見ていると私の若い頃を思い出すんだよ。もちろん私は死体を見て怖がったりはしなかったがね」

「あらそうですの。でもあたくしは多くの人がモオルダアを誤解していると思つていますのよ。彼は少しも優秀じゃございませんし、きつとのぞきが趣味の変態野郎ですわ」

「完璧な人間などどこにもいやしないよ」

セラビはなかなか渋い意見で話をしめくくると、女将にビール代を払って宿屋をあとにした。

「でも、あたくしは完璧ですわ」

スケアリーは密かに思っていた。

## 10

ドドメキ

モオルダアは下田歌劇団のメンバーが共同生活しているアパートの前までやって来ていた。なんとなく勢いでここまでやって来てしまったが、モオルダアは出来れば彼らにはもう会いたくないと思っていたのだ。モオルダアは楽屋で半分女達が彼に迫ってきた時の光景を思い出した。それはどんな悪夢よりも恐ろしい。モオルダアは二度三度と身震いしてから、引き返すべきか、それとも意を決して中へ入り彼らのことを本格的に調べてみるべきか考えていた。時々中から半分女達の笑い声が聞こえてくる。モオルダアにとつてそれは恐ろしい魔女の笑い声に聞こえてくる。モオルダアは夜の闇の中どうすべきか考えながら、かれこれ1時間近くもアパートの前をうろついている。

「おいモオルダア君」

突然、ささやくような男の声がモオルダアを呼び止めた。モオルダアがハッとして振り返る。

「あつ、ドドメキさん！」

モオルダアは幻でも見ているかのような目つきで彼を見つめている。

ドドメキさんとは、どこからともなく現れてモオルダアにいろいろと秘密の情報を教えてくれる謎の人物ということになっている。以前（「ドドメキ」）にも一度登場しているが、それはモオルダアの夢の中の話だったので実際にドドメキがモオルダアに接触するのはこれが初めて。彼は初対面であるにもかかわらずモオルダアがドドメキのことを知っていたので驚いていたが、謎の人物とは簡単にもものに動じたりはしない。落ち着いた感じでモオルダアに話しかけた。

「モオルダア君。キミは間違った所を捜査しているよ。どうもキミは人を信じすぎるところがあるようだが、そんなことが命取りになるぞ」

そうやってドドメキさんはモオルダアに一冊の古びた雑誌を手渡した。その雑誌はほんの何ページかのスケベなグラビア写真とくだらない記事のために、メインになって固い内容の記事が台無しになってしまっているという、よくある男性向けの週刊誌である。

モオルダアが受け取った雑誌をめくると、今では引退してしまったある女性アイドルの若き日の「お宝ビキニ写真」がモオルダアの目に飛び込んできた。

「あつ、この人。ボク大ファンだったんだよ。ボクがこの人のファンだったことがよく解りましたねえ。これ、くれるんですか？」

モオルダアが雑誌から目を上げるとドドメキさんの姿はもうそこにはなかった。謎の人物とは誰にも気付かれずにやって来て。誰にも気付かれずに去っていくのである。そして、曖昧なヒントだけ与えて肝心なことは何も語らない。

「あれ、ドドメキさん？ どこ行っちゃったの？」

モオルダアは辺りを見回したが、どこにもドドメキさんの姿はなかった。

「まあ、いいか。それにしてもいい物を手に入れたぞ」

モオルダアはもつとじっくりこのお宝グラビアを見るために宿屋へ戻ることにした。

## 11

お宝

モオルダアは宿屋の部屋に戻ると「お宝ビキニ写真」を眺めていた。しばらくすると、もう「お宝ビキニ写真」には飽きてしまったのか、雑誌を閉じると例のボイスレコーダーを手にした。

「ダイアン。人間の記憶というのは不思議なものだ。ボクはこの『お宝写真』を見たらきつとボクと彼女との甘く情熱に満ちた素晴らしい時期の記憶が甦ると思っていたのだが、この写真は今のボクにとってはただの写真でしかない」

ここで誤解のないように書いておくと、モオルダアと「お宝写真」の巨乳の元アイドルは付き合っていたわけではない。こんなことは賢明な読者なら書かなくても解るだろうが。モオルダアは当時、テレビや雑誌に登場する彼女と妄想の中で激しい恋愛をしていたのである。

「ダイアン。それにしてもどうしてドドメキさんはこんな雑誌をボクにくれたんだろうか。もしかするとその理由はボクが好きだったタレントの写真が載っているから、と言うことではないのかも知れない」

当たり前である。モオルダアはもう一度雑誌を手に取り、「お宝写真」以外のページをばらばらとめくっていった。最初の方から順にページをめくっていき、あと少しで最後のページというところでモオルダアの手が止まった。それから、そのページに指を挟んだまま表紙を確認した。

「ダイアン！ これは七年前の雑誌だよ。そして、ボクはここに驚くべき記事を発見したよ。タイトルはなんと『恐怖・セミ神様の祟り』なんともエキサイティングじゃないか。内容はどうやら七年前のミイラ事件と関連があるらしい。この記事は夏の怪奇特集として書かれたふざけたもので、これをそのまま捜査に使うわけにはいかないが、参考にするには十分な内容が書かれていそうだ」

モオルダアは黙って記事を読み始めた。そして読み終わるとまたボイスレコーダのボタンを押した。

「ダイアン。ボクはなんだか怖くなってくるよ。この記事を書いたライターは想像だけでこの記事を書いたのだろうか？ それにしては現実と重なる部分がありすぎるように思える。このセミ神様というのは森の中に棲んでいる妖怪で、セミ神様に若い女性を生け贄として捧げると、その者は富と権力を手に入れることが出来ると書いてある。生け贄を捧げるのは七年に一度。決まった月の決まった日に捧げなければいけないのだそう。そして、その場所は森の中に人知れず建っている社なのだ、ということだ。このライターは山奥に住む老婆からこの話を聞いたそうだが、その決まった日付と社のある場所はどうしても教えてもらえなかったそう。このライターに何とか話を聞きたいものだが、記事の最後にこう書いてある。ライターはセミ神様の祟りを恐れて、匿名でこの記事を投稿してきた。そのため、このライターがどのような人物で現在も生存しているかどうかは解らない、ということだ。こんなことを書いてみると、怖さは増すけど記事としての信憑性は全くなくなってしまうんだよなあ」

ここで、モオルダアはボイスレコーダを置いた。この記事の内容でにわかに盛り上がってしまったものの、事件の決定的な手掛かりはどこにもない。モオルダアは頭の中で膨らんだ期待がシューと音を立ててしぼんでいく感じだった。

ここへやって来てから怪しいものは沢山見てきた。ミイラ事件をまねようとしたグタグタ遺体事件とその容疑者ヒトオ・サンタ。彼が心神喪失状態なのと、なぜか彼が釈放されたというのも怪しい。それからあの恐ろしい「下田歌劇団」も怪しすぎる。考えてみれば怪しいものはたくさんあった。三十年以上も同じ事件を捜査しているセラビさんも、それから、信用できないコピテ刑事も、それに、この旅館の経営者一家だって怪しい。どうしてみんな名前が目に関係して

いるんだ！

モオルダアの頭はだんだん混乱してきて関係のないことまで考え始めている。あまり混乱して、考えても何も出てきそうにないので彼はもう一度「お宝ビキニ写真」のページを開いて眺めていた。モオルダアの混乱は「お宝ビキニ写真」の効果で次第に収まってきた。それから、彼はもう一度「セミ神様」の記事を読んでみた。今度は1度目に読んだ時よりも冷静に読むことが出来た。読み終わるとモオルダアはもう一度ボイスレコーダにてをのぼした。

「ダイアン。ボクは重要なことを忘れていたよ。貧困生活から一転して富と権力を手に入れた警察署長がいたことを。しかし、あの警察署長のところにいきなりミイラ事件の捜査をしに行くのは問題がある。もし署長が事件と全く関わりがないと解れば、エフ・ビー・エルの信用は地に落ちることになるだろう。ただ、助かるのはあの釈放されたヒトオ少年がまだ署長の家に滞在しているということだ。ヒトオ少年の状態を調べるふりをして署長の所へ行つて、いろいろ聞き出すことにしよう。それでも、署長に怪しいところがあれば、また捜査は振り出しと言うことになるかも知れないが、そうなった時に容疑者として挙げられるのは、やはり……」

モオルダアがここまで喋った時にボイスレコーダの録音ランプが消えた。どうやら電池切れらしい。

「何だよまったく。買ったばかりなのになあ。ボクの素晴らしい全捜査の記録を残しておく予定だったのに」

こうつぶやいてから近くのメモ帳に手を伸ばした。続きは手書きにするらしい。モオルダアは「容疑者は下田歌劇団だ！」とそこに書いた。その後、彼はまた「お宝ビキニ写真」を眺めていたが、いつしかそのお宝ページを枕にしてそのまま眠ってしまった。

## 12

### 署長室

署長は大きな革張りの椅子にゆったりと腰掛けている。予想どおり、前にはコビテ刑事が神妙な感じで座っている。コビテが署長に呼び出されてから、二人は会話のないまましばらくこうして二人で向かい合っていた。コビテ刑事はあまりこういった沈黙は気持ちのいいものではないと感じていたが、彼の方から署長に話しかけることは滅多になかった。コビテはこの署長から自分の将来を約束されている。そして署長はみだりに話しかけられることを嫌っているのも

知っている。署長の機嫌を損ねるようなことをするよりも、こうして息が詰まりそうな沈黙に耐えている方が賢明なのだ。やつとのもので、署長が口を開いた。

「どうだねコビテ君。ミイラ事件の犯人は捕まりそうかね？ うん、うん」

「いいえ、署長。今のところはまだ何とも言えません」

「そうだろうねえ、コビテ君。気味は犯人逮捕などどうでもいいと思っっている。そうじゃないかね？ コビテ君。うん、うん」

「いいえ、署長。私も刑事として犯人逮捕には全力を……」

「うん、うん。嘘をつくことはないよ、コビテ君。キミはそれでいいのだよ。利益の追求、それこそが人間としての正しい姿だよ。コビテ君。キミのやっていることは正しいのだよ。うん、うん。それよりも、コビテ君。あのエフ・ビー・エルの二人はどうしているかね？ 何か新しい手掛かりでも見つけたりはしてないかね？ うん、うん」

「いいえ、署長。彼らはまだ『下田歌劇団』が怪しいと思っっているようです。男の方が彼らの家の前で張り込んでいるのを目撃しました」

「うん、うん。そうかね。コビテ君、キミはこれからまたミイラ事件が起こると思うかね？」

「いいえ、署長。先日のグダグダ遺体事件で最後かと思われませんが」

「うん、うん。そう思うかね。でもエフ・ビー・エルがあの歌劇団の捜査をしている最中に別の所でミイラ殺人事件が起こったとしたら、彼らは何らかの形で責任を取る必要があるだろうねえ。違うかね？ コビテ君。たとえばあのセラビ刑事みたいにねえ。うん、うん」

これまでずっと伏し目がちに署長と喋っていたコビテ刑事はチラッと署長の目を覗き見た。

「署長。もしかして署長はミイラ事件に関して何かをご存じなのではないでしょうか」

「たとえ話ですよ。コビテ君。うん、うん。キミも私も正義とは無縁の者同士。ライバルや邪魔者には消えてもらった方がいいだろう？ コビテ君。うん、うん、うん。それではコビテ君。また必要になったらキミに指示を出すから、その時は頼んだよ。うん、うん。そうしていれば私がキミの望むものをキミに与えるというのだから。楽な仕事だとは思わないかね？ うん、うん。それではもう行ってよいぞ。うん、うん」

「はあ、署長。それでは失礼します」

コビテ刑事は浮かない顔をして署長室をあとにした。廊下を歩きながら、コビテは考えた。子供の頃、彼の夢は警官

になって悪いヤツを捕まえることだった。そして、その夢を大人になるまで変わらずに持ち続け、そして警察に入った。しかし、その夢が叶った時、コビテ刑事の内面はすっかり変わっていた。人は大人になるまでに沢山の悪を目にし、悪知恵を身につける。人はそれを処世術とよんだりもする。コビテも他の人間と同様にその処世術を身につけていった。しかし、彼は胸の中にある「警官になる」という子供の頃の純粋な夢だけは、世の中の悪から守ってきたつもりだった。そして警官になって夢を叶えた。そうなるともう彼には守るものはなくなったのであろうか、彼の中には彼が身につけた処世術しか残っていなかったのである。コビテ刑事は立ち止まった。私は署長が言うように「正義とは無縁の男」なのだろうか。彼には解らなかつた。彼に解っているのは署長なしに今の彼の地位はなかつたということだけである。

「署長が無いと言えそこには正義などないのだ」

コビテ刑事はこういう結論を出すと、薄暗い廊下を歩き始めた。

*to be continued...*

#007 「サマータイム (第二話)・下田歌劇団」 Little Mustapha



## #008 サマータイム (第三話) ・セミ神様

1

夢

モオルダアは夢を見ていた。彼は今太陽が照りつける白砂のビーチにいる。彼の隣にはあの雑誌に載っていた「お宝ビキニ写真」の巨乳の元アイドルがその写真の姿のまま立っている。二人は並んで眩しそうに水平線を眺めていた。

「美しい。キミと二人で見る世界は全てが完璧だよ」

モオルダアは隣のお宝ビキニに話しかけた。

「さすがは優秀な捜査官ね。それで私の洋服は見つけてくれたの？」

「キミの洋服？」

モオルダアは相手の変な質問を真面目に考えていた。

「そういえばボクはキミが服を着ているところを見たことがなかったね」

「それじゃあ、あなたは私の服をまだ見つけていないのね。ひどい、ひどいわモオルダア」

お宝ビキニが目には涙をいっぱいにためてモオルダアに言った。モオルダアは困っている。彼が何を言っているのやら、冷や汗をかきながらいろいろ考えていると、やがて夢の舞台は公民館に移った。そこは昨日、モオルダアが「下田歌劇団」の舞台を見た場所である。隣の席にはお宝ビキニがやはりビキニ姿のまま座っている。もう先程のように泣きそうな顔はしていない。

モオルダアが舞台上を見つめている、そこにモオルダアの隣にいるはずのお宝ビキニが現れて演技を始めた。モオルダアは横の席を確認してみたが、そこにもやはり舞台の上にいるのと同じお宝ビキニが座っている。モオルダアは気にせずに舞台を眺めていた。

舞台の上ではお宝ビキニが昨日彼の見た「セミ女」の物語を演じている。やがて、舞台の上にもう一人の登場人物が現れた。それもまたお宝ビキニであった。話が進んでいくと舞台の上には何人ものお宝ビキニが同じ姿形で登場してきて、舞台はお宝ビキニであふれそうになっている。

モオルダアは嬉しそうにしながら会場全体を見渡してみた。すると舞台の上だけでなく、この公民館の全ての人間が

お宝ビキニの巨乳の元アイドルなのである。大量のお宝ビキニに囲まれたモオルダアは嬉しくてたまらない。モオルダアは横に座っているお宝ビキニの肩に手を回した。モオルダアの手がお宝ビキニの肩に触れると、彼は指先にごつごつした筋肉を感じた。モオルダアがびつくりして手を引つ込めた。それは明らかに女性の肩の感触ではなかった。彼は言い知れぬ恐怖を感じて辺りを見回してみた。するとそれまで会場で埋め尽くしていたお宝ビキニが全員スキヤナー副長官に変わっていた。会場を埋め尽くした大量のスキヤナー副長官は一斉にモオルダアに視線を向けると、全員同時に口を開いた。

「おい、モオルダア！ 何やってるんだ！」

会場にこの言葉が大音量で響き渡った。ここでモオルダアはハツとして目を覚ました。

モオルダアがこの奇妙な夢から覚めると彼は自分の顔の下に昨日ドドメキにもらったお宝ビキニ写真の雑誌があるのに気付いた。モオルダアは昨晩うつぶせに寝ころんでお宝ビキニ写真を眺めているうちにそのまま眠ってしまったのだ。お宝ビキニ写真のページはモオルダアが流したよだれで濡れていた。

「あつ、しまった！」

モオルダアは慌ててちり紙を何枚か取り出すとそのよだれを注意深くふき取った。しかし、もう時すでに遅くお宝ビキニのページはよだれでふやけてしわしわになっていた。彼はしばらく肩を落としてそのしわしわになった雑誌を眺めていたが、やがてこんなことをしている場合ではない、と言うことを思い出して時計に目をやった。もう午前十時を過ぎている。モオルダアは慌てて服を着替えて捜査に出る準備をした。どうやら食堂に行つてメダマさん特製の目玉焼きを食べている時間はなさそうだ。モオルダアはスケアリーの部屋に電話をかけてみたが彼女はもうどこかへ行つてしまったようである。仕方がないので一人で捜査に出かけることにした。

モオルダアが部屋を出ると廊下に掃除機を持った若女将アイの姿があつた。若女将は真面目に旅館を手伝つて部屋の掃除でもしているのであるか。若女将はモオルダアに気付いたがあまり彼の方を見ようとはしなかつた。モオルダア

は彼女の方に近寄っていき声をかけた。

「やあ、おはよう。キミ、スケアリーを見なかった？」

「スケアリーさんなら、山奥に秘湯を見つけて出かけていきました」

少しむくれた感じで話す若女将をモオルダアは不思議に思った。

「そうなのか、全く困ったなあ。今日は忙しくなりそうなのに」

若女将はその言葉には全く反応しなかった。

「モオルダアさん。あなたは今日食堂に降りてきませんでしたね。それってあたくしと顔を合わせるのがイヤだったからなの？ モオルダアさん、私のこともう嫌いになっちゃったの？」

「何を言ってるんだよ。嫌いになるもなにも、ボクはまだキミのことを・・・」

そう、その通り。若女将の質問はおかしいのです。モオルダアはまだ若女将を好きになってもいないので、嫌いになっちゃうこともないのです。でもモオルダアはなんとなく悪い気がしたので最後まで言わずにいた。

「今日はただ寝坊しただけだよ」

「そうなの、それじゃあ私を捜査に連れっけていってくれるわね。スケアリーさんがいなくて困っているんですよ。だからあたしが一緒に行つてあげる」

アイはニコニコしながら言った。スケアリーがいないと困ることは困るのだが、若女将が来たらもつと困る。モオルダアは逃げ出すようにしながら言った。

「いや、キミを連れて行くわけにはいかないよ。今日の捜査は特別なものなんだ。キミがいくら優秀な女スパイだと言つても、キミには無理だよ」

モオルダアは後ずさりしながら適当なことを言つて、何とかその場を逃げ出した。

若女将アイはしつこくモオルダアを追いかけるようなことはしなかった。今日はそのために旅館の部屋の掃除をかってでたのである。

「もう、こうなつたら実力行使よ」

若女将は何かたくらんでいるようだ。

## 署長宅

モオルダアは署長宅の玄関先で呼び鈴を鳴らすと中から目つきの悪い女性が顔をだした。どうやら彼女は署長夫人のようだ。署長が半分女であることを密かに知っているモオルダアは、署長夫人の上品ではあるが疲れ切ったその顔つきの理由が解るような気がした。夫人が署長と一緒にこの家に長いこと暮らしているのは夫婦の絆があるからではない。彼女は夫である署長の妻として暮らすことで得られる高級で安定した生活のために長いこと夫人の役割を演じてきたに違いない。

そういう結びつきはある局面では夫婦の結びつきよりも強い結束力を生むことがある。もし署長が何か悪いことをしているのなら、それをあげようとやって来たモオルダアをこの夫人が中に入れてくれるはずはない。モオルダアは少し心配だったが、予想に反して夫人はモオルダアを見るとすんなり中へ彼を通した。

モオルダアは庭に面した縁側へ案内された。そこには署長が座って庭を眺めていた。

「ああ、キミはエフ・ビー・エルのモオルダア君だったね。うん、うん。よく来てくれたね。まあ座りなさい。うん、うん」

ゆつくりと喋る署長にはどこか人を引きつける魅力があつたが、その魅力はなんとなく冷たくて薄暗い感じのするものであつた。モオルダアは言われるまま縁側に腰をかけた。

モオルダアは庭に目をやった。そこにはグタグタ遺体事件の容疑者として一度警察に捕まったヒトオ少年の姿があつた。モオルダアの視線はヒトオ少年に釘付けになつた。ヒトオ少年は陸上部の試合用の上着を身につけている。そして短パンは履かずに頭の上にかぶつていた。陸上部のランニングシャツの下はブリーフだけだつた。靴も履かずに庭を駆け回っている。ニヤニヤしながら庭を走り回るヒトオ少年をみて、モオルダアは彼の精神状態が少しも回復していないことが解つた。モオルダアの様子を見た署長はニコニコしている。

「あの子、面白いでしょう？ うん、うん。昔からひょうきんなどころがある子でねえ、よくあんな風にして遊んでくれるんですよ。うん、うん。逮捕された時にはかなりまいっていたようですよ。すけどねえ、今ではすっかり良くなつたようですよ。うん、うん、うん」

あれでどこが良くなつたというのだ？ この署長はもの凄い嘘を平気でついている。モオルダアにだつてそれくらいは

解る。短パンを頭にかぶって走り回る少年が女子生徒にモテモテの陸上部部長なわけではない。パンツ丸出しでニヤニヤしている少年が大学に推薦入学出来るはずもない。

「それじゃあ、ヒトオ君に話を聞くことも出来るんですね」  
モオルダアが試しに聞いてみた。

「いやいや、それは無理ですよ。モオルダアさん。あの子にはもうすぐ陸上の大会が控えているのでねえ。うん、うん。それに、また逮捕されるんじゃないかって最近とつても怯えているのだよ。うん、うん。あの子のことは私が良く知っているから、私に聞けば何でも教えてあげますよ。うん、うん。もしあの子に余計なことを聞いて、またあの子がおかしくなってしまうたら、あなたも何かしら責任を取らなくてはいけなくなってしまうですよ。モオルダアさん。解つてますね。うん、うん、うん」

署長に聞いても嘘しか喋らないに決まっている。しかし、署長から何かを聞き出さないとここに来た意味がない。ここはとりあえず騙されてみることにしよう。

「そうですか。それは残念でした。いや、でもボクはヒトオ君が犯人だとは思っていませんよ。きつと何かに巻き込まれただけなんです。もしかするとそれがミイラ事件と何か関わりがあるんじゃないかと思ひまして。それでですねえ、今日ここに来たのはそつちの事件ことなんです。実はどうにも捜査が先に進まなくて、それで署長から何か助言はいただけないかと思ひましてね」

「おつほつほつほ。これはおかしな話だね。うん、うん。我々があなた方に協力を求めたというのに、あなた方が私に助言を求めてくるとは。モオルダアさん。あなたはおかしな人ですよ。おつほつほつほ」  
腹の立つ笑い方だったがモオルダアは黙って聞いていた。

「うん、うん。聞くところによれば、キミは今あのか歌劇団を調べているそうだね。私もそれで正解だと思うがね。うん、うん。あの歌劇団のメンバーは私も怪しいと思つているのですよ。でもねえ、モオルダアさん。あいつらもなかなか賢い連中でねえ、いくら調べても尻尾を見せないのだよ。うん、うん」

署長は「何とか歌劇団」などとわざと名前を知らないふりをしている。自分が所属していたところの名前を忘れるわけではない。モオルダアは自分の知つていることを署長に話して彼を弱らせたと思つたが、それはまだ早い。署長が半分女であることをネタに署長を問いつめても何も解りそうにはないし、その事実が署長と事件との関連を示している訳ではないのだ。それに、こういうネタは相手が開き直つてそれを認めてしまつたらおしまいなのである。

「うん、うん。モオルダア君。捜査は忍耐だよ。あの何とか歌劇団を徹底的に調べたまえ。私も出来る限り協力はするよ。うん、うん。犯人はきつとあの歌劇団の中にいるよ」

署長は歌劇団を犯人にしたがっているような気がする。歌劇団を潰して自分の過去を葬り去ろうという魂胆なのだろうか？

「でも署長さん。もし『下田歌劇団』が潔白だったとしたら、他に怪しいのはあなたの甥のヒトオ君になりますよ。もしかしてあなたはヒトオ君をかばおうとはしていませんか」

モオルダアのこの質問に対して署長は彼より先に切り札を出した。

「うん、うん。さすがに優秀な捜査官だねえ。でも私は身内をかばうために嘘をついたりはしないよ。それにわざわざキミ達を呼ぶようなこともしない。うん、うん。でもやはりこれは言っておかなければいけないねえ。あの歌劇団の中には人間でない者が一人混ざっているだよ。キミなら解るね。モオルダア君。うん、うん」

そういつて署長は空を指さした。

「宇宙人!？」

署長はモオルダアが地球外生命体のこととなると半ば本能的に食い付いてくるということを知っていたようだ。

「うん、うん。そういうことだよ。モオルダア君。こんなところでぐずぐずしていないで、早く捜査に戻りたまえ。うん、うん」

モオルダアはいとも簡単に騙された。ここにスケアリーがいないのはかなりの痛手である。モオルダアがここまで来たのは、雑誌に載っていた「セミ神様」と署長との関連を調べるためであったが、そんなことは宇宙人の話で彼の頭から消えようとしている。

立ち上がるモオルダアを署長のいやらしい微笑みが見守っている。モオルダアは玄関にむつかって一歩足を踏み出したが、彼は後ろ髪を引かれるような感じがしていた。幸運にも少女的第六感がその力を発揮し始めたのだろうか。

#### 4

モオルダアは縁側から立ち去る前に一度振り返り部屋の中を覗き込んだ。部屋の中には大きな神棚があった。モオルダアの好奇心は取り憑く対象を宇宙人からこの神棚に乗り換えた。遠くにある大きな謎より、近くにある小さな謎。そ

ういうことなのかどうかは解らないが、モオルダアはこの神棚に興味を示している。それと同時に彼はセミ神様の記事と、彼が署長宅に来た目的を思い出していた。

神棚というのはいろいろなスタイルがあり、また地域によって変わった形のものがあるかも知れない。しかし、モオルダアが今見ている神棚は彼が始めて見るものだった。外見は箱宮の神棚と変わりはないのだが、そのお宮が中国の寺院のように朱色で塗られている。そこに置かれている神具なども彼が見たことのないものばかり。どれもぴかぴかに磨かれている。

「うわあ、すごいなあ。あれ、見てもいいですか？」

モオルダアは返事も聞かずに部屋の中へ入っていきこうとしていた。

「こらっ。なにやつてる！ この罰当たりめ！」

署長はこれまでの口調からは考えられないような勢いでモオルダアを怒鳴りつけた。モオルダアは驚いて足を止めた。

「署長さん、何もそんなに怒らなくても。署長さんは随分と信心深いようですねえ」

「うん、うん。すまんねえ。何しろ私は古い人間だからねえ。うん、うん」

署長の口調はまた元に戻った。モオルダアは注意深く神棚を眺めていた。しかし、見ただけではそれがセミ神様を祭っている神棚だと解るところはない。それでもあらゆる点で興味深いことは確かである。モオルダアは特に真ん中に飾られた神具が気になっている。本来ならそこには丸い鏡が置かれているはずだが、そこにあるのは欠けて三日月のような形をした鏡だった。

「それにしてもこの神棚、随分珍しいですねえ。この地域独自のものなんですか？」

「いや、その、この地域と言うよりも私の家独自と言うことかな。うん、うん」

署長の喋り方からは多少落ち着きが無くなったように感じられる。

奥では先程の署長の怒鳴り声を聞いた夫人がそつと彼らの様子をうかがっていたが、しばらくすると急いで電話のところへ向かった。夫人が電話で誰かと小声で話している。

「ちよつと、あの変な捜査官が来て面倒なことになりそうなんですよ。あなたがなんとか言つてすぐにここから帰るようにしてちょうだい」

「そんなことを言つたつて。ボクは何て言えばいいんですか」

「そんなことは自分で考えなさい。計画が失敗すればあなただつて終わりなんですからね。いまあの捜査官に替わりま

すから、頼みますよ！」

夫人は受話器を置くと縁側の方へ歩いていった。そこではまだモオルダアと署長が神柵について話していた。

「それにしても、署長。あの神柵ピカピカですわねえ」

「それはそうだよ。毎日磨いているからねえ。うん、うん。最近の若者はこういうものを大切にしないから困るよ。うん、うん。キミも早く宇宙人に会えるようにお願いしてみたらどうかね。うん、うん、うん」

モオルダアはニヤリとして返した。

「それよりも、お金持ちになれるようにお願いしたいなあ。署長さんも毎日神様に願をかけてたからお金持ちになれたんでしょ？ ああ、それから何かお供え物をしなくちゃいけないのかな？」

そう言つてモオルダアは署長の顔を密かに覗き込んだ。明らかに顔色を変えている。モオルダアは確かな手応えを感じてきた。このまま行けば署長から何かを聞き出せるかも知れなかったが、そこへ夫人がやつて来て二人の話を止めた。

「モオルダアさん。コビテ刑事から電話が入っております」

「コビテ刑事!? どうしてここが解つたんだらう？」

疑問に思うのも当然ですが、実際には夫人がコビテに電話をかけたのです。コビテはモオルダアがここにいることを知っています。コビテ刑事は何とかしてモオルダアをこの家から追い出すように命じられたのですが、彼には上手い手が考えられません。彼は予定にないことにはうまく対処できないようです。今風に言えばアドリブが利かない人なのです。モオルダアが電話のところまで来て受話器を取った。

「もしもし、コビテ刑事。どうしてボクがここにいと解つたんですか？」

「いやあ、あのそれは、スケアリーさんに聞いたんだよ」

「ああ、そうなの。あれ？ でもボクはスケアリーにもここへ来ることは言っていないぞ」

「ああ、そうそう、そうだった。彼女も知らないって言ってたけど、多分署長のところじゃないかって、そんな感じ」

「そう、それで何か用事ですか？」

「ああ、そうだ。モオルダアさん大変ですよ。すぐに宿屋へ来てください！」

「大変って何が？」

「とにかく凄いです。あのあれが、とっても大変なんですよ」

「あれじゃあ、わかんないよ。それにボクは今とっても重要なことを聞き出せそうなんだよ」

「そんなこと言っていないで。モオルダアさん。大変です。スケアリーが死にました！」  
「????」

コビテ刑事の嘘はもうボロボロ。

「死んだって!? だってキミはスケアリーに聞いてここに電話したって言ってたじゃないか」

「いや、違うんです。そのあとです。大変なんです。きやーたすけてー!」

ここで電話はぷつりと切れてしまった。もちろん電話の向こうでは何も起きていなかったのだが、どうにもならなくなったコビテ刑事が自分で電話を切ったのである。モオルダアは訳が解らなかつたが、訳の解らないまま神棚の続きは忘れて署長宅をあとにした。コビテ刑事の追いだし作戦は一応成功したようだ。

## 5

下田歌劇団が共同生活しているアパート

下田歌劇団は街のはずれにあるアパートで共同生活をしている。普段は一番大きな部屋に団員が集まってくだらな話をして盛り上がる。世の女性と同様にここに住む半分女達も喋るのが好きなようだ。この部屋では食事もするし、寝るのにも団員はこの部屋を使っている。このアパートに彼らが入居してきた時にはそれぞれが部屋を持っていたのだが、その部屋は今では彼らの物置になってしまった。その中の一部屋だけは女性の来客があつた時のために女アレルギーの団員が避難する部屋として用意してある。

その避難用の部屋に女アレルギーの団員が入ってきた。女性の来客がなくても彼は時々ここで一人の時間を過ごす。他の団員達と違い、彼は心も体も男なのである。女性に触れただけで死んでしまうほどの発作を起こすために、彼は仕方なくこの男だらけの下田歌劇団に入ったのだが、時々他のメンバー達と一緒にいることにいたたまれなくなるようだ。

彼はダンスの引き出しから一枚の写真を撮りだした。そしてそれを眺めて大きくため息をついた。写真に写っているのは一人の女性。驚いたことにその女性は宿屋の若女将アイにうり二つだ。しかし、その色褪せた写真からその写真を撮ったのが昔のことであり、その写真に写っているのがアイではないことは解る。だとすると考えられることは一つだ

け。その写真の女性はアイの母親、ヒトミに違いない。

女アレルギーの団員は写真を眺めながら無意識のうちに写真に写ったヒトミの顔を指で撫でていた。彼の目からは大粒の目が流れている。彼は二十一年前の公演で始めてここへやって来たヒトミに一目惚れしたのである。すっかり中年になってしまった今でも彼の想いは増すばかり。何しろ彼はヒトミに近づくことさえ出来ない。それに相手は自分のことを他の団員達と同じような半分女だと思っっているのだ。他の団員達も彼のこの想いを知っていて、何とかしたいと思っはいたのだが、彼の女アレルギーという原因不明の病気には手の打ちようがない。ヒトミの写真を撮って彼に見せることぐらいしか彼らに出来ることはなかったのである。彼はこのどうにもならない想いを何編かの詩に込めていた。今もまた新しい詩を思いついたようである。

触りたい

死んでもいいから

触りたい

詩の才能はあまりないようですが、彼の気持ちは十分に伝わってきました。それにしても宿屋の女将ヒトミさんは結構モテモテなようです。

## 6

### 宿屋

モオルダアが宿屋に戻ってくると入り口からすぐのロビーでスケアリーと若女将アイがなにやら楽しそうに話している。この旅館はさほど大きくもなくロビーといっても小さなスペースにソファアとテーブルを置いただけの簡単なものだったので、モオルダアが入ってきたことも二人にはすぐに解った。若女将はモオルダアの姿を見るとすぐにその場を離れてどこかへ行ってしまった。なんだかモオルダアは嫌われてしまったみたい。若女将の行動が意外だったのでモオルダアはまず最初に驚くべきことに驚くのを忘れてしまった。死んだと言われたスケアリーがそこにいるということに。

「あれ、スケアリー。キミこんなところで何やってるんだ？ それにキミはあの若女将のことは嫌いなのかと思っった

けど、なんだか楽しそうだったねえ」

「あら、嫌いなことはありませんわよ。話してみたら結構素直ないい子でしたわ。それにあの子とあたくしは結構意見が合いますのよ。特にあなたのことに関しては」

「そうか、彼女もキミもボクにホの字ってことかな」

「あなたが変態だということですか？」

「なんだか納得がいかない。スケアリーがモオルダアのことを変態だと思っていることは知っているが、どうして若女将のアイまでが彼を変態だなんて言うのだろうか？ まあ、どうでもいいか。」

「ああ、そういえばキミ、死んだんじゃないか？」

スケアリーは一瞬この質問の意味がわからずに口を半分開けたままモオルダアを見つめていた。

「あなた、それって生きている人間に向かつて言う質問ですか？ それとも、あたくしがあなたのことを変態だと言っていることへの仕返しなのつもりですか？ もしそうなら承知いたしましたせんわよ」

「生きている人間にも死んでいる人間にもそんな質問はいたしませんわよ」

「いやいや、さつきコビテ刑事から連絡があつてね、キミが死んだなんて言つたんだ。キミ、さつきコビテ刑事と会つたんだろ？」

「あたくしは山奥の秘湯に行つて今さつき帰つてきたんですから、コビテ刑事と会うはずはありませんわ」

「そうなのか。いったい何なんだ、あのコビテっていう刑事は。もしかしてあの電話は捜査の邪魔をするためにかけてきたのかなあ」

「そうですよモオルダアさん。」

「ところでモオルダア。あなたは署長の家に行つて来たんでございませう？ 何か解りましたの？」

「ああ、何もなかったわけではないよ。まず始めにヒトオ少年は完全にいかれてしまったみたいだ。それから署長がいうには下田歌劇団の団員の一人は宇宙人だ」

「まあ、あなたはいつたいつまでそんなバカげたことを言っているつもりなんですか？」

「いやあ、全くバカげているよ。ボクも危うく騙されかけたけどねえ。今回に限つては宇宙人は出てこない気がするよ。それから、これが重要なんだ。署長は何か妙な神様を崇拝しているみたいだ。あれはきつとセミ神様だと思うね。スケアリー。キミは山奥の秘湯でなにか解つたことはあるのか？」

セミ神様と聞いてスケアリーの顔色が変わった。

「あなた、あたくしがただの観光で秘湯まで行ったと思っていらっしゃるの？」

「そうとしか思えないけど」

「モオルダア。聞いて驚かないでくださいませ。あたくしは秘湯である老婆に出会ったのよ。その方、誰だと思います？」

「ヤマンバ！」

モオルダアがすかさず答えた。

「もう、もう少し考えてから答えてくださらないかしら。しかも、ヤマンバってどういうことなんですの。なんだかむかつきますわ」

「解ったよ。もうすこし考えるから、ちよつと待ってて」

「もういいですわよ。あたくしが合った老婆というのは署長のお母様ですよ」

「何だつて、ホントに？」

「間違いありませんわ。その証拠にあたくし達とほんの少数の方達しか知らない事実。つまり署長が下田歌劇団の元メンバーだったということも知っていましたわ。ところで、モオルダア。どこでセミ神様のことをお知りになったの？」

「ああ、そうそう。昨日ねえドドメキさんに会ってねえ。七年前の雑誌をくれたんだ。それを読んでいたらセミ神様とかがでてきたんだ。でもふざけた感じの記事だったから証拠とするには不十分なだけだねえ。それで、セミ神様がどうかしたのか？」

その前にドドメキさんって誰なんでしょうか。スケアリーは聞きたかったが話がややこしくなりそうだったのでここはグツと我慢。

「署長の家は代々セミ神様を信仰しているんですよ。それよりも前に署長のことを話しておいた方が良さそうですね。署長は子供の頃この付近の山の中で両親と三人で暮らしていたそうよ。山の中の土地を切り開いて作った畑で作物を作ったり、山で焼いた炭を売って細々と暮らしていたそうです。署長が生まれてから数年後に戦争が始まって父親は戦死したそうよ。戦争が終わって何年かして、署長は町の少年といい仲になって良く町へ遊びに行くようになったの。つまりそのころから自分が半分女だっていうことに気付いていたのね。町の派手な生活にあこがれた彼はしばらくすると母親を山に残して家を飛び出したらしいのよ。そしてそのころ隆盛期だった下田歌劇団に入って忙しい日々を

送っていたのよ。署長は一度だけ歌劇団で稼いだお金を渡しに家に帰ってきたんですけど、そのあとはずっと長い間戻ってこなかったから、その間のことは良く解らないそうすわ。まったく、ひどい話ですわ」

「まったく、ひどい話ですけど。それでそれがなんだって言うんだ？」

「まだ、話は終わっていませんわよ。それは歌劇団の署長がリーダーをして『梓組』が解散する寸前のことだったんですよ。いきなり署長が家に帰ってきて神棚をよこせと言ってきたそうです。お母様は家を出たまま帰らない半分女の息子をもう家族とは思っていないかつたものですから、家宝でもある神棚は絶対に渡さないと突き返そうとしたんですけど、相手は体だけは男ですから腕力ではかありませんのよ。署長は強引にその神棚を持ち帰ってしまったのよ」

「ああ、それってボクが署長の家で見ただけかなあ。赤いヤツでしょ」

「きつとそうですわ。そのあと、署長はそれまでの名前を変えて警察に入ったそうですわ。そのあと異例の早さで出世してアツという間に署長の座まで上り詰めたと言うことです。お母様が言うにはそれはセミ神様の力を悪用したんだということすわ。あたくしはそんな迷信は信じませんけども」

モオルダアは聞きながら昨日読んだ雑誌の記事を思い出し出していた。その記事の中にも山奥に住む老婆というのが出ていた。

「ねえ、その老婆は生け贄のこととか言ってなかった？ それが解れば次のミイラ死体事件は未然に防げそうな気がするんだけど」

「言ってしまったわよ。でもそれを言ったらセミ神様の祟りがあるから絶対に言わないそうですわよ。セミ神様というのは普段は山の安全を守る神様で、特別な理由がない限り生け贄を捧げることはしないんだそうですわ」

「特別な理由って、どんな？ セミ神様に生け贄を捧げると富と権力が得られるんだろ」

「そんなことまでは聞きませんでしたわ。あたくしそんな話は少しも信じていませんし。でもセミ神様の力を自分の利益のために利用した署長にはいつかセミ神様の祟りがあると言っていましたわ。それよりもモオルダア。あなたはミイラ事件の犯人がセミ神様だとおっしゃるんじゃないでしょうねえ？」

「セミ神様なんていうのが本当にいいのかどうかは疑わしいけど、間違った信仰というのは人を間違った方向へ進ませしてしまうことがあると思うんだ。あの署長はセミ神様の力など利用しなくても、今の地位を得るだけの能力と狡猾さは持っていたはずだよ。でも名前を変えて警官となつて、全くのゼロからスタートするには何か心のよりどころがないと不安になるはずだよ。そこで署長はセミ神様に生け贄を捧げることでその不安を払拭していたとは考えられないかな

あ。山の中に若い女性を連れ込んで殺していったんだ。警察内部の人間の犯行なら何とかして証拠を消すことも出来るはずだし。それでここまで難解な事件になったんじゃないかなあ」

「じゃあ、犯人は署長ですか？」

スケアリーはあまり納得できないようだ。

「キミが納得できないのも解るけどね。問題はどうかやって死体をミイラにしたかだよ」

二人は黙って考え込んでしまった。こんな時に考え込んでも何も出てこないことは二人とも良く知っている。

「ねえ、スケアリー。ここはこの事件の専門家に意見を聞いてみないか？」

「その方が良さそうね」

二人はセラビの家へ向かった。

## 7

### 再び署長宅

署長の書斎の窓からコビテ刑事が庭を眺めている。庭ではまだヒトオ少年が頭に短パンをかぶったまま走り回っている。あれはまるつきり以前のヒトオ少年とは違う。こうなつた原因はもしかすると自分にもあるのかも知れない。コビテ刑事はそんなことを考えていた。そこへ、署長が入ってきた。

「うん、うん。コビテ君。待たせてしまったねえ」

署長が入ってくるとコビテは厳しい口調で話し始めた。

「署長！ いったい何なんですか。ボクにだつて出来ることと出来ないことがあるんです。無理な命令をするのはやめてください」

「うん、うん。どうしたんだね、コビテ君。キミは立派に任務を果たしてモオルダア君を追い返してくれたじゃないか。うん、うん」

そういながら署長は椅子に腰掛けた。

「署長。ボクはもう訳も解らないまま、あなたの命令に従うことには耐えられそうにありません」

「うん、うん。そうだろうねえ。キミは今まで良く私に尽くしてくれたよ。そろそろ真相を教えても良い頃かも知れないねえ。うん、うん」

署長はニコニコしながらうなずいて先を続けた。

「コビテ君。キミには信仰心というものがあるのかね」

「信仰心ですか。特にありませんけど。でもたまには先祖の墓参りぐらいはします」

「うん、うん。そうかね。いけませんよ、そんなことじゃ。この話を聞くからにはキミにも厚い信仰心を持ってもらわないと。うん、うん。どうやらキミは神様なんてものは信じていないようだね」

「はい、署長。私は現実のみを信じています」

「それじゃあ、実際に神様の起こす奇跡を目にすれば信じるというのだね。うん、うん。面白いことじゃないか、コビテ君。キミは今まで私という奇跡を目の前にしていながら、神様は信じないというのだから。うん、うん。これは面白いことですよ」

コビテ刑事は話が怪しい方向へ進んでいることに危機感を覚えた。

「署長。その奇跡というのは、いったいどういうことなんですか」

「私はねえ、自分の力だけで今の地位を築いたとは思ってないですよ。うん、うん。私が毎日セミ神様にお参りをし、それから七年に一度のお供え物を欠かさなかったから、これだけの生活が出来るようになったんだよ。うん、うん。そういつて署長は高そうな家具ばかりの広い書斎を見回した。

「署長。まさかそれは。そのお供え物というのはミイラになったあの死体ですか」

これまでの経過からコビテ刑事は署長がしていることがなんとなく解つてきた。コビテ刑事のおでこに脂汗が吹き出している。

「彼女たちを殺したのは署長なんですか!？」

「うん、うん。キミは私を殺人鬼扱いするのかね。それはひどいですよコビテ君。私は若い女性と山の中へドライブに行くだけなんです。それからあとはセミ神様のなさることですよ。うん、うん。ですからあれは殺人でも何でもない事故なんだよ。コビテ君」

コビテ刑事はこの恐ろしい話を信じたくはなかった。もし本当なら自分は殺人に手を貸したことと変わらない。もしかして、署長は自分をからかっているのではないかと思つた。しかし、署長は冗談なんかを言う人間ではない。署長は真

実を語っている。そして何か訳の解らないセミ神様とかいう神様のために七年に一度、人を殺しているのだ。

「署長。でもどうしてあなたの成功がセミ神様のおかげだと言えるんですか？ 実際にセミ神様が現れて何かをしてくれたとでも？」

「キミが言うのはおとぎ話に出てくる奇跡だね。うん、うん。しかしね、実際の奇跡は目に見えないんだよ、コビテ君。でもねえ、私には解つたのだよ。全てのことが可能になるような、そんな力が自分の中にわいてくるのが。キミにもいつか解るよ。コビテ君。キミは私の後継者になつてセミ神様に生け贄を捧げることになるだろう。そうなればキミにもセミ神様の力がどんなものか解るはずだよ。うん、うん」

コビテ刑事の額にたまつた脂汗が頬をつたつてあごまで流れてきた。

「ボクに殺人をしろと言うんですか？」

「うん、うん。キミは飲み込みが悪いねえ。コビテ君。殺人ではないと言っているだろう。キミにだつて簡単に出来ることだよ。これまでの計画もキミのおかげで上手くいきそうなんだからねえ」

「そうですか。それじゃあ、セラビさんをはめたのは、そのうちあなたのことか？ 彼に知れることを恐れたからですね」

「うん、うん。コビテ君解つてきたじゃないか。うん、うん」

「それじゃあ、エフ・ビー・エルは。どうして彼らと呼んだんですか？ 彼らと呼ばれば逆にあなたが不利になる」

「うん、うん。そんなことは解っているよ。コビテ君。でもねえ、この先もミイラ死体が発見されることになるんだから、黙つても彼らはやつて来るはずだね。だからその前に呼んで彼らを潰してしまふ必要があつたんですよ。彼らがやつて来て見当違いのところを捜査しているうちに、彼らの一番近くにいた人間が被害者になる。そうなればエフ・ビー・エルの信用は丸潰れですよ。うん、うん。私が少し圧力をかければペケファイルなどは閉鎖されざるを得なくなるでしょうねえ。うん、うん」

「署長。まさか宿屋の娘さんを……」

「これも、まあ仕方ないことだよ。うん、うん。ときにコビテ君。きみ随分暑そうじゃないか。そんなに汗をかいて。ちよつと服を脱ぎたまえ」

署長に言われたコビテ刑事はスーツの上着を脱いだ。

「コビテ君。そうじゃないよ。私は全部脱げと言っているんだよ。うん、うん」

どうやら署長の半分女の血が騒ぎだしたようだ。

「何ですか？」

とは言ってみたが、署長の目を見て彼が何を言おうとしているのかが解った。コビテ刑事は自分が今深い井戸の底へ落とされてしまったことを悟った。

これまでコビテ刑事は自分が大きな海で荒波にもまれながらも、署長の手引きで何とか安全な岸までたどり着くことが出来ると信じていた。しかし、現実はそのではなかったのだ。彼は署長に目をつけられた時からずっと暗い穴の中を落ち続け、今やつと深い井戸の底にたどり着いたのである。

署長はゆつくりとコビテ刑事の方へ近づいてくる。

「私はこれだけのことをきみに話したんだ。うん、うん。ただですむとは思ってはいまい。うん、うん。さあ、黙って服を脱いだらどうなんだ。キミだってもう大人なんだから、解っているだろう？」

署長はコビテ刑事を壁際まで追いつめると彼の両腕をつかんだ。署長の脂ぎった顔がコビテ刑事の目の前に迫ってくる。コビテ刑事は「警官になつて悪いヤツを捕まえる」という幼い頃の夢を思い出して涙を流していた。コビテ刑事は今、悪いヤツを目の前にしながらその悪いヤツの好きなようにもてあそばれようとしているのだ。

「うわあー」

コビテ刑事は悲鳴のような嗚咽のような声をあげて、署長の手を払いのけた。そして大急ぎでドアのところまで走っていくと一度署長の方を振り返った。

「署長。あなたは間違っています。いいですか。あなたがこれ以上間違いを犯さないよう、あなたのしたことは全てあの二人に話します。署長。ボクはあなたと違って正義とは無縁ではないんですよ」

署長はコビテがバタバタと玄関まで走っていき外に出ていく音を聞いていた。

「なかなか見込みのある男だと思つたのにねえ。命を粗末にしちゃいけませんよ。うん、うん」

署長は静かに電話の受話器を持ち上げどこかへ電話をかけた。コビテ刑事の落ちた深い井戸の底からでは、叫んでみても誰にも気付かれないだろう。気の毒なコビテ刑事。

(優秀な) 女スパイ

下田歌劇団が共同生活しているアパートの玄関前で宿屋の若女将アイがうろろうろして中の様子をうかがっている。彼女はなぜこんなところにいるのだろう。それに彼女は真つ赤な口紅を塗り、黒いセクシードレス(女スパイ用)を着ている。――セクシードレスって何だ? って感じですが、まあいいでしょう。セクシーなドレスです。――

まだ幼さの残る彼女にはそういった恰好はまったく似合っていない。それでも彼女は今、優秀な女スパイになった気分なので、本人はそんなことはまったく気にしていない。この優秀な女スパイは今朝、掃除をするふりをしてモオルダアの泊まっている部屋に忍び込み、机の上にモオルダアの書いたメモを見つけたのである。そこには「容疑者は下田歌劇団だ!」とはつきりと書かれてあったのだ。それを見て彼女はここまでやって来た。それにしてもこの、おてんば若女将にしてブリッコ女子高生でもあるアイは変わっている。他の女子高生達と違って彼女にとっての「ひと夏のあぶない経験」はこの女スパイごっこなのである。

アイは鍵穴から中を覗いてみた。中には短い廊下が見え廊下に面したドアは全て閉まっている。今この中に入ってもすぐには部屋にいる団員達には見つからないようだ。アイは思い切ってドアノブを回してみた。ドアには鍵がかかっている。彼女がドアを開けると静かに玄関の中へ入った。廊下の突き当たりの部屋からは団員達の話す声が聞こえてくる。この廊下からはそのほかに二つの部屋へ入ることが出来そうだ。

優秀な女スパイが何から始めようか考えていると、奥の部屋からこの廊下へ向かって近づいてくる足音が聞こえてきた。アイは慌てて一番近くにあった部屋のドアを開け、中にはいると音がしないように注意しながら素早くドアを閉めた。奥の部屋から出てきた団員は廊下の反対側にある便所へ入っていったようだった。アイはドアノブを握ったままホッと胸をなで下ろすと、部屋の中の方へ振り返った。そこで彼女は思わずアッと小さな声をあげてしまった。

部屋の中には別の団員がいたのである。その団員は突然現れた侵入者を凝視しながら、わなわなと震えている。アイもかなり動揺していたが、彼女は優秀な女スパイ。こんなことでたじろいではいけけないのだ。ここは彼女のセクシードレス(女スパイ用)が威力を發揮する場面である。

「あら、旦那。そんなに驚いた顔してどうしたの?」  
優秀な女スパイが妙な口振りで話し始めた。

「ああ、そうねえ。あなた達はとつてもいけないことをしているんですからねえ。でもあたしもいけないことは大好きなのよ。うふふふ」

色仕掛けのつもりらしいが、アイはこの歌劇団が半分女の歌劇団だということは知っているのだろうか。アイは上目遣いで団員を見つめながら彼に近づいていった。

「ねえ、あなたがどんないけないことしてるか教えてくれたら、あたしがもつとあなたにいけないことしてあげる。うふふふ。うふふふ」

団員は怯えた様子で後ずさっていく。これはアイの未熟な色仕掛けのためではない。ここにいた団員とは、あの女アレルギーの団員なのである。アイが近づいて来るにつれてこの団員は呼吸すら上手くできない状態になって、助けを呼ぼうにも上手く声が出せなかった。しかしこのままではこの女が彼の体に触れるのも時間の問題。そうなったら彼は生きていられるかどうか解らない。彼は最後の力を振り絞ってギャーッと叫び声をあげた。

この叫び声を聞いて奥の部屋から他の団員達がぞろぞろと部屋に入ってきた。アイは不覚にも団員達に囲まれてしまった。優秀な女スパイ、危うし!?

## 9

### セラビの部屋

セラビはエフ・ビー・エルの二人を部屋の中に招き入れた。部屋の中には書類や新聞などが散乱していた。

「すまんねえ。散らかってて。私もねえ、どうにも事件のことが諦めきれなくて。これは全部私が密かに集めていた事件の資料だよ。でも重要なものは全部警察にあるから、これが役に立つかどうかはわからないけどね」

スケアリーはこの部屋の散らかりように驚いていたが、モオルダアは何とも思わなかった。モオルダアの部屋に比べたらどんな部屋も綺麗に見える。

「それでエフ・ビー・エルさん達は私に何を聞きたいんだね」

モオルダアには聞きたいことがたくさんあったのだが何から聞いていいか解らなかった。でもとりあえず何かを言ってみることにした。

「ボクらが調べた結果、この前のグタグタ遺体事件の犯人は多分ヒトオ少年で間違いなくて、下田歌劇団の団員の一人は宇宙人で、警察署長はかなり怪しくて、それに怪しい神様を信じていて、コビテ刑事はなぜか捜査の邪魔をしているような気がするんです」

「モオルダア。それじゃあ何を言っているのか解りませんかよ」  
スケアリーがモオルダアを遮った。

「あたくしがまず知りたいのは、ミイラ事件の遺体の状態ですよ。エフ・ビー・エルの資料にはなぜか詳細なことは書かれていませんでしたのよ。あのミイラはどんな状態でしたの？」

「うーん、どうだったかなあ。そういう資料は警察のほうにあるし、きつと今頃はシュレツダーにかけられているだろうな。キミ達の言うとおり誰かが捜査を邪魔しているのかもしれない。私の記憶では、ミイラ遺体に外傷はなかったぞ。このあいだの事件みたいに内臓を取り出すために包丁で遺体を切り刻むことなどはなかったようだ」

モオルダアはグタグタ遺体を思い出して気分が悪くなったが、なるべくあの遺体のことは思い出さないようにした。

「それじゃあ、どうやって内臓を取り出したんだろう？」

「理論的には簡単ですわ。わざわざ穴を開けなくても人間の体にはあらかじめ開いている穴がありますから」

「すると、こういうことかな。口やケツの、ああ失礼、お嬢さん。口や他の穴から内臓を抜きだしたということかな？」  
セラビは興味深そうに言った。モオルダアはせっかくなか頭の中からグタグタ遺体の様子を消し去ることに成功していたのだが、この話で口から内臓が取り出されるどころ想像してさらに気分が悪くなった。モオルダアはなるべく別の光景を思い浮かべたかった。

「それは可能だとしても、実際にやるには大がかりな装置が必要になるんじゃないのか？ ボクの考えではこうだよ。犯人の目から不思議な光線が出てきて、その光に包まれた被害者は一瞬にしてミイラと化してしまうんだ」

セラビはモオルダアの意見を聞いてゲラゲラ笑っている。モオルダアは冗談で言ったわけではないのだが。スケアリーはいつものようにモオルダアを睨んでいたが、半分は彼の意見を認めざるを得なかった。

「確かにそうかも知れませんか。内臓だけならともかく、体中の血まで抜き取るにはきつと何かの機械が必要になりますわ。それに、最初のミイラ事件は三十五年も前ですし、それよりもさらに七年前にも事件が起きていたとしたら当時の技術では無理かも知れませんか。少なくとも誰にも気付かれないようにそんなことをするのは」

「やっぱり、そうだよ。あれは恐怖のミイラ化光線でミイラになったんだよ」

モオルダアが変なことを言うので話が進まなくなってくる。

「ミイラのことは後回しにして他のことにしないか？」

セラビが提案した。

「それじゃあ下田歌劇団・宇宙人説はどうだろうか？ ボクの考えではあの女アレルギーが宇宙人だと思っただけよ」

「モオルダア。そんな話は家に帰ってから人形相手にでもしていればいいのよ。他にも聞くべきことはたくさんありますのよ」

「そうだな。お嬢さんの言うとおり、私も宇宙人には反対だ。ところでヒトオ少年はどうなったんだ？ まだ署長の家にいるという話だけよ」

セラビがスケアリーの側についてしまったので宇宙人の話は出来なくなった。

「ヒトオ少年はいまだにおかしくなつたままですよ。署長はすっかり良くなつたなんて言つてたけど。あれは絶対に嘘だ。自分でやつた人殺しのショックで……。あつそうだ！」

モオルダアは急に何かを思い出して話をやめた。

「どういたしましたの、モオルダア」

「スケアリー。キミは女アレルギーなんてものは存在しなくて、あれは精神的なものだと言つていたよね。考えてみればそうだよ。人間はみんな母親の体から生まれてくるんだから。女アレルギーなんてものはあるはずはない」

「そうですね。それがどうかいたしましたの？」

「女アレルギーが精神的な問題が原因で起こるとしたら、原因は何だろうか？ 女性からひどい目に遭わされたとか、幼児期の虐待とか？ でもそれだけじゃ死ぬほどの発作を起こす女アレルギーなんかになるかなあ？」

「それは人によると思いますけども」

「この前、ヒトオ少年の様子を警察署まで見に行った時に、キミは外傷後何とかがつてことをいつてたよね？」

「外傷後ストレス障害のことですか？」

「そう、それ。そういうのつて外傷の原因となつたものと、その後の障害を引き起こすものの対象が別のことがあるんだ。たとえば自分が死ぬほどの怖い思いをした時に近くにクマの人形があつたりしたら、頭の中で怖い思いとクマの人形の記憶がちや混ぜになって、クマの人形に対して異常な恐怖心を抱いてしまうんだろ？」

「だいたい合っていますけど。それがどうしたというんですの？」

「もしかして、女アレルギーの団員は女性からひどい目に遭わされたんじゃないかって、女性が目の前でミイラになっていくところを目撃してしまったんじゃないかなあ」

セラビはモオルダアの思いつきの推理を聞いて感心していた。

「なかなか面白い考えだねえ。でもあの女アレルギーがその現場を目撃したというのにはどういう根拠があるんだね？」

「それは解りません。でもミイラ事件が発生した時に彼らがこの付近に公演のためにやって来たということは事実ですから、でもそんなことを言ったら昔からこの付近に住んでいる人は全員怪しくなってしまうね」

「なんだよそれ、ずつこけちゃうねえ」

セラビさんがそんなことを言うと言わずこけちゃいそうです。

「でも調べてみる価値はありそうだね。私は三十年以上捜査をしてきたが、そんなことは一度も考えなかったよ。もしかするとキミ達はホントに優秀な捜査官なのかも知れないな」

「もしかするとじゃなくって、実際に優秀なんですよ。失礼なことはおつしやらないでくださいな」

スケアリーがモオルダアのようなことを言っている。でもまあ気にしないことにしよう。

「まあ、女アレルギーは後で調べるとして、キミ達の言っていた署長と怪しい神様とかいうのは、何なんだ？ 私はそれが一番気になっていたんだが」

「ああ、そうでした。ボクらも第一にそのことを話したかったですけど、何しろこう話が入り組んでいると、もう何がなにやら解らなくなってきました。とにかく、結論から言うと、今のところミイラ事件の容疑者は署長以外に考えられません」

モオルダアがこう言うとセラビの表情は少し曇った。

「そうなのか。私も時々あの署長におかしなところがあるとは思っていたんだけどねえ。もし署長に変な疑いをかけて捜査なんかして、後から潔白であると解れば私は警察を追い出されることになる。だから私はあえて署長は疑わずに来たんだが。でも、まあ結局警察はクビになったがね」

セラビは自分の弱さを恥じているようだった。モオルダアは何か声をかけてセラビを元気づけるべきかとも思ったが、死体を怖がる捜査官に何を言われてもセラビの気分が悪くなるだけである。このことには触れずに話を進めた。

「でも、署長を逮捕出来るだけの証拠は何もありません。さすがは警察署長ですよ。それに、ボクらが知っている犯行の動機も、あまりに幼稚すぎる。なにせ富と権力のために若い女を生け贄としてセミ神様に捧げるというんですから。

こんな動機じゃ逮捕状なんかでるわけありませんから、こうなったら現行犯で捕まえるしかないですかねえ。場所は多分セラビさんが見つけた山の上の社だと思っただけです」

「ああ、そういえば、その社を見つけた時に写真を撮っておいたんだ。最近では便利だねえ。一日で現像が出来るなんて」

セラビは散らかっている資料の山をかき分けて写真を探し出すとエフ・ビー・エルの二人に見せた。

その写真を見てモオルダアはにんまりした。写真に写っている社はモオルダアが署長の家で見つけた神棚の箱宮にそっくりだったのである。実際の社は神棚の箱宮ほど豪華ではなく、しかも長い間、補修も何もされていなかったように壁のいたるところに穴が開いていた。しかし、神棚とその社が同じ神様を祭っていることはすぐに解った。社の塗装は剥げていたが、所々に朱色の部分が残っている。この社が完成した時には全体が朱色に塗られていたであろう。そして、何よりも特徴的なのは、社の扉に付けられた三日月型の紋章である。署長の家の神棚に飾られていたものと同じ形だ。

「セラビさん。この三日月マークですけど、この辺じゃこういうのは良くあるんですか？」

モオルダアがセラビに写真を見せながら言った。

「さあ、私が見たことがないが」

「ボクは署長の家でこれと同じ三日月マークを見ましたよ」

「まあ。つまりこのお社はセミ神様を祭っているお社だというのね」

「署長がこの場所に次の生け贄を捧げに来る可能性は高いよ。問題はそれがいつなのかということだけだ」

モオルダアはこの社のある場所を張り込んで犯人がやって来るのを待つべきだと思ったが、いつ来るか解らない犯人を待つなんて、なんだか面倒な気もした。

「私なら今すぐにそこへ行って張り込みを始めるがねえ」

モオルダアが動き出さないのでセラビが彼を急かしている。

「スケアラー。キミちよつと山まで行って・・・」

「イヤです！ 山で張り込みなんてしたら蚊に刺されますわ。あたくしは女アレルギーの団員について調べて差し上げますから、あなたが山にいらつしやればいいのよ」

「でも、キミは女だからアレルギーの団員には近づけないだろう」

「心配はいらないよ。私がお嬢さんについていくから」

やっばりモオルダアは山に行かなければいけないようだ。

10

続・（優秀な）女スパイ

下田歌劇団員の住むアパートに侵入したもののあつさり見つかつてしまった自称優秀な女スパイのアイ。半分女の団員達を取り囲まれてしまった彼女はどうかやってこの状況を脱するかを考えていた。ここが優秀な女スパイの腕の見せ所。アイは自分の知っているスパイ映画や小説で優秀な女スパイがどうかやってこういつた危機を切り抜けていたのかを思い出そうとしていた。しかしそれよりも前に一人の団員があることに気付いたようだ。

「あらいやだ。あなたは宿屋のヒトミさんの娘のアイさんじゃない？」

これを聞いて他の団員達はおかしくなるがアイの顔を覗き込んだ。

「あら、ホントねえ。あなたいつたい何やつてるのよ。遊びにくるんなら連絡してくればいいのに。あなた、この部屋は女人禁制よ。早く向こうの部屋に行かないとあなた殺人罪ですよ。うふふふ。それにしても、あなた随分大きくなって。ヒトミさんの若い頃そっくり」

アイは団員達の言葉をきよんと聞いていた。彼女は知らなかったが、彼らは宿屋親子のことは良く知っているらしい。アイは団員達に捕まって椅子に縛り付けられたりすると思っていたのに、期待はずれの感じがしていた。これでは全然女スパイらしくない。彼らは女アレルギーの団員をその部屋に残して、別の部屋へと移った。

アイは出された麦茶を飲みながら団員達にここへ忍び込んだ訳を説明した。団員達は興味深そうに彼女の話を聞いていたが、彼女の口からモオルダアの名前が出ると彼らは大笑いした。アイは半分女のおじさん達に叱られると思っていたが、彼らも久々の来客が嬉しいらしく、みなにこやかであった。ただし、アイの服装やケバい化粧は似合わないからやめろと言っていた。両親や教師のような人からそんなことを注意されても絶対に聞かないものだが、こういう半分女に言われると妙に納得する。アイもそれには黙って頷いていた。

団員達は素直なアイを気に入ったようで、この後もかなり長い間彼女と話を続けた。彼らの話を聞くと、どうやらこの下田歌劇団の団員達と宿屋の女将ヒトミはかなり親交があったらしい。それは女アレルギーの団員がヒトミに叶わぬ

思いを抱いているためだけではなかった。一番年下の団員はヒトミと同年であるようで、高校までずっと同じ学校に通っていたらしい。ヒトミがその団員に惚れていたという話になった時には部屋の中はかなり盛り上がった。何も知らぬヒトミに自分が半分女だと言うことを説明するのにはかなり手間取ったと言うことだ。

この後も彼らは巡業先での出来事などをアイに聞かせてた。アイも興味を持つたらしく楽しそうに聞いている。部屋の外では女アレルギーの団員が彼らの話に耳を傾けていた。この女スパイの不意の訪問を一番喜んだのはこの団員だったかも知れない。彼は昔のヒトミそっくりのアイを見て胸をときめかせていた。でも始めは彼女の侵入で死ぬほどの思いをしたのだが。彼は時々そつと部屋の扉を開けてアイの顔を見つめていた。彼女の顔を見ていて、女アレルギーの団員はまた愛の詩を思いついた。

美しい

親子二代で

美しい

また変な詩ですが、彼のつもりにもつた感情が現れている？ いない？ まあ、どうでもいいか。

彼らの話が終わった頃にはもう辺りはすっかり暗くなっていた。アイはまた遊びに来ると彼らに約束をしてアパートを出ることにした。彼女が玄関を出る時、女アレルギーの団員は彼の部屋に避難して道路に面したその部屋の窓からからアイを見送った。彼女が玄関を出てからも女アレルギーの団員の視線はしばらく彼女の後をおつていた。彼女が玄関を出てしばらく歩くと彼女のそばに一台の車が止まった。

アイのすぐ近くでその車は停車した。アイが何事かと思つて車の運転席を見ると中には警察署長がいてニコニコしながら窓を開けた。

「あつ、警察署長さん」

自称優秀な女スパイのアイはこの警察署長の顔も知っていた。というよりも、彼女の家が旅館ということもあつてちょっとした盗難などの事件があつた時には警察の世話になるので、彼女もこの署長には何度か合つたことはあるのである。

「ああ、良かった良かった。うん、うん。キミのお母様がねえ、きみが帰つてこないと心配してねえ。私に連絡してきたから、探していたんだよ。うん、うん。家まで送つてあげるから乗りなさい。うん、うん」

アイはこの時間に家にいないことはしよつちゅうあるので、どうして今日に限つて母親が心配するのか疑問に思ったが、

ここから家までの距離を考えると車で送ってもらえるのはありがたかった。アイは署長に言われるまま車に乗り込んだ。女アレルギーの団員は部屋の中からずっとこの光景を見ていたが、アイが署長の車に乗るのを見て、急に顔色を変えた。

「おい大変だ！ アイさんが誘拐されたぞ！」

この団員は普段、男の喋り方をするようだ。そんなことはどうでもいいのだが。この団員の言葉を他の団員達は良く理解できなかった。しかし、女アレルギーの団員はそんなことも気にせず部屋を飛び出し、外に止めてあった原付のバイクにまたがると車の後を追いかけた。

他の団員達が訳も解らないままアパートの外に出て遠ざかっていくバイクを眺めていると、そこへスケアリーとセラビが到着した。スケアリーとセラビが団員達から状況の説明を聞くと彼らは妙な胸騒ぎを覚えた。

「お嬢さん。もしかして誘拐というのは署長の仕業かな？」

スケアリーはお嬢さんと言われて喜んでいる暇はなかった。

「もしそうだとしたら、行く場所はやっぱりあのお社かしら」

二人は再び車に乗り込むと山の中の社へ向かった。彼らの車を団員達の乗ったワンボックスが追いかけてくる。どうしてだか解らないが、多分オモシロ半分だろう。車の中では団員達が妙に盛り上がっていた。

## 11

### 上り坂

山の上の社へ続く道路をモオルダアがとぼとぼと歩いてきた。彼は山の上までスケアリーに送ってもらう予定だったのだが、車中で例のボイスレコーダを取り出してくだらないことを録音し始めたので業を煮やしたスケアリーに車を追い出されたのである。一緒に乗っていたセラビは何とかスケアリーを説得しようとしたのだが、彼女のもの凄い剣幕には太刀打ちできなかったようだ。

山の上まではまだかなり距離があった。モオルダアが息を切らせながら坂道を歩いていると彼の携帯電話が鳴った。「もしもし。モオルダアさん」

それはコビテ刑事だった。

「モオルダアさん。ボクは重大な間違いを犯していたようです」

「そりやそうだよ。ボクらの捜査を邪魔するなんて、それは重大な間違いに違いないよ」

モオルダアはコビテ刑事の言うことには耳をかきないつもりだよだ。

「モオルダアさんに大事な話があるんです。電話では言えませんが、これからボクと合ってくださいませんか」

「コビテ刑事。あなたの話を聞いてもややこしくなるだけです」

かわいそうなオオカミ少年のコビテ刑事。何を言っても信じてはもらえないようです。

「そんなことは言わずに。聞いてもらえないと、あなた方も大変なことになるんですよ。いいですか、あの署長は……きやーたすけてー……」

コビテ刑事が叫んだ後、ガリガリという耳障りなノイズが電話機から聞こえた。しばらくすると電話が切れた。

「またこれだ。まったくあの刑事は何を考えてるんだか」

モオルダアが一人でつぶやいていた。彼が何を考えていたのか、もう知ることは出来ない。このときコビテ刑事は大型トラックにひかれて即死だったのですから。ひいたトラックは現場から姿をくらまして、以後の捜査でもこのひき逃げ犯は捕まらなかった。署長が何者かに命令してコビテ刑事を殺害したのだろうか。まったく恐ろしい話です。

コビテ刑事のこの勇氣ある行動も死んでしまっただけは何の役にも立たなかったのである。しかし、もしモオルダアが彼の話を知ったとしても、この時すでに署長は若女将アイを連れ去るための行動を開始していたので、それが意味のある行為だったかどうかは解らない。

モオルダアは首をかしげながら携帯電話をしまつて、また坂道を歩き始めた。辺りはだんだん薄暗くなっていた。モオルダアが何気なく空を見上げると薄明かりの中に存在感のない月が見えた。まだ辺りが明るい中でかすかに輝く月を見ると普通の人には存在感が無いように見えるのである。しかし、モオルダアはその月を見てなぜか気になる場所があった。モオルダアが一度立ち止まってその色の薄い月を眺めて開けると、その月は署長の家の神棚にあった三日月型の神具とちょうど同じ形であることに気がついた。

「あつ、今夜だ！」

モオルダアは慌てて坂道を上り始めた。月を見て彼の少女的第六感はずいぶん神様に生け贄を捧げる日が今夜であると彼に教えたのである。モオルダアは必死になつて坂を登っていたが社にたどり着くにはかなり時間がかかりそうである。

現在の暦というのが太陽の動きを元にして作られているというのは良く知られていることである。つまりそれは月の満ち欠けとはほとんど関連性がないものである。これまでのミイラ事件の発生日が現在の暦の上で一致していなかったのはそのためのものであった。モオルダアのように運と直感だけで捜査をしていると、そういったところにはなかなか気が付かないようである。しかし、運はまだ彼に味方をしていいる。モオルダアは駆け足で坂を登っていた。社がある場所までもう少しというところに来た時にはもう、辺りは真つ暗になっていた。モオルダアの横を一台の車が猛スピードで通りすぎていった。それはまさしく署長とアイを乗せた車だったのだが、お互いにとりなりを通り過ぎていったのが誰であったのかは確認できなかった。

## 12

### 車中

下田歌劇団のアパートで楽しい会話の後で署長の車で家まで送ってもらえると思つて喜んでいた若女将アイであったが、車が家とは違う方向に進んでいると気付いて、彼女は急に不安に駆られた。

「あの、署長さん。私の家へ行くにはさっきの信号を曲がらないといけないんですけど」

「うん、うん。大丈夫だよ。この道を行つた方が近道なんだよ。心配しないでいいからねえ。うん、うん」

署長は嘘を言っている。アイには解つていた。彼女の家に行く道は一つしかないのだ。他のどの道を通つても近道などあるはずがない。署長がニヤニヤしながら運転しているのを見て、アイはゾクツクとして鳥肌を立てた。この人は私に何か恐ろしいことをしようとしているに違いない。

車は赤信号で一度停止した。周りには何台かの車が止まっている。逃げるなら今しかない。アイはそう考えてロックをはずすとドアを開けようとした。しかし、それよりも先にガンという音がして、再びドアにロックがかけられた。運転席では署長がニヤニヤしながらアイの方を見ている。

「いけませんよ。運転中はドアを開けたらあぶないですよ。うん、うん」

署長はアイが逃げだそうとしていたことを解つていたようだった。アイは窓を力一杯叩いて隣に止まっていた車に助けを求めようとした。しかし、署長の車の窓ガラスはそんなことではびくともせず、必死にガラスを叩いても、ほとんど

音は外に聞こえない。隣の車を運転していた男はアイが何かしていることには気付いたが、それが助けを求めているのだということは解らなかつたようだ。アイがふぎけて彼に手を振っていると思つたのか、彼もアイの方に手を振つてその後は関わりたくないといった感じで、前を見たままだつた。信号が青に変わると署長は凄いい勢いで車を発進させた。「署長さん。近道なんていいから、早くうちに帰して」

アイは泣きそうな声で言つた。何も言わずにニヤニヤしながら運転を続ける署長を見てアイは、この人は自分を殺そうとしていると感じていた。彼女の知つている映画に出てくる殺人鬼というのはこんな感じなのだ。何とかしなければいけないと思ひながらも怖くて何も出来ない。アイは自分を優秀な女スパイだと思つていたが、こういうリアルな恐怖に直面すると何も出来なくなつてしまふ。どこかにこういう優秀な捜査官というのがいたような気がするけど、まあいいか。今はそれどころではない。

アイが恐怖のために何も出来ずにいると車はほとんど人気のない山の中へ入つてきた。彼女は周囲の状況を見て、このままではきつと殺されてしまふに違ひないと思つた。アイは勇気を振り絞つて行動に出た。それは彼女の理想とする優秀な女スパイの行動とはかけ離れていたが、彼女にはそれしかできなかった。

アイはハンドルを握る署長の腕に思い切り噛み付いた。署長の腕にはが食い込み、血と汗が混ざつた気持ちの悪い味がした。キャアアという署長の悲鳴と共に車が大きく車線をはみ出し、もう少しのところまでガードレールにぶつかりそうになつた。署長は何とか車を元の車線に戻すと、腕を振り回してアイを突き飛ばした。

「あなた、死にたくなかつたらおとなしくしていなさい！」

これはアイではなく、署長の言葉である。署長はせつぱ詰まると半分女の本性を現して女みたいな喋り方をしようだ。署長はポケットから拳銃を取り出してアイに突きつけた。アイも銃を向けられては何も出来ない。署長はこの状態のままさらにスピードを上げて山の上の社を目指した。

この緊迫した雰囲気の中で車は坂を登るモオルダアを追い越したので、車の中からは彼の存在には気付かなかつた。しばらくして車は社の前に到着した。

モオルダアが社の近くまで来ると、さつき彼を追い越していった車が、道路をふさぐようにして止めてあった。中には誰も乗っていない。モオルダアが車の脇を通り抜ける時にボンネットからムツとする熱気が感じられた。車は相当なスピードでここまでやって来たようだ。

モオルダアが社の近くまで来ると、その前に人影が見えた。彼はモデルガンを取り出してその社の前の人物にそつと近づいていった。そこにいたのは署長で、彼は社に向かって手を合わせて拝んでいる様子だった。

「署長、やっぱりあなたでしたね。生け贄はどこにやったんですか」

署長は背後から突然声をかけられて、ビクツとして振り返った。見るとモオルダアがモデルガンを彼に向けて立っている。

「おやおや、モオルダアさん。びつくりさせないでください。うん、うん。あなたはこんなところで、何をしていますか？ あの歌劇団は捕まえたんですか？」

「捕まえるのは歌劇団ではなくて、あなたです」

署長はこう言われてもニヤニヤ笑っている。

「うん、うん。いったい私は何をしたと言うんですか？」

「もう、あなたのこと解っていることは解っているんです。生け贄はどこに隠したんですか」

「何のことだか解りませんが、あなたがこんなところでモタモタしていると、今頃はセミ神様があなたの大事な人を捕まえているかも知れませんねえ。うん、うん」

「大事な人？ あつ、署長。もしかしてあなたは『お宝ビキニ』を生け贄としてここにつれてきたんですか？」

署長は首をかしげて「お宝ビキニ」というのが何なのか考えていたが、そんなことは解るはずがない。

「さつき、ここに宿屋のアイさんがいたんですけれどねえ。どこかへ行つてしまいましたよ。うふふふ」

モオルダアは辺りを見回した。これまでもここがミイラ遺体の発見現場になったことはなかった。きつとここまで署長がやってきて生け贄を放すと逃げ出した生け贄が山の斜面を降りていく。元来た道は車が邪魔になつて通れないから、生け贄は山の斜面を降りていくのだろう。その途中で誰かが待ち伏せていて生け贄をミイラにするに違いない。

「そうか、共犯者がいたのか」

「そんなものはいませんよ。モオルダアさん。全てはセミ神様のなさること」

モオルダアは署長の言うことなどほとんど聞いていなかった。早くアイを見つけないと、ミイラにされてしまう。モオルダアは降りていけそうな斜面を探してその方向へ向かおうとしたが、署長がモオルダアの前に立ちはだかつて彼に銃を突きつけた。

「モオルダアさん、いけませんよ。うん、うん。どうやらあなたを生かしておくのは危険なようだ」

「署長さん。そんなことをしたら、さすがのあなただって捕まりますよ」

「うん、うん。そう思うかね？ でも私は警察署長ですよ。あなたを消すぐらいは簡単ですよ。うん、うん。第一あなたはモデルガンで私を脅している。そんな精巧に作られたモデルガンを突きつけられたら、私が本物と間違えてもおかしくありませんねえ。うん、うん。もし私があなたを撃つても正当防衛ですねえ。うん、うん」

モオルダアのもつという銃がモデルガンであることは始めからばれていたようだ。モオルダアは恥ずかしそうにそれをしまった。署長はモオルダアに銃を向けたまま続ける。

「ああ、そうそう。こういうのはどうです？ あなたを撃つたのがセラビということにするんです。実はミイラ殺人の犯人はセラビで犯行の邪魔をするあなたを殺したというのは。うん、うん。なかなかドラマティックじゃありませんか。うん、うん。それにあなたはきつと英雄になれますよ。うふふふ」

どうやら署長は本気でモオルダアを撃とうとしているようだ。モオルダアは怖くなって少しずつ後ずさっていく。どうしよう、どうしよう。モオルダアは何とかしたいと必死になって考えていたが、頭の中には「どうしよう」しか出てこない。もう終わりかと思っていると、誰かが署長の後ろにきつと現れて署長の背中に銃を突きつけた。

「署長さん。そろそろ年貢の取め時ですぜ」

それはセラビから連絡を受けてやって来た警官だった。グタグタ遺体事件で包丁を発見して、警察署では処分される寸前の捜査資料を盗み出した警官である。

署長は観念して銃を捨てた。

「あなた、警察の人間ね。こんなことをして、ただですむと思つたら大間違いですわよ」

署長は興奮して女の喋り方になった。

「とうとう、正体を現しやがったな」

警官はそういつて署長に手錠をかけた。モオルダアはこの「おいしすぎる」役どころの警官のことを眺めていたが、そんなことをしている場合ではないことを思い出した。この山の斜面の途中でアイが捕まっているのかも知れないのだ。「キミ、ここは任せたよ。ボクは生け贄を探してくる」

モオルダアがそういつてその場を離れようとしたが、やはりちよつと気になった。

「ねえ、キミ。キミはそんなにおいしい役なのに名前はないのか？」

「名のるほどのもんじゃございやせん」

まったく最後の最後までおいしい感じだ。それにしてもこの話では、重要な人物の多くの名前が明らかにされていませんが……。まあいいや。そんなことよりも早くしないと、アイさんが大変なことに。

## 14

### セミ神様

先程、社の前で車を降ろされたアイは署長が銃をしまうのを見て、一目散に駆けだした。署長は登ってきた道路の方に立っていたので、彼女は社を通り越して道になつていない森の斜面を下りていった。署長は黙つてその様子を見ていた。それは予定どおりだったからである。これまで署長がここに連れてきた生け贄はみなそのようにして森の斜面を下りていったのである。

アイはしばらく斜面を下りてから上の方を振り返つた。署長が追いかけて来ないということが解ると彼女は安心して少し速度を落として斜面を下つていった。しばらく行くと彼女は上の方からガサガサと草をかき分けて誰かが下りてくる音を聞いた。それは、慌てて斜面を下りてくるモオルダアが立てている音だったのだが、ここにモオルダアが来ているとは知らないアイは署長が追いかけてきたのだと思つてまた急いで先に進んだ。

モオルダアは先程から何度も転びながら斜面を下りていた。走つていけると言うより、転げ落ちてるといった感じだった。モオルダアは自分の下りている場所が果たして正解なのかどうか時々不安に感じた。社から中腹まで下りていくルートはいくつかあるということは彼も知つていたのだから。しかし、それを考えるよりも今は少女的第六感に頼るしかない。

夢中になって斜面を下りているモオルダアは少し先でかすかな悲鳴を聞いたような気がした。道になつていない斜面を下りていたモオルダアは、今までずつと足下を見ながら進んでいたが、この悲鳴を聞いて顔を上げた。その瞬間、足を踏み外して彼は斜面を滑り落ちていった。

モオルダアが滑り落ちて行った先には障害物もなく、彼はかなり長い距離を落ちた。体が止まったところは斜面が終わって平地になったところだった。モオルダアは軽い目眩を感じながら辺りを見回した。そこはモオルダアも良く知っている森の中の開けた場所だった。その場所の中心に彼は信じられない光景を見た。「もしかすると、自分は頭を打って気を失っているのかも知れない。これはきつと夢に違いない」モオルダアはこんなことを思っていたが、やつぱりこれは現実のようだ。

暗闇の中にアイともう一つの影が見える。もう一つの影は身長が二メートル以上もある巨大なものだった。その影が動くそれが人間ではないことが解った。何よりもまず、足が細すぎる。その細い足が何本もあつて大きな体を支えているようだった。顔には二つの目があることが解ったが、鼻と口はなく、代わりに細長いくちばしがついていた。体全体のシルエットは巨大なカマキリのように見える。しかし、腕は鎌にはなつておらず、人間のような手があった。

これがセミ神様なのだろうか。モオルダアはここに署長の共犯者の人間がいると思つていたので、予想に反して現れたこの化け物を唾然として見つめていた。「セミ神様のくせにカマキリみたいだ」モオルダアは驚きのあまり、意味のないことを考えていた。しかし、その怪物が腕をアイの方へ伸ばすのを見て我に返った。

「アイさん、逃げろ！」

モオルダアが叫んだが、アイはまったく反応しない。彼女は先程からこの怪物の前で催眠をかけられたように立っていた。目は開いていたが、それは遠くを見つめていたままである。

モオルダアはモデルガンを取りだして化け物目がけて弾を発射した。最新型高級モデルガンの弾は見事に化け物に命中したが、それで化け物を倒せる訳はない。しかし、それで一時的に怪物の注意を逸らすことは出来た。モデルガンで撃たれた怪物はモオルダアの方を冷たい目で睨んだ。モオルダアはそのあまりの恐ろしさに腰を抜かしてその場にへたり込んでしまった。

「逃げろ、逃げろ」

モオルダアが情けない声で叫んでいる。しかし、アイはまったく反応を示さない。怪物は再びアイの方へ手を伸ばして彼女の肩に手をかけた。「ああ、もうダメだ」モオルダアは怖くてほとんど泣きそうである。これから怪物の目からモ

オルダアが言っていたような「ミイラ化光線」が出てくるのだろうか。それとも何か別の方法でアイはミイラにされてしまうのだろうか。モオルダアは泣きながら見守るしかなかった。

化け物はアイの前でそのくちばしをゆつくりと持ち上げた。

「ああ、そうかあのくちばしで内蔵と血液を吸い取るんだな」

パニック状態のモオルダアは妙に感心している。早く助けないとアイはミイラにされてしまうのですが、モオルダアではもう無理なようだ。

化け物のくちばしがアイの目の前まで迫っていた。その時、森の中から一人の女が飛び出してきた。彼女はアイのところまで走って行き、アイを突き飛ばした。そして怪物のくちばしをつかむとそれを自分の口の中に入れた。

モオルダアが驚いてその女をよく見るとそれは女アレルギーの団員だった。彼は女装をしているのでモオルダアには女性に見えたのである。怪物は女アレルギーの口の中に入ったくちばしをさらに中に押し込んだ。すると、そこからグルグルと水洗トイレがつまった時のような音が聞こえてきた。女アレルギーの団員はしばらく痙攣していたがそのうち動きが止まった。彼の顔は見る見るうちに青ざめていき、よく見ると体中の水分が抜き取られて次第に彼の体が骨と皮だけになっていく様子がわかった。そして一分もしないうちに女アレルギーの団員はミイラになってしまった。これを見たモオルダアはたまらず悲鳴をあげた。

怪物が女アレルギーの団員から手を放すと、カラカラにひからびた団員の遺体が音もなく草むらに倒れた。怪物は向きを変えてモオルダアの方へ向かってきた。団員だけでは物足りないというのであろうか。怪物は何本もの細長い足をグニャグニャ動かしながら、モオルダアの前までやって来た。

「うわあ、ごめんなさい。ごめんなさい」

モオルダアはピンチになるとどうしても謝ってしまうようだ。

## 15

遅れて山の上の社へ到着したスケアリーとセラビは、例の警官から話を聞いて山の斜面を搜索していた。途中でモオルダアの悲鳴を聞いた二人は慌てて悲鳴のした方へやって来た。見るとそこではモオルダアが巨大な影に向かって必死に謝っていた。二人は始めモオルダアが何をしているのか解らなかったが、やがてその大きな影が得体の知れない怪物

だと言うことが解った。

「あれまあ、モオルダアが大変ですわ」

モオルダアはスケアリーとセラビがやって来たことに気付いた。

「スケアリー。早くこいつを撃つてくれ。ミイラにされちゃうよ」

スケアリーは言われるまま銃を取り出して怪物に狙いを定めた。それとほぼ同時に怪物の動きが一瞬止まったかと思うと、今度は苦しそうにもがき始めた。それを見たモオルダアは立ち上がって二三步後ろに下がって何が起こるのか見ていた。

もがき苦しむ怪物の腹の辺りからドロドロの液体が流れている。怪物はギイギイと苦しそうな悲鳴をあげていた。腹部から流れ出た液体は足の方に流れていった。それと同時に怪物の背が低くなつていくように見えた。液体が怪物の足を溶かしているのだった。足が全部溶けて怪物の体は地面にたまった液体に浮かんでいた。体の半分が液体によって溶かされてしまつても怪物はまだそこから逃げ出そうと、腕を足のように使つて体を持ち上げた。しかし地面についた手が液体に触れて溶け始め、やがて胴体の上の方と顔だけになつてしまった。怪物はしばらく苦しそうな声をあげていたが、その声も顔が泥沼に沈んでいくかのようにして溶かされてしまうと同時に聞こえなくなつた。

ここにいた三人はしばらく呆然として黙つていたが、やがてスケアリーが口を開いた。

「モオルダア。いったい何が起きたと言うんですの？」

「セミ神様。セミ女。食あたり・・・」

モオルダアは冷静に喋ろうとしているが、まだパニック状態のようだ。セラビはいまだに自分の見たものが信じられないといった感じだ。

「モオルダア。はつきりものを言いなさい」

上手く喋れないモオルダアにスケアリーがいらついたのか、少しきつい調子で言った。それで、モオルダアはやつと我に返つた。

「あつ、そうだ。アイさんが」

アイは女アレルギーの団員に突き飛ばされた時に気を失つていたようだったが、怪物が溶けてしばらくすると意識を取り戻した。アイは起きあがると、この森の中の空き地に三人の見慣れた人間の姿を発見した。アイはわあつと泣きながら三人の方へ走り寄つてきた。モオルダアは彼女が彼の胸に顔を埋めて泣くのだと思い両手を広げて彼女が走ってくる

のを待っていたが、彼女はモオルダアの横を通り過ぎてセラビの元へと走っていった。そこでモオルダアが想像したように、セラビの胸に顔を埋めてわんわん鳴いている。モオルダアは「どうしてだろう？」といった表情をスケアリーに見せた。

「あつ、そうそう、モオルダア。アイさんはねえ、エロ本読む人は嫌いなんですって」

モオルダアは何を言われているか解らなかったが、しばらく考えてから苦い表情になった。モオルダアは宿屋の自分の部屋に「お宝ビキニ」の雑誌をおきっぱなしにしていたのだ。しかも「お宝ビキニ」のページを開いたままで。それにちり紙も散乱していたつ。アイはモオルダアの部屋に忍び込んだ時にそれを見つけたに違いなかった。しかし、ちり紙は誤解である。

「ねえ、スケアリー。ちり紙についた液体が唾液であることを証明するのって、簡単だろ。帰ったらちよつとやつてくれないかなあ」

「そんなことは無駄ですわ。ちり紙に何がついていようと。あなたが変態であるという事実には変わりありませんから。アイさんも早くそれに気付いて幸せでしたわ」

始めはいい感じだったのに、今のアイはモオルダアに少しも興味を持っていないようだ。それもほとんどは誤解なのだが、彼が「お宝ビキニ」に夢中になっていたことはゆるぎない事実。モオルダアは何とも言えない後悔を味わっていた。

そこへ山の上の方からがやがや喋りながらこちらへ向かってくる集団があった。下田歌劇団の残りのメンバーがやって来たようだ。モオルダアは女アレルギーの団員がここでミイラになっているのを彼らに見られてはまずいと思った。

「みなさん。ここは事件現場です。関係者以外は立ち入り禁止です」

モオルダアが団員達に言った。

「何言ってるのよ。ここにあのコがいるんでしょ。道の途中でバイクを見たんだから。あのコがいるんならあたし達も関係者よ」

そういうとモオルダアの制止を簡単に振り切って団員達がこの空き地の中に入ってきた

彼らの一人が空き地の真ん中にミイラになった女アレルギーの団員を発見した。モオルダアはまずいと思った。きつと彼らはそれを見てぎやーぎやー騒ぎ出すに違いない。しかし、モオルダアの予想に反して団員達は静かだった。彼らはミイラになった死体を見つめながら静かに涙を流している。

「美しい話じゃないの。やつと愛する人に男らしいところを見せられたのね」

団員の一人がそう言った。モオルダアとスケアリーは女アレルギーの団員の切ない想いを知らなかったので、彼らが何を言っているのか良く解らなかった。

「ところで、モオルダア。ここで何があったのかまだ聞いていなかったわ」

スケアリーが聞いた。モオルダアはここへやって来てから起きたことを細かく説明した。もちろん足を滑らせて斜面を滑り落ちたことや、怪物を前にして腰を抜かしたことなどは内緒である。

「それで、どうしてあの怪物は急に溶けだしたんですの？」

「さあ、そこはボクにも良く解らないけどね。でも今まであの怪物は若い女性ばかりを食べていたんだ。中年のおじさんじゃ食あたりを起こすのも当たり前かも知れないよ。もしかすると、あの怪物は男アレルギーだったのかも知れないぜ。それなのに、あの団員は女装をしていたから気付かずに食べてしまったんだよ」

「なんだか良く解らない話ですわ。あの液体を調べてみれば何か解るかも知れませんか」

しかし、それは無理なことだった。事件から一時間も経つとその液体は完全に蒸発してしまい、警察がやって来る頃にはそこには何も残っていなかったのである。

「それにしても、あの女アレルギーの団員はどうしてここが解ったんでしょうか？」

とスケアリーが続けた。モオルダアも気になっていた。彼は怪物に襲われたのではなくて、自らあのくちばしを彼の口に入れたのである。

「やつぱり、彼は以前にミイラ事件の現場を目撃したのかも知れないなあ。それで、どうすれば生け贄を助けられるのかも無意識の中でちゃんと知っていたんだ。あつ。ということは今回はボクが目撃したんだから、今度はボクが女アレルギーってことになるのか？」

モオルダアの安易な考えにスケアリーはあきれている。

「あなたは大丈夫ですわ。ああいつた病気は繊細な心の持ち主がなるものですから。あなたのような鈍感な人は安心していて平気ですわよ」

モオルダアは納得したのかしていないのか良く解らないような感じで頷いていた。

エフ・ビー・エルの二人は車に乗って帰途についた。来る時と同様、渋滞に巻き込まれて、下田を離れるとすぐに車はほとんど動かなくなった。運転しているスケアリーはイライラしながら握ったハンドルを指先でこつこつ叩いている。「ちよいとモオルダア。あたくし達はもう少し現場に残って捜査のお手伝いをした方がいいんじゃないですか？ そうしないとまたあの事件は事故として片づけられることになりませうよ」

「その必要はないよ。キミがもう少し温泉に浸かっていたいのには解るけど。署長はもう捕まったから裏工作をすることも出来ないしねえ。それにあのセミ神様なんか知らない怪物ももういなかったことだし。ボクらの活躍で山には平和が訪れたってわけだよ。でもまあ、あの怪物については公表されることはないかも知れないねえ。なにしろ何も証拠が残っていないのだし」

モオルダアがこう言うとしばらく二人は黙ったままだった。日差しが照りつける中、二人を乗せた車はノロノロと動いたり止まったりを繰り返していた。

モオルダアは遠くの方を眺めて何かを考えているようだったが、ふと何かを思いだしたようにポケットからあのボイスレコーダを取り出した。スケアリーは彼がボイスレコーダを取り出すのを気配で察知していた。モオルダアがボイスレコーダの録音ボタンを押すか押さないかという時、彼女はモルダアの方にさつと手を伸ばして彼の手からボイスレコーダを奪い取った。そして素早く窓を開けるとそれを車の外に放り投げた。投げられたボイスレコーダは比較的すいている反対車線に落ちた。そして、落ちてすぐにそこを走ってきたトラックがボイスレコーダを踏みつけていった。モオルダアの大事なボイスレコーダはバラバラに壊れてしまった。

「ああ、なんてことをするんだ」

モオルダアは車の中から壊れてしまったボイスレコーダを悲しそうに見つめていた。

「バラバラになったのがあのボイスレコーダで良かったんじゃないやありませんの？ あたくし一歩間違えたらあなたをあんな風にしてしまうところでしたわ」

スケアリーがせいせいしたという感じで言っているのを見て、モオルダアは何も言えなくなった。

「だいたい、あなたはあのボイスレコーダの使い方を解っていましたの？ あなたがあれを使って話の内容をまとめて

くれて、作者様は助かったかも知れませんがねえ、でもそれは所詮パクリですわ。あたくしはそういうのは好きではありませんから。これからは作者様も気をつけてくださいませ」

はい、すいませんでした。私もスケアリーにバラバラにされてしまうところでした。

モオルダアはその後、なるべくスケアリーの機嫌を損ねないように静かに助手席に座っていた。モオルダアはいつか自分の車を手に入れて、その車の中で好きなだけボイスレコーダに録音しようと心に決めていた。

## 17

二人の報告書に書かれたそれ以後のこと

署長が捕まった後、新しい署長にはセラビが適任だという声が警察署内であがったが、セラビはミイラ事件が一応解決するともう警察の仕事にはまったく興味を示さなかった。セラビはミイラ事件に費やした時間を取り戻すつもりらしく、南の島に家を立てて、残りの人生を楽しむつもりだそうだ。セラビはこれまで事件の捜査に明け暮れていて、贅沢など一つもしてこなかったのだから、お金を稼ぐ余裕は十分にあるということだ。なんだか羨ましい。

捕まった警察署長は警察で取り調べをうけているうちに心臓を患ってすっかり弱ってしまったそうだ。始めのうちは自分は潔白だと言い張っていたのだが、自分も先は長くないと解ると次第に事件の真相を語り始めた。これまでのミイラ事件の被害者は全員みな彼によつてあの社のところまでつれてこられたようだ。一番始めにセミ神様への生け贄を捧げる時には彼も半信半疑だったのだが、翌朝彼が山の中でミイラになった遺体を見つけると彼はセミ神様の存在を確信したようである。

今では心の病院に入院しているヒトオ少年の件についても、署長は真相を語った。ヒトオ少年はグタグタ遺体事件の実行犯であった。しかし、それは署長が彼を脅迫してやらせたことであつた。ヒトオ少年がタバコを吸っているところを偶然見つけた署長は

「これが見つかつたら、キミの大学の推薦入学は取り消されてしまいますよ。うん、うん」

と例の感じで脅して、ヒトオ少年を自分の言いなりにさせたということだ。それにしてもたかが推薦入学のために人殺しとは。モテモテの優等生も意外と軟弱な精神だったようだ。

それから、コビテ刑事のひき逃げ事件も署長の仕業だった。トラックを運転していたのは元警察の人間だったらいい。この犯人はいま海外に逃亡しているということだがそのうち捕まるだろう。

これだけの悪事を働いた署長にはさうとうの刑罰が下されるであろう。しかし、その前に病気のためにかれの人生は終わってしまうかも知れない。噂によると署長は、グタグタ遺体事件後のヒトオ少年のようにおかしな行動をするようになったということだ。これはもしかするとセミ神様の祟りというやつなのだろうか。しかしそんなことは誰にも解らない。あの夜、森に現れた怪物が果たしてセミ神様なのか、或いはこれまで誰にも見つからずにあの近辺で生きてきた新種の生き物なのか。それともあれは妖怪？ 宇宙人？ もしかして、そんな怪物なんて始めつから存在しなかった？

あの怪物が何も残さずに溶けてしまった今ではどんな説も正しそうであり、間違っていそうでもある。

エフ・ビー・エルの二人が下田を離れてから数日後、スケアリーの元へ宿屋の若女将アイから手紙が届いた。アイは事件の夜の怖い体験で女スパイの夢は諦めたということだった。高校を卒業したら電話会社のようなところ勤めて、いろいろな人の会話が勝手に聞こえてしまうような仕事をしたい思っているらしい。それから手紙には、モオルダアにエロ本を読むのをやめるように伝えてくれとも書かれてあった。

モオルダアの元へは下田歌劇団の団員から手紙が届いた。あの「セミ女」の話を大幅に改良したらいい。話の中にセミ女を捕まえるためにやって来た捜査官というのが登場して地元の劇団員の少年と恋に落ちることになるらしい。モオルダアは楽屋で団員達に迫られた時のことを思い出して、ぞーっとしながら手紙を読んでいた。手紙には次の埼玉公演のチケットが一枚入っていた。あのスケアリーは連れてこないで必ず一人で見に来るように、と書かれていた。モオルダアはそれを読んで恐怖に震え上がった。

## 17

事件から数日後、警察の検分が終わった現場に下田歌劇団の団員達と宿屋のヒトミとアイ、そしてセラビの姿があった。彼らは身よりのない女アレルギーの団員のためにここに墓を作ったのだ。誰もがあまり口をきかずに墓参りをしてる。

「彼は女アレルギーのまま生きてるより、愛するもののために自ら犠牲になったんだから、この方が幸せだったんだろうなあ」

セラビがつぶやいた。その前ではヒトミとアイが並んで墓に向かって手を合わせていた。

墓標には女アレルギーの団員がヒトミへの思いを込めて作った詩が刻まれている。

触りたい

死んでもいいから

触りたい

なにもこんな詩でなくてもいいような気がします、きっと彼の思いはヒトミの心の奥深くまで届いたことでしょう。

#008 「サマータイム(第二話)・セシ神様」 Little Mustapha